

茂木遺跡群

稻荷窪 B 地点 遺跡

(「団体営土地改良総合整備事業茂木地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書II)

1998

群馬県勢多郡大胡町教育委員会

序 文

団体営土地改良総合事業に伴う茂木地区の発掘調査は、平成6～7年の2カ年に渡り稻荷窪A地点遺跡、稻荷窪B地点遺跡が行われました。ここに平成7年度刊行の稻荷窪A地点遺跡発掘調査報告書に続き、稻荷窪B地点遺跡の報告書を刊行いたします。

今回の発掘調査では、縄文時代～歴史時代の住居跡等が検出され、A地点遺跡と共に当地に於ける縄文文化や古墳文化を解明する貴重な資を提示されたものと思います。今後、本書が地域の歴史や文化を解明する上での一端となれば幸いです。

本書の刊行にあたり、多大な尽力を賜りました関係諸機関・地元関係各位にたいして、心から感謝の意を表すと共に作業に携わった作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成10年3月

大胡町教育委員会

教育長 銀持 平三郎

例　　言

1. 本書は、平成7年度団体営土地改良総合整備事業茂木地区に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査報告書であり、本事業の第2集である。
2. 発掘調査地区は、群馬県勢多郡大胡町茂木字稻荷窪と字梅沢に所在する遺跡群であるが、総称して稻荷窪B地点遺跡と称する。
3. 発掘調査は、平成7年6月10日より10月6日まで実施した。
4. 発掘調査は、大胡町教育委員会直営で実施し、山下敬信と藤坂和延が担当した。
5. 本書の作成は、編集・執筆を山下が行った。
6. 発掘調査によって出土した遺物については全て大胡町教育委員会で保管管理している。
7. 発掘調査から本書作成の過程で下記の方々や機関からご協力・ご指導をいただいた。記して感謝の意を表します。(敬称略・順不同)

群馬県教育委員会文化財保護課 大胡町農村整備課 勘測研 技研測量設計室 須賀工業㈱
真下高幸 小管将夫 緑田弘美 谷藤保彦 関根慎一 小島純一 子安和順 宮田毅 品田高志
中野純 寺崎裕助 関谷清治 井上美代子 大原きみ子 石井よね 勅使川原幸枝 小沢チヅエ
萩原秀子 菅田ツル 鈴木久美子 五十嵐文江 北爪珠美 田村志づ江 山下雅江

凡　　例

1. 発掘区は5m区画を作り、東西方向の西から数字、南北方向の南から北に向けてアルファベットを使用した。
2. 遺構実測図の方位記号は、真北を表す。
3. 遺構実測図に記した基準線は海拔で表した。
4. 遺構・遺物のスケールは下記の通りである。

全体図1:2000　調査区分別全体図1:600　遺構図1:60　カマド1:30

遺物図1:3～1:4

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

挿図目次・写真目次

I	発掘調査に至る経緯と遺跡の位置、環境	1
II	検出された遺構と遺物の概要	1
III	縄文時代の遺構と遺物	1~21
IV	古墳時代の遺構と遺物	22~61
V	歴史時代以降の遺構と遺物	61~64
IV	成果と問題点	65~69

挿 図 目 次

第1図	福荷窪A・B地点遺跡全体図	2	第25図	2号住居跡出土遺物（2）	26
第2図	I・II調査区全体図	3	第26図	3号住居跡	27
第3図	III・IV調査区全体図	4	第27図	3号住居跡出土遺物	28
第4図	J1号住居跡	5	第28図	4号住居跡	28
第5図	J1号住居跡出土遺物（1）	6	第29図	4号住居跡出土遺物	29
第6図	J1号住居跡出土遺物（2）	7	第30図	5号住居跡	30
第7図	J2号住居跡	8	第31図	6号住居跡	31
第8図	J2号住居跡出土遺物	9	第32図	6号住居跡出土遺物	32
第9図	J3号住居跡	10	第33図	7号住居跡	33
第10図	J3号住居跡出土遺物（1）	11	第34図	7号住居跡出土遺物（1）	34
第11図	J3号住居跡出土遺物（2）	12	第35図	7号住居跡出土遺物（2）	35
第12図	1号土坑	13	第36図	7号住居跡出土遺物（3）	36
第13図	2号土坑	14	第37図	7号住居跡出土遺物（4）	37
第14図	1号集石土坑・同出土遺物	15	第38図	8号住居跡	39
第15図	2号集石土坑・同出土遺物	15	第39図	8号住居跡出土遺物	40
第16図	包含層出土遺物（1）	16	第40図	9号住居跡	41
第17図	包含層出土遺物（2）	17	第41図	9号住居跡出土遺物（1）	42
第18図	包含層出土遺物（3）	18	第42図	9号住居跡出土遺物（2）	43
第19図	包含層出土遺物（4）	19	第43図	10号住居跡	44
第20図	包含層出土遺物（5）	20	第44図	10号住居跡出土遺物	45
第21図	1号住居跡	22	第45図	11号住居跡	46
第22図	1号住居跡出土遺物	23	第46図	11号住居跡出土遺物	47
第23図	2号住居跡	24	第47図	12号住居跡	48
第24図	2号住居跡出土遺物（1）	25	第48図	12号住居跡出土遺物	49

第49図	13号住居跡	50	第59図	18号住居跡	58
第50図	14号住居跡	51	第60図	18号住居跡出土遺物（1）	59
第51図	14号住居跡出土遺物（1）	52	第61図	18号住居跡出土遺物（2）	60
第52図	14号住居跡出土遺物（2）	53	第62図	19号住居跡	62
第53図	15号住居跡	53	第63図	19号住居跡出土遺物	63
第54図	15号住居跡出土遺物	54	第64図	III調査区溝状遺構	64
第55図	16号住居跡	55	第65図	円筒形土器集成図（1）	66
第56図	16号住居跡出土遺物	56	第66図	ノ	67
第57図	17号住居跡	56	第67図	木の葉形土器集成図	68
第58図	17号住居跡出土遺物	57			

写真目次

PL 1	遺跡全景		7—3	8号住居跡（西より）	
PL 2—1	I・II調査区		7—4	同住居跡遺物出土状況	
2—2	III調査区		7—5	9号住居跡遺物出土状況（南より）	
PL 3—1	J 1号住居跡		7—6	同住居跡カマド	
3—2	J 1号住居跡出土遺物		PL 8—1	9号住居跡遺物出土状況（近摺）	
3—3	J 2号住居跡		8—2	9号住居跡（南より）	
3—4	1号集石土坑		8—3	10号住居跡（西より）	
3—5	J 3号住居跡		8—4	10号住居跡カマド	
3—6	2号集石土坑		8—5	11号住居跡（西より）	
PL 4—1	1号住居跡（西より）		8—6	作業風景	
4—2	同住居跡遺物出土状況		PL 9—1	12号住居跡（西より）	
4—3	2号住居跡（西より）		9—2	同住居跡遺物（No.4）出土状況	
4—4	同住居跡カマド跡		9—3	同住居跡カマド	
4—5	3号住居跡（西より）		9—4	13号住居跡（西より）	
4—6	同住居跡遺物出土状況		9—5	14号住居跡（西より）	
PL 5—1	4号住居跡（東より）		9—6	同住居跡遺物出土状況	
5—2	同住居跡遺物出土状況		PL 10—1	15号住居跡（西より）	
5—3	5号住居跡（西より）		10—2	同住居跡遺物出土状況	
5—4	6号住居跡セクション		10—3	16号住居跡（東より）	
5—5	6号住居跡遺物出土状況		10—4	同住居跡カマド	
5—6	同住居跡遺物（No.1・2）出土状況		10—5	17号住居跡（西より）	
PL 6—1	6号住居跡（西より）		10—6	同住居跡遺物出土状況	
6—2	7号住居跡円筒形土器（No.28）出土状況		PL 11—1	18号住居跡（南西より）	
6—3	同住居跡セクション		11—2	同住居跡カマド	
6—4	同住居跡縞石出土状況		11—3	同住居跡縞石出土状況	
6—5	同住居跡遺物出土状況		11—4	19号住居跡（西より）	
6—6	同住居跡カマド前面遺物出土状況		11—5	同住居跡カマド	
PL 7—1	7号住居跡（南より）		11—6	1号溝	
7—2	同住居跡カマド				

茂木遺跡群

稻荷窪B地点遺跡

(「団体営土地改良総合整備事業茂木地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書II)

I 発掘調査に至る経緯と遺跡の位置、環境

本遺跡の発掘調査は、平成6年度より開始された団体営土地改良総合整備事業茂木地区の平成7年度事業に伴い実施された。当教育委員会は、稻荷窪A地点と同様に遺跡範囲確認の試掘調査を実施し、工事概要に即した取り扱いを当町農村整備課と協議。工事概要から遺跡範囲を確定し、同年6月により発掘調査を開始した。

本遺跡の位置と環境については、平成8年度刊行の稻荷窪A地点遺跡を参照していただきたい。

II 検出された遺構と遺物の概要

平成6年度に調査された稻荷窪A地点遺跡と同台地上の北方に続く稻荷窪B地点遺跡（第1図）では、台地中央部～南西傾斜面のI調査区（第2図）、それに続く台地平坦部のII調査区（第2図）、同台地の西に溝入した低地部から西～南西傾斜面で構成されるIII調査区（第3図）、低地を挟んで小さく突出する字梅沢地区のIV調査区（第3図）に縄文時代・古墳時代後期・歴史時代の遺構・遺物を検出した。

I調査区は稻荷窪A地点遺跡が選定する台地を南北に区画する道路の北方にあり、13号住居跡が位置する東傾斜面から縄文時代の遺構・遺物が集中する台地平坦部、そして西～北方に伸びる西傾斜面から14・15号住居跡が位置する平坦部を総称する。18号住居跡と15号住居跡の位置する平坦部は、ローム面に達する整地事業が行われた、遺跡の存在は皆無と考えられる。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3軒、集石遺構2基、土坑が検出され、前期初頭黒浜式期～中期後葉加曾利E2式等の遺物が出土した。1号集石遺構からは内面朱塗の有孔鰐付土器がある。古墳時代後期の竪穴住居跡は、18号住居跡を最南端として北方に5軒が検出された。

II調査区は、I調査区から伸びる道路敷部分を中心として調査区を設定し、北方部分で古墳時代後期の13号住居跡を検出したのみである。

III調査区は切土部分を中心とした調査区で、台地の西に溝入した小谷地部分と西～南西傾斜面からなる。この調査区では、古墳時代後期の住居跡が12軒、B軽石を覆土上面に堆積する1号溝や近世と考えられる地割りの溝等を検出した。

低地部で検出された古墳時代後期の竪穴住居跡には、人為的にローム土で埋められた6・7・8・11号住居跡があり、1号溝の掘削土による埋め土と考えられる。

出土品としては、県内では類例の少ない円筒形土器が7号住居跡から、西毛地区で多く見られる木の葉形土器が9号住居跡から検出された。

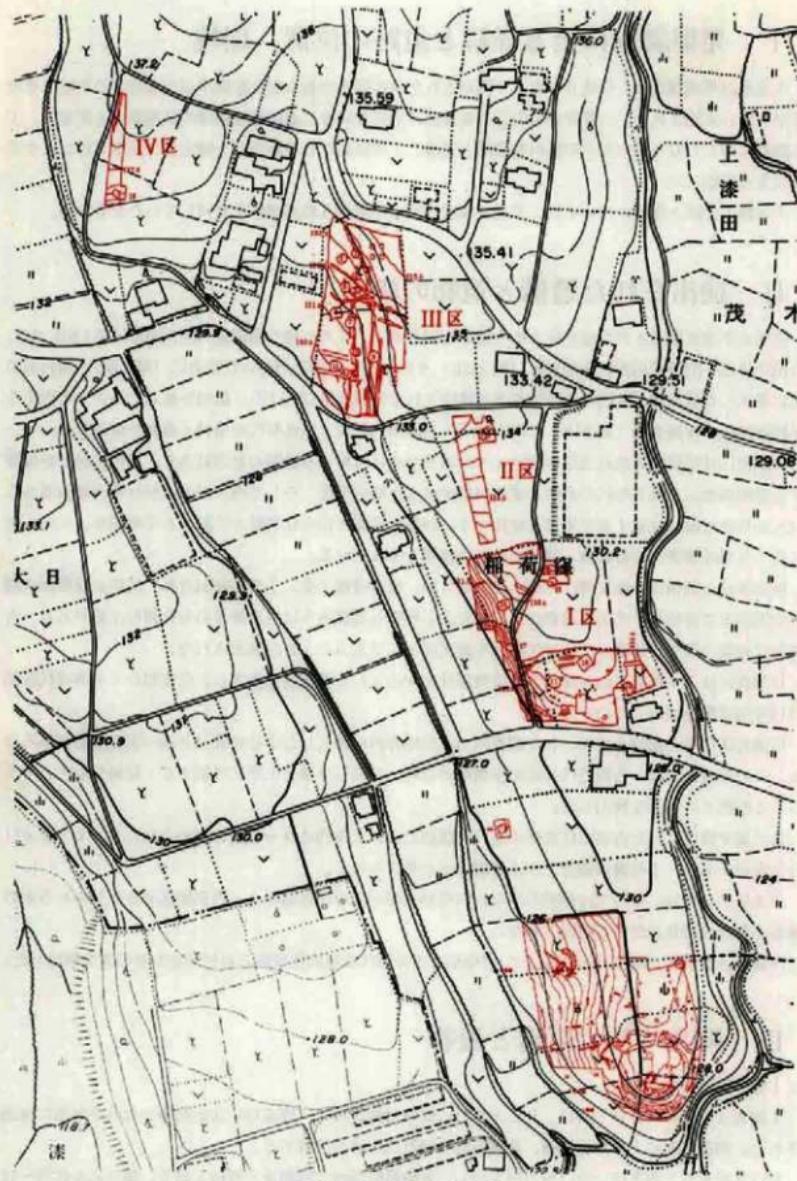
IV調査区は新設道路部分の調査区で、南端部で歴史時代の竪穴住居跡と近世の地割りの溝を検出した。

III 縄文時代の遺構と遺物

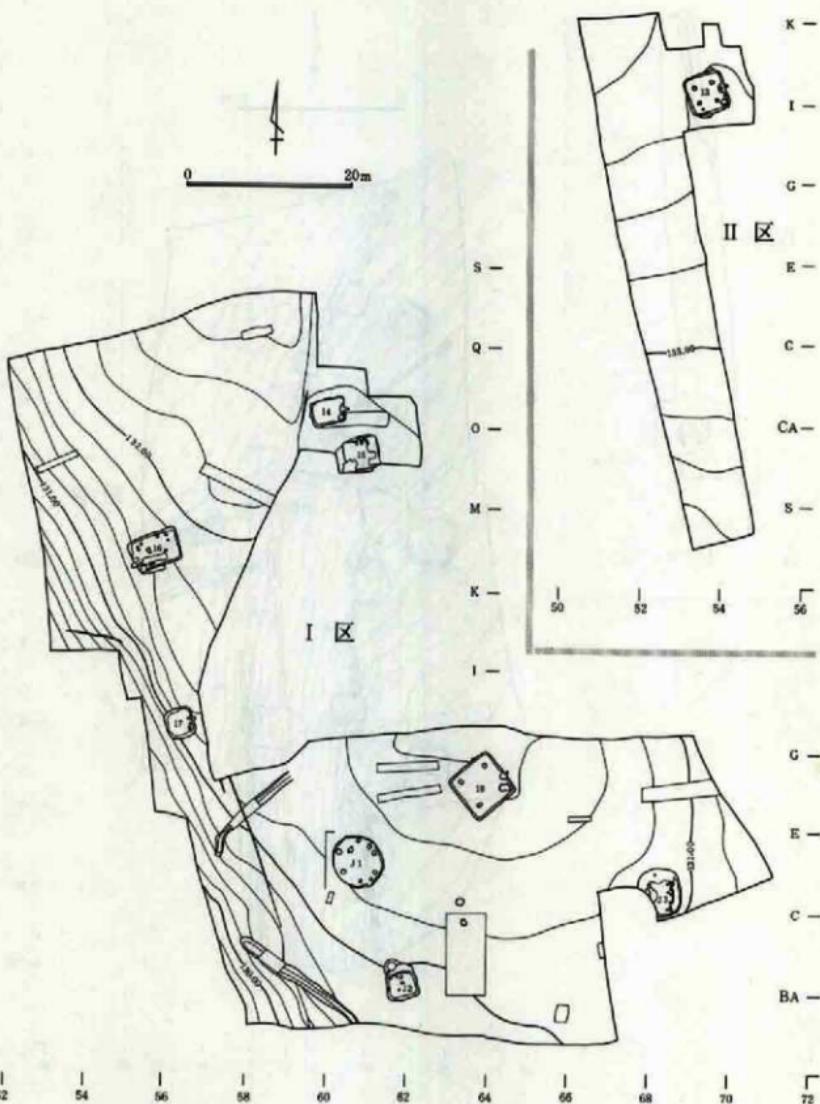
J 1号住居跡（第4図）

I調査区のBC・BD-60G、BC・BD-61Gに跨がって、標高131.30m前後の台地平坦部に検出された。南東方向にJ2号住居跡、北東方向に18号住居跡が位置する。

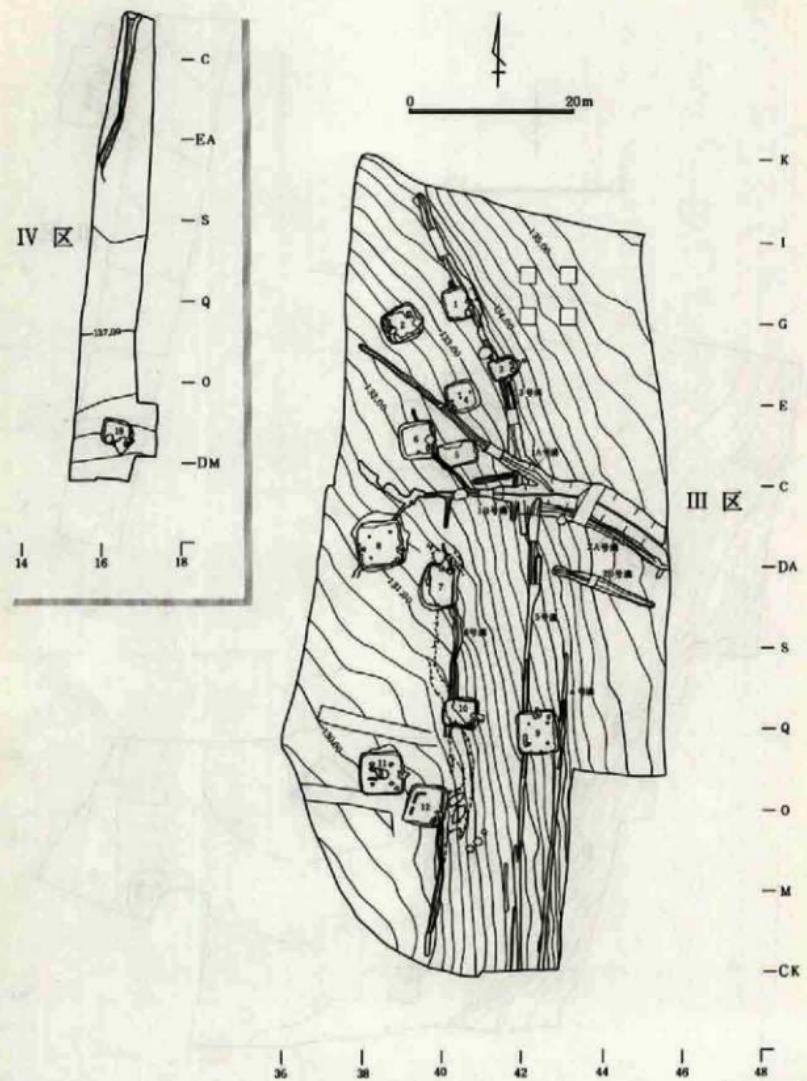
形状は南東～北西方向に長い横円形を呈し、長軸長6.55m、短軸長5.97mを測る。掘り込みは21～42



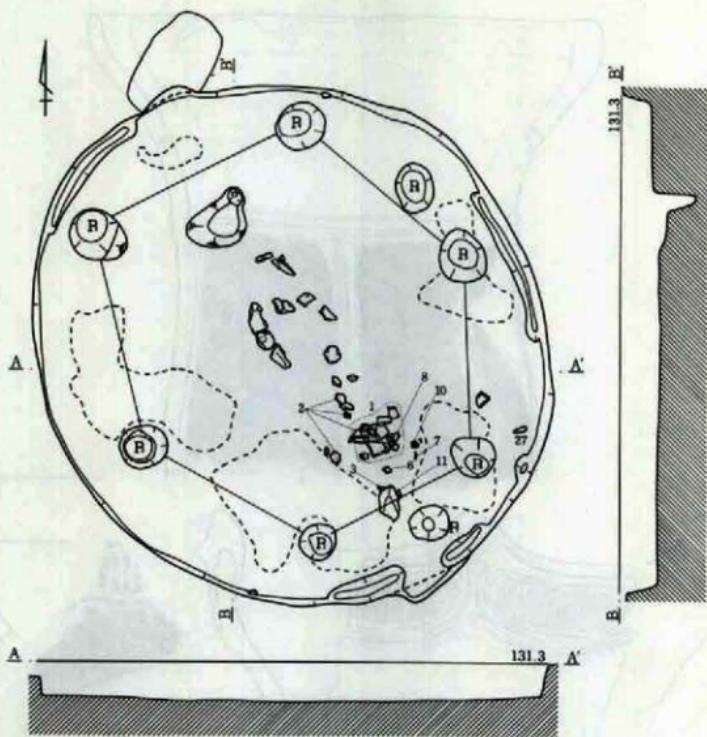
第1圖 福荷窪A・B地点遺跡



第2図 I・II調査区



第3図 III・IV調査区

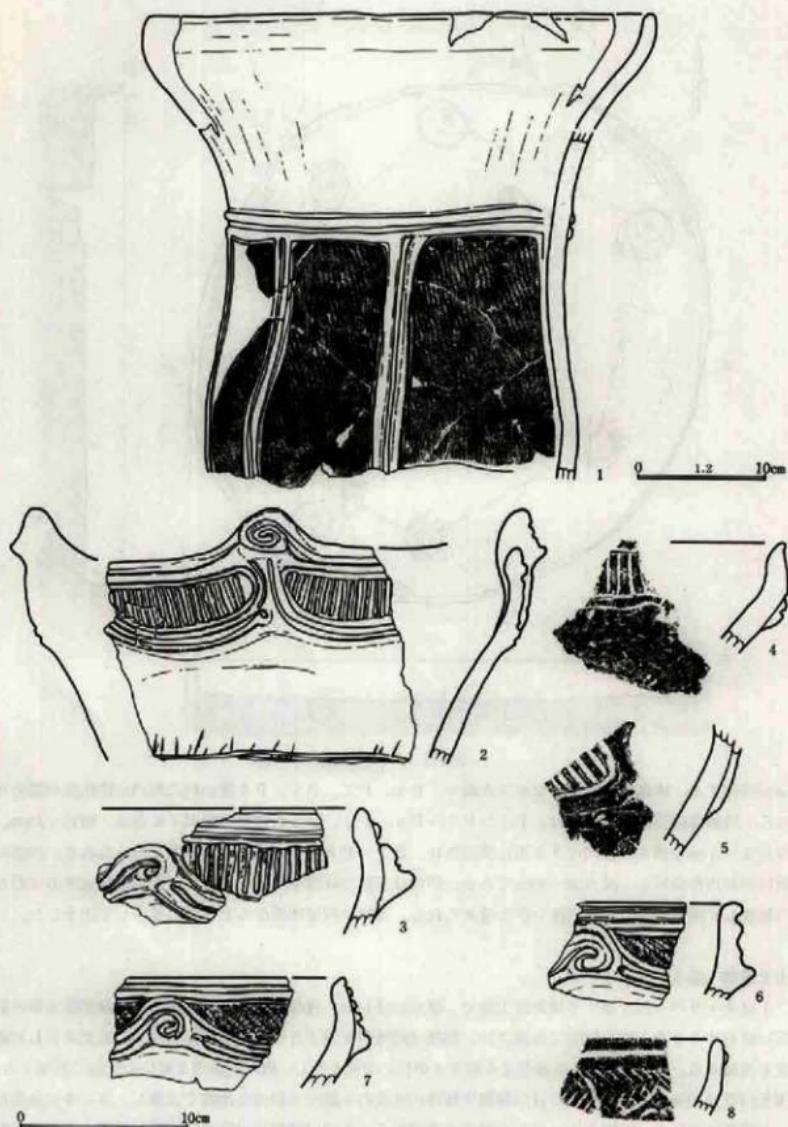


第4図 J1号住居跡

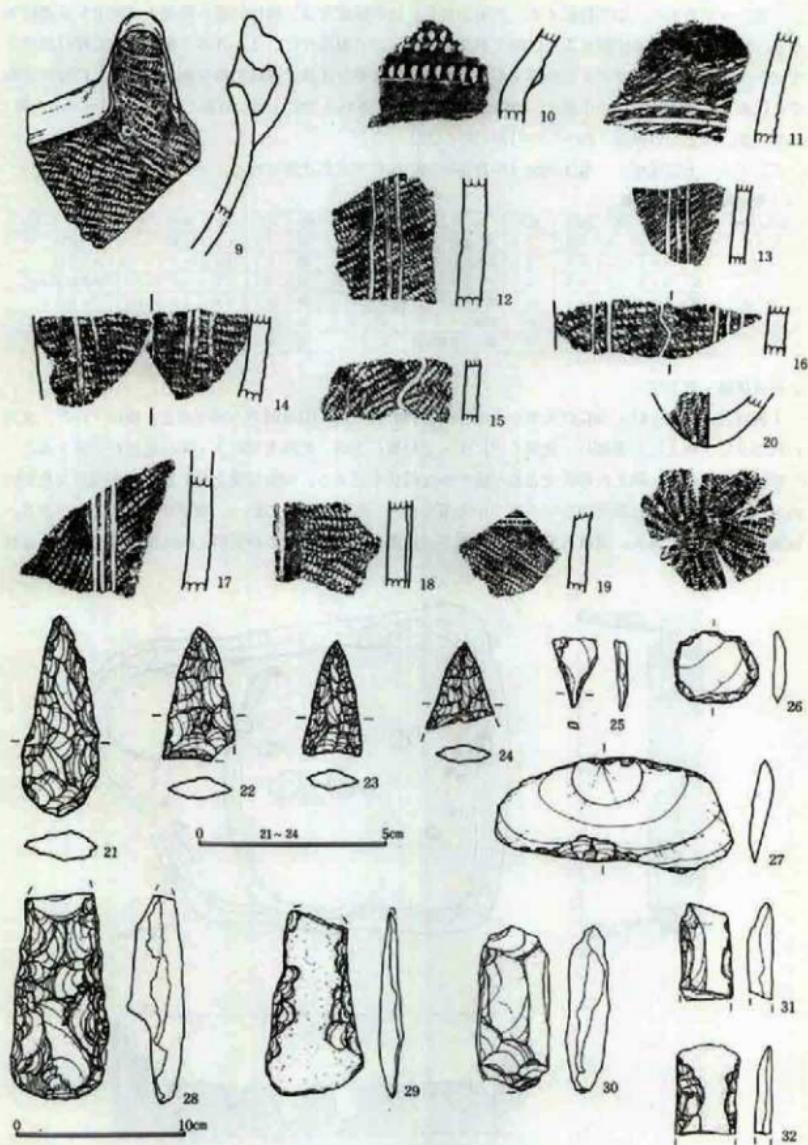
cmが残存する。床面はほぼ平坦なローム面で、P1、P2、P5、P6等の柱穴周辺に硬化面が認められる。周溝は部分的に検出され、P1～P7～P6、P3、P5の背後の壁面下にある。幅15～20cm、深さ2～5cmを測る。柱穴は9カ所に検出され、P1～P6の6本柱穴が主柱穴と考えられる。形状は梢円形が円形を呈し、深さ58～69cmである。炉址は床面のはば中央部に位置し、西辺を構成する3石から推察して南方が開口する石囲い炉と考えられる。遺物は炉址前面からP5間に集中して出土した。

出土遺物（第5・6図1～32）

1はキャリバー形を呈する深鉢形土器で、復元口径40cm、残存器高36.5cmを測る。口縁部無文帯と胴部は併走する2本1組の隆帯で区画され、胴部は同隆帯を垂下させて方形区画を作る。地文はRLの繩文を充填する。2は沈線による渦巻文を施す4単位の突起を有し、梢円区画内を縦位の沈線で充填する。復元口径は39cmである。3～5は口縁部文様体の区画内を縦位や斜位の沈線で充填し、3と6には突出した渦巻文を配し、区画内にはRLの繩文を充填する。8の口縁部片は隆帯区画内に沈線を矢羽状に配し、山形の隆帯に沿わせて円形刺突文を施す。9は楕状把手を付し、口縁部無文帯を有する。施文はR



第5圖 J 1号住居跡出土遺物 (1)



第6圖 J 1号住居跡出土遺物 (2)

Lの調文を充填する。加曾利E 4式に比定される。10の頸部片は、横位に巡る隆帯上に刺突文を連続させる。11の頸部片には沈線による区画文が巡る。12~17の頸部片は、2~3本1組の沈線と蛇行懸垂文を垂下させる。18は隆帯による懸垂文が垂下する。19は平行沈線に連続爪形を施し、頸部と口縁部文様帯を区画する諸磯a式期の土器片。20は前期初頭に比定される尖底土器。石器としては、21~24の石鎌、25の石錐、26と27の搔器、28~32の打製石斧が出土した。

床面出土の土器様相から本住居跡は中期後半加曾利E 2式に比定される。

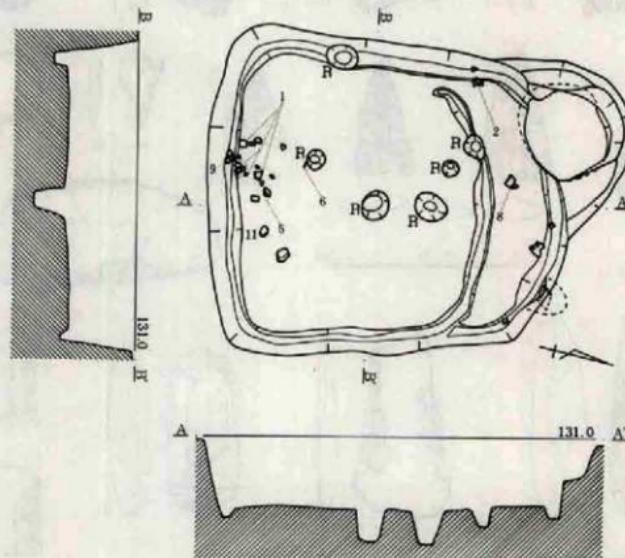
J 1号住居跡出土石器法量

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質
21	石錐	5.3	2.0	0.8	7.4	黒色頁岩	22	石鎌	3.5	1.9	0.6	3.1	黒色頁岩
23	石錐	3.0	1.5	0.5	2.0	黒色頁岩	24	石鎌	2.3	1.8	0.4	1.4	黒色頁岩
25	石錐	4.1	2.7	0.6	6.0	ディサイト	26	石斧	4.3	5.1	0.7	21	緻密頁安山岩
27	石錐	6.9	14.3	1.3	126	黒色頁岩	28	石斧	12.5	5.8	3.2	275	ディサイト
29	石斧	11.1	5.8	1.4	96	流紋岩	30	石斧	10.0	4.3	2.4	149	緻密頁安山岩
31	石斧	5.8	3.1	1.3	30	安山岩質凝灰岩	32	石斧	5.5	4.3	1.1	33	ディサイト

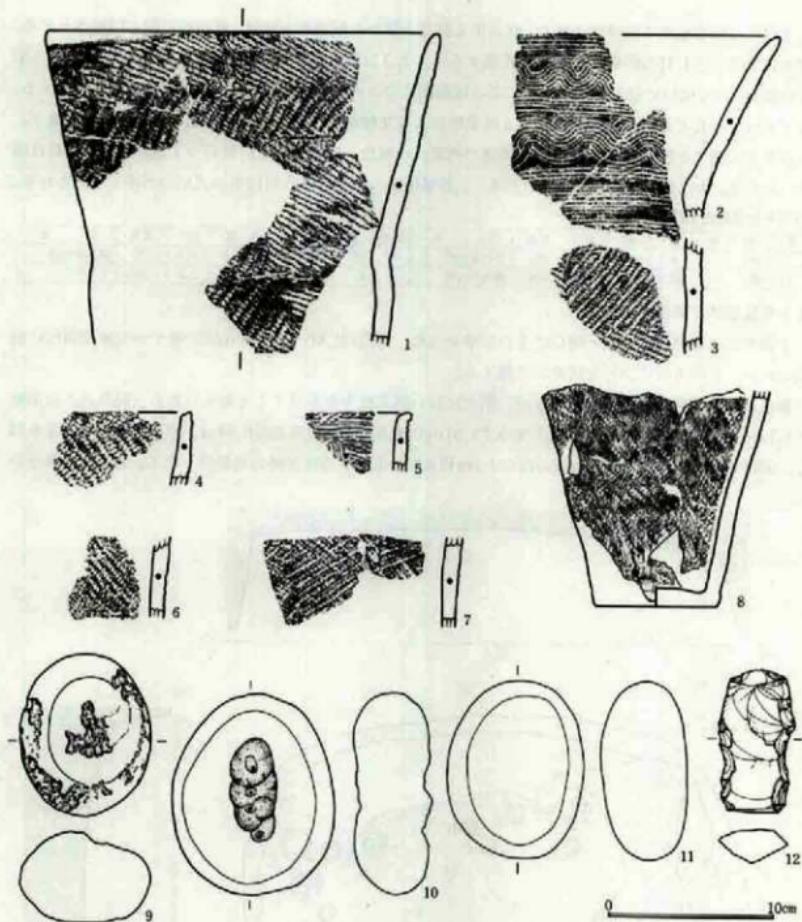
2号住居跡（第7図）

I調査区のBA—61・62Gに大半を占め、標高130.90~131.00m間の台地平坦部に検出された。北辺の西寄りに1号土坑が重複し、北東方向に1・2号集石土坑、北西方向にJ 1号住居跡が位置する。

形状は南北に長い楕丸台形状で北辺が緩やかな弧状を呈する。規模は南北長4.36m、東西最大長3.94mを測る。掘り込みは最大残存が西壁の中央部で85cm、南壁中央部で83cm、東壁中央部で77cmである。床面はほぼ平坦である。周溝は全周し、東壁下の周溝の途中から西方の周溝と60cm前後幅で併走する拡



第7図 J 2号住居



第8図 J 2号住居跡出土遺物

張前の周溝がある。幅10~20cmで深さ8~15cmを測る。柱穴は6カ所に検出され、P 1はほぼ中央部に配され、35×33cmの円形で深さ40cmである。P 2はP 1の北方30cm程で、42×33cmの楕円形で深さ43cmを測る。P 3~P 5は20~30cm前後の楕円形か円形で深さ15~28cmである。P 6は西壁下の周溝内やや南寄りに配され、39×28cmの楕円形で深さ35cmである。炉址の存在は検出されなかった。遺物は南壁下の中央部分に集中し、北方部分にも散在して出土。

出土遺物（第8図1~12）

1は平口縁を呈する深鉢形土器で、直立する胸部上位から屈曲部を設け、直線的に開く口縁部とする。地文は無節RとLRの斜縞文を交互に充填する。2と3は同一個体と考えられ、2は直線的に大きく開く口縁部で、横位に巡らす平行沈線による区画内にコンパス文を施す。胸部片は羽状縞文を構成する。4と6は、LRとRLの縞文を施す。5は条線により文様を意匠する。7は付加条の縞文原体を施す。8はRLの縞文を施す底部で、諸磯a式期の所産。石器は、磨石3点と打製石斧1点がある。9には細かい敲打痕、10は表裏面に凹痕が見られる。土器様相から本住居跡は前期黒浜式期の所産と考えられる。

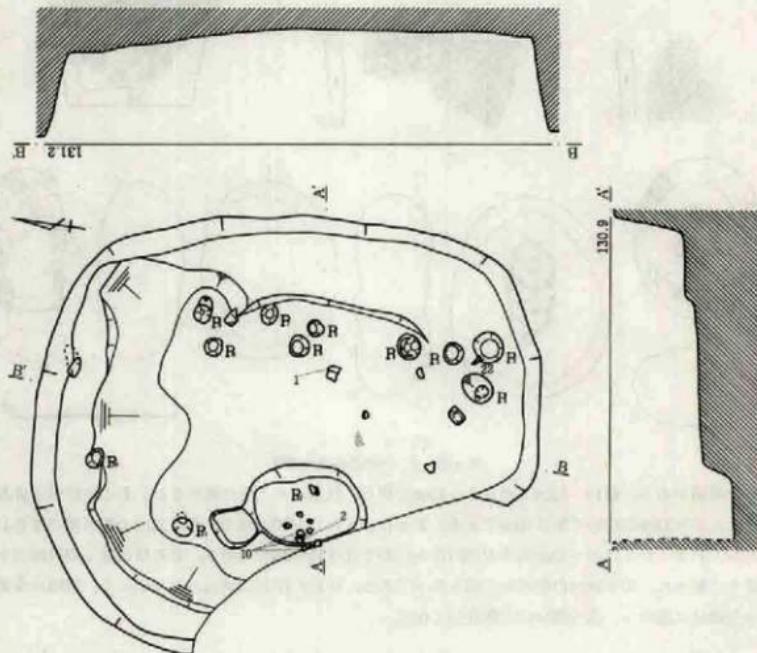
J 2号住居跡出土石器法量

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質
9	磨石	9.7	7.9	5.4	565	輝石安山岩	10	磨石	12.1	9.8	4.5	712	輝石安山岩
11	磨石	10.7	8.2	5.2	609	輝石安山岩	12	石斧	8.6	4.6	2.3	102	ディサイト

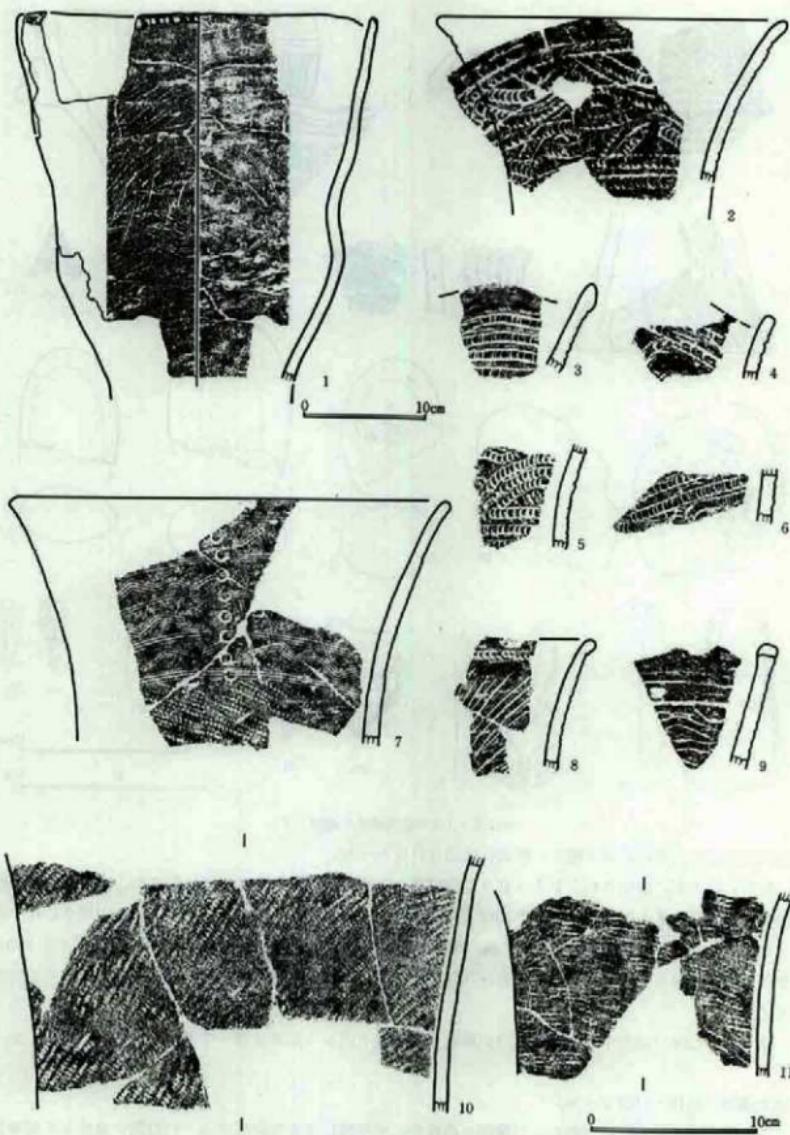
J 3号住居跡（第9図）

I調査区の東方B-C-67・68Gにその大半を占め、標高131.00~131.20m間の緩やかな東傾斜面に検出された。北西方向に18号住居跡が位置する。

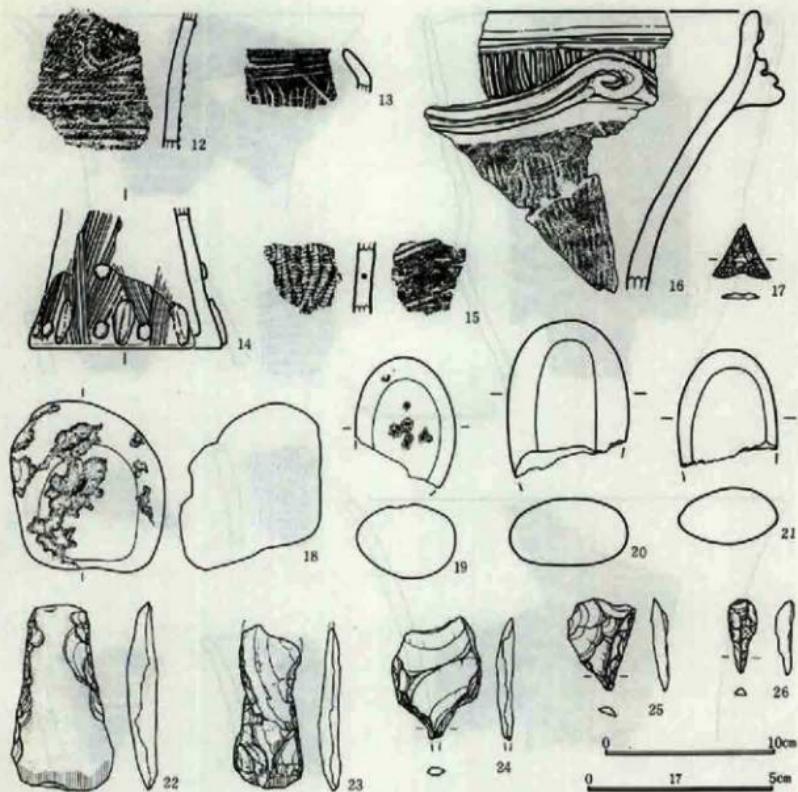
形状は南西部分が調査区外であるが、南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。掘り込みは南壁で1.13m、南東隅が95cm、北壁中央部分で1.01mである。規模は南北長6.08m、東西長5.35m前後を測る。床面は東壁に併走して10cm程の段が2.3m程あり、重複する住居跡の可能性がある。北方では緩やか



第9図 J 3号住居



第10圖 J 3號住居跡出土遺物（1）



第11図 J 3号住居跡出土遺物 (2)

な傾斜面が中央部に向けて続く。周溝は検出されなかった。

柱穴は11カ所に検出され、P 1～P 9は南壁下から東壁沿いの段差に部分に配され、20～40cmの円形か楕円形で深さ8～44cmである。P 10は北方の傾斜面への変換部に配され、P 11は斜めの掘り込みで深さ43cmである。中央部の西には南北に長い楕円形の土坑状掘り込みP 12がある。規模は南北長い1.45m、東西長97cmで深さ40cmを測る。炉址の存在は中央部やや南寄りに分布する焼土部分に地床炉の可能性を考えられる。

遺物はP 12部分に集中し、南方部分に散在する。覆土内から前期後葉～中期中葉の遺物が出土した。

出土遺物 (第10・11図 1～26)

1は胸部がくの字状に屈曲し、口縁部が直線的にやや開口する深鉢形土器。口唇部に連続する刻み目を施し、L Rの斜縞文を施す。内面は器面調整の削痕が残る。2～6は連続爪形文を伴う平行沈線で文

様を意匠する。3と4は波状を呈する口縁部片。7は平口縁を呈し、4条1組の条線を5段に横位に施し、条線間に同施文具で縦文を描き、恐らく4単位で円形刺突文を重下させる。8は口縁部文様帯を連続爪形を伴う平行沈線で区画し、区画内に沈線で肋骨を施す。9は山形突起を付す口縁部片で、平行沈線により波状文を施す。10はL Rの縦文を充填する胴部片。12は連続する刻み目を施す隆線で文様を意匠する諸種b式。13はくの字状に屈曲する口縁部片で、平行沈線で文様を意匠する。14は集合条線を矢羽状に施し、円・棒状の貼付文を付す諸種c式の所産。15は前期初頭の所産。16は隆線により渦巻文と区画文を施し、区画内を縱位の沈線で充填する加曾利E2式の所産。石器は、石鏃1点、多孔石1点、磨石3点、打製石斧2点、石錐2点、搔器1点がある。

土器様相から本住居跡は、前期諸種b～c式期の所産と考えられる。

J 3号住居跡出土石器法量

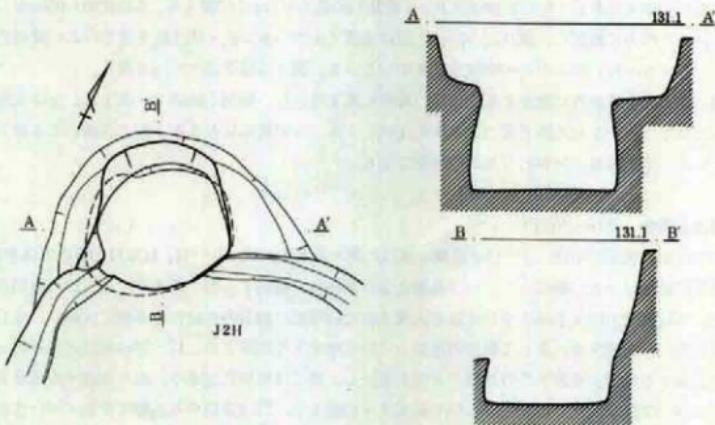
番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質
17	石 細	1.4	1.4	0.2	0.3	チャート	18	多孔石	10.3	9.3	8.4	1006	輝石安山岩
19	磨石	7.8	6.0	4.5	210	輝石安山岩	20	磨石	9.4	7.3	5.2	418	輝石安山岩
21	磨石	7.0	5.9	3.5	172		22	石斧	11.2	6.1	1.7	133	鐵質質安山岩
23	石斧	9.8	4.2	1.2	50	ダイサイト	24	石 錐	7.3	5.4	0.9	37	鐵質質安山岩
25	石 細	5.5	4.1	0.8	15	ダイサイト	26	石 鏃	4.4	1.7	1.0	6	砂岩

1号土坑（第12図）

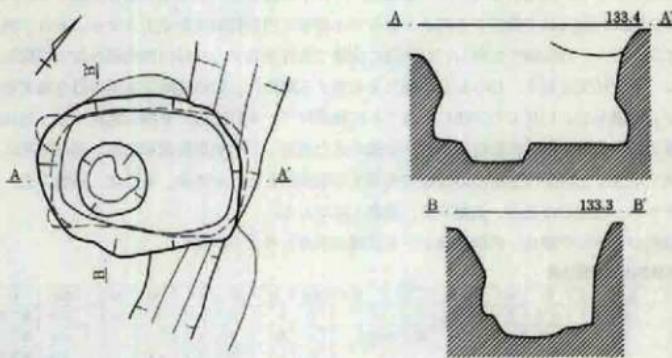
I調査区で検出されたJ 2号住居跡の北西部、BA-61Gに位置する。2段状の掘り込みを呈し、上部は下部は南北に長い隅丸方形の形状で、南北最大長1.28m東西長2.3mで深さ1.25mを測る。壁面はやや袋状となる。床面は平坦である。出土遺物は皆無であった。

2号土坑（第13図）

IV調査区の3号溝に切られ、1号住居跡と3号住居跡間の傾斜面のD F-41Gに位置する。傾斜方向に長い隅丸方形を呈する。規模は長軸長1.65cm、短軸長1.46cmを測り、掘り込みは袋状とし、最深部で1.06cmを測る。床面の南方に浅い掘り込みを有する。出土遺物は皆無であった。



第12図 1号土坑



第13図 2号土坑

1号集石土坑 (第14図)

1調査区の中央部B B—63Gに検出され、標高131.20m付近の平坦部に位置する。北方に2号集石が隣接し、南西にJ 2号住居跡、北西にJ 1号住居跡が配されている。

集石は長軸長85cm、短軸長68cmの楕円形の掘り込み内の上面をほぼ覆い、中央部に水平に据えられた2石を囲む様に周縁部に礫を配している。

遺物は集石間と周辺のグリットで検出された。底部から口縁部に至る破片から有孔鉢付土器と考えられる。内面には朱彩が施され、胸部は隆帶で文様を意匠する。

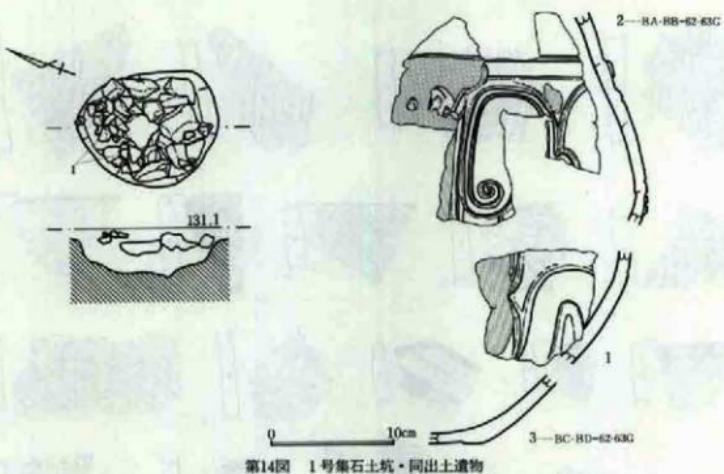
2号集石土坑 (第15図)

1調査区の中央部B C—63Gに検出され、1号集石の北方1.7mに位置する。集石は90~95cm程の円形の掘り込みと西方に散在し、掘り込み内は上面に堆積するカーボン粒・焼土粒を含むにぶい黄褐色土に配され、25~6cm程の礫が中央へ~南西部に集中している。深さは最深部で37cmを測る。

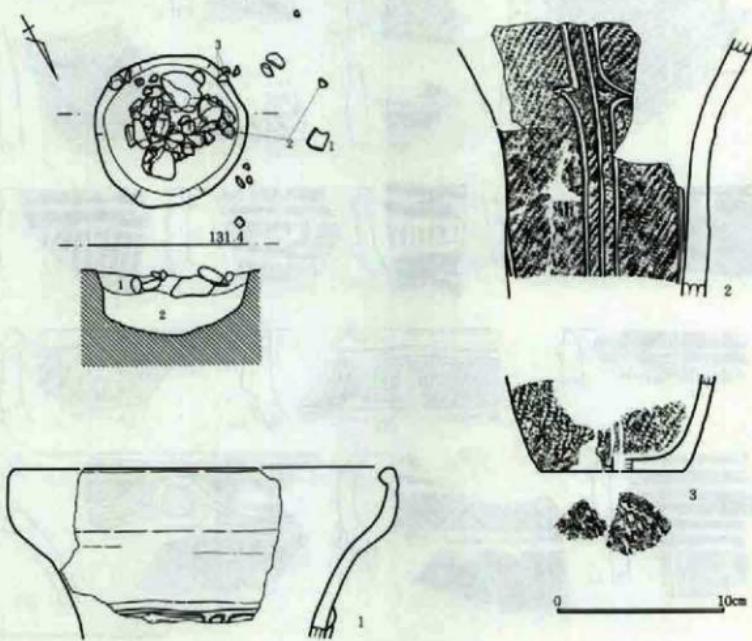
遺物は集石間と遺構外に散在する。1は口縁部を無文帶とし、胸部を隆帶で区画する。2は沈線で3本1組で垂下させ、左右の垂下文の途中を刺先状とする。3の底部にも3本1組の沈線による垂下文を施している。中期後葉の加曾利E 2式の所産である。

包含層出土遺物 (第16~20図 1~128)

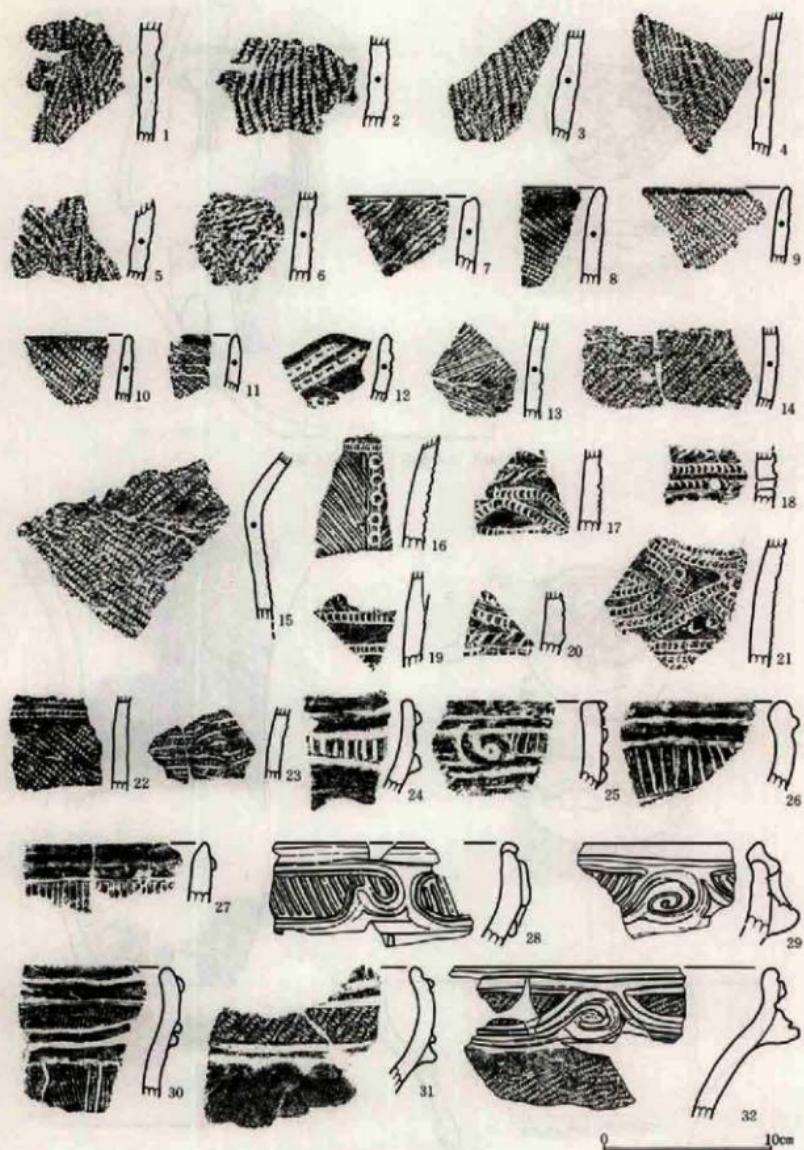
1~5は前期初頭の所産、6~15は前期中葉に比定される黒浜式。9~11、14は付加条の原体を施す。12は波状口縁を呈する口縁部で、13は条線により菱形文を構成するのであろう。16~23は前期後葉の諸織式。16は連続爪形文を施す平行沈線で区画された口縁部文様帶内を縦位の条線で区画し、左右対称に条線を斜位に充填する。そして縦位の条線上に円形刺突文を加飾する。17~20は斜位の刺み目を施す隆帶と連続する爪形文を施す平行沈線で文様を意匠し、18には補修孔がある。21は連続する爪形文を施す平行沈線で文様帶を区画し、胸部にR Lの斜繩文を施す。22は連続する爪形文を施す平行沈線で文様帶を区画し、胸部にR Lの斜繩文を施す。23は24~77は中期後葉の加曾利E 2式。24~29は隆帶に



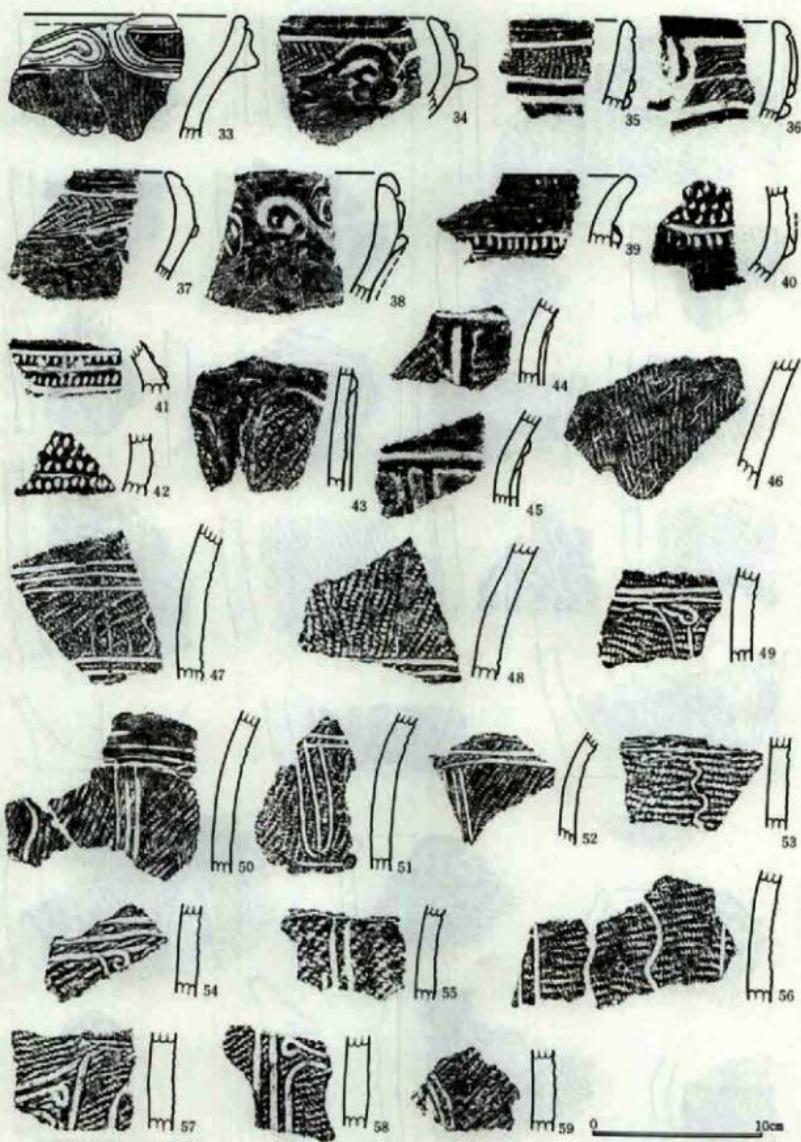
第14圖 1號集石土坑・同出土遺物



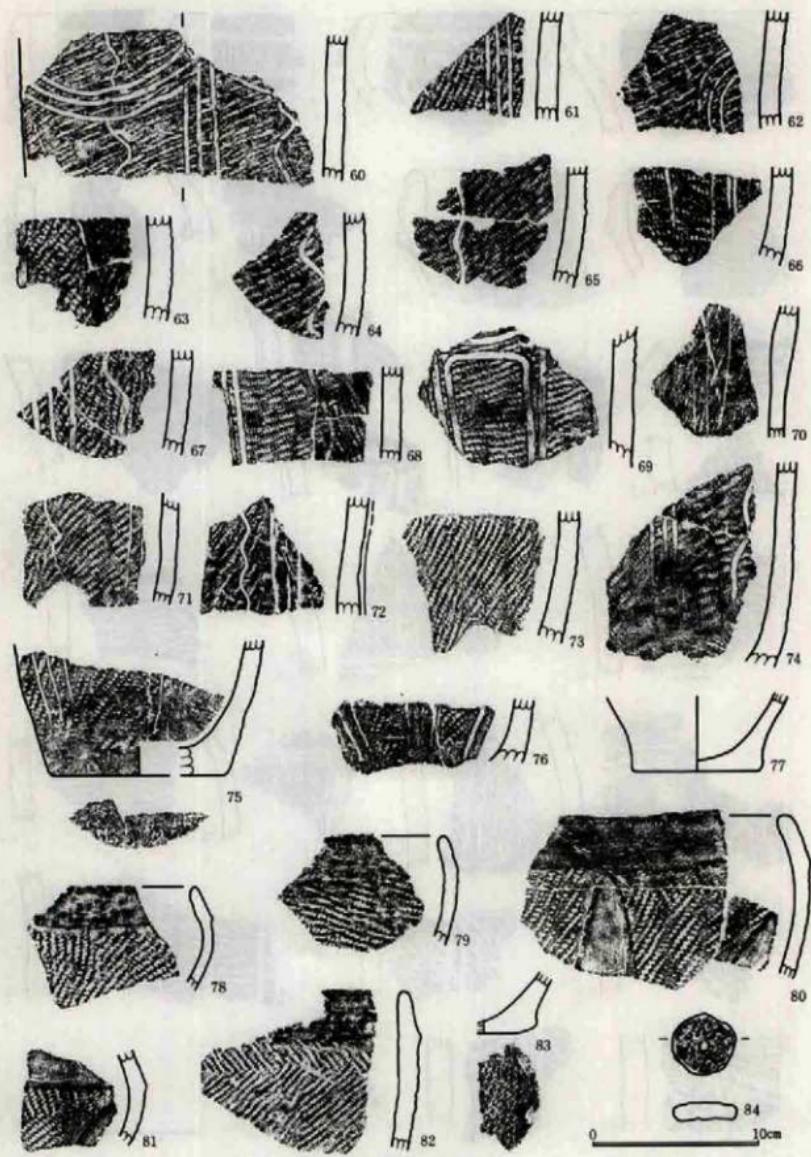
第15圖 2號集石土坑・同出土遺物



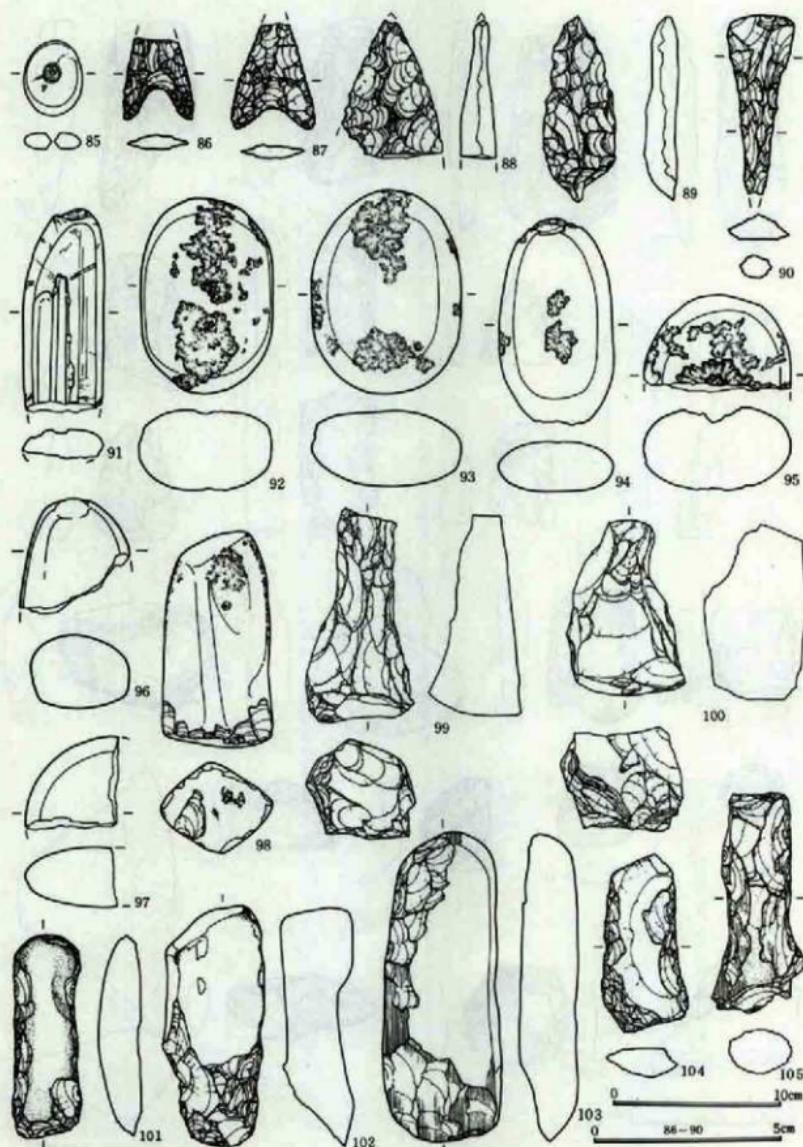
第16図 包含層出土遺物（1）



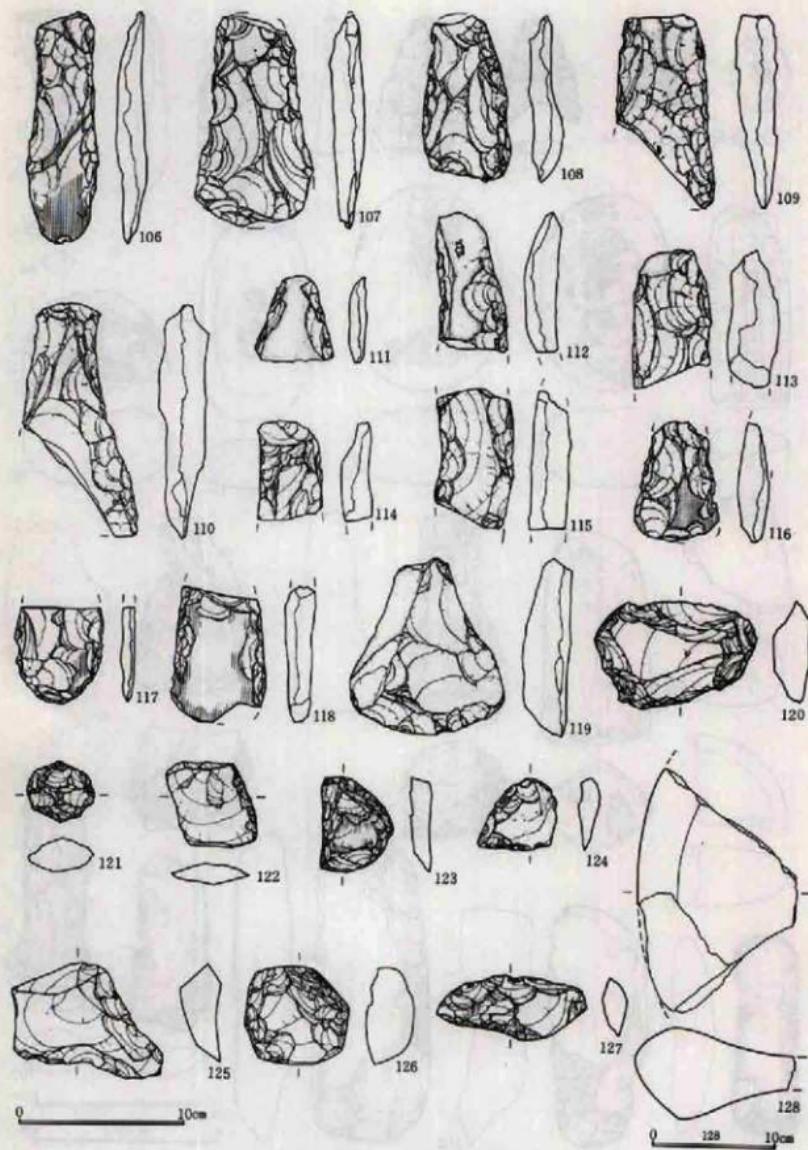
第17圖 包含層出土遺物（2）



第18圖 包含層出土遺物（3）



第19図 包含層出土物(4)



第20圖 包含層出土遺物（5）

より口縁部文様帶の楕円区画内を縱位か斜位の沈線で充填する口縁部片。30~37は楕円区画内を縦文で充填する。39~42は隆帯上や沈線文間に連続する刺突文を施す。43~77は頸部から底部片で、その大半が沈線により文様帶を区画して胴部には2~3本1組の懸垂文や蛇行懸垂文を施す。54、57と58には端部を渦巻文とする施文が見られる。78~82は口縁部に無文部を設ける加曾利E4式。83は後期の所産と考えられる底部片。84は土製円盤。

85は石垂。86~89は石錐。90は石錐。91は有溝砥石。92~96は磨石。98と99は凡字型石器。128は石皿片。

包含層等出土石器法量

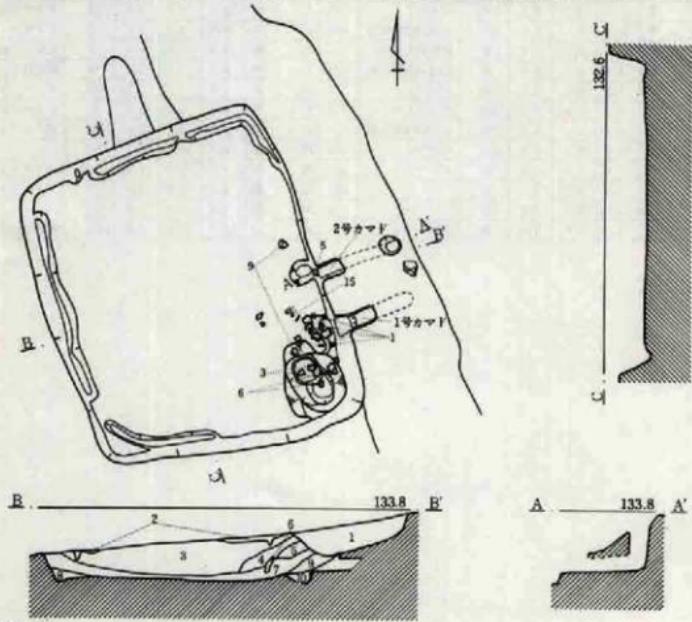
番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	
85	兼	4.4	3.4	0.9	23.4		86	石	圓	(2.1)	1.9	0.2	1.3	頁岩
87	石	圓	(2.0)	2.2	0.2	1.8	88	尖頭	圓	(3.3)	(2.7)	0.9	7.3	黒耀石
89	石	圓	4.0	1.9	9.7	8.5	90	石	圓	(4.8)	1.8	0.7	0.5	
91	石	12.2	4.8	1.7	150		92	磨	石	11.7	7.9	4.8	694	輝石安山岩
93	磨	石	12.2	9.0	4.6	743	94	磨	石	12.3	6.8	3.0	373	輝石安山岩
95	磨	石	5.9	8.9	4.9	306	96	磨	石	6.9	6.6	5.0	202	輝石安山岩
97	磨	石	5.6	5.5	3.7	139	98	叩	石	12.9	6.7	5.3	635	輝石安山岩
99	叩	石	12.9	6.4	5.7	441	100	スタンプ	石器	10.5	7.2	6.3	597	デイサイト
101	石	斧	12.3	4.1	2.5	167	102	石	斧	14.6	6.1	4.7	512	
103	石	斧	18.8	7.1	3.5	864	104	石	斧	10.7	5.2	1.8	121	安山岩質凝灰岩
105	石	斧	13.2	5.7	2.7	210	106	石	斧	13.8	4.3	1.8	126	安山岩質凝灰岩
107	石	斧	12.6	7.1	1.7	177	108	石	斧	10.0	5.3	1.7	102	デイサイト
109	石	斧	11.5	5.8	2.4	148	110	石	斧	13.9	6.9	3.0	219	安山岩質凝灰岩
111	石	斧	5.1	4.7	1.1	30	112	石	斧	8.4	4.1	2.0	88	緻密質安山岩
113	石	斧	8.2	4.8	3.1	152	114	石	斧	5.9	3.9	1.8	51	デイサイト
115	石	斧	8.3	4.8	2.2	124	116	石	斧	7.2	5.0	1.7	62	デイサイト
117	石	斧	5.7	5.2	1.6	39	118	石	斧	8.1	5.7	1.6	104	デイサイト
119	石	斧	10.6	9.3	2.8	231	120	削	器	6.4	9.7	2.3	157	
121	削	器	3.6	4.0	1.9	26	122	削	器	5.0	5.4	1.3	32	デイサイト
123	削	器	5.6	4.3	1.3	42	124	削	器	4.3	4.8	1.3	24	デイサイト
125	削	器	7.0	9.2	2.4	123	126	削	器	5.9	6.2	3.0	150	
127	削	器	3.9	8.9	1.5	48	128	石	皿	19.5	12.8	7.8	1435	輝石安山岩

IV 古墳時代の遺構・遺物

1号住居跡（第21図）

III調査区の北方に位置するD G-40Gの標高133.20～133.50mの緩やかな南北傾斜面に検出された。東辺と中央部分に溝状の掘り込みが通り、南西に3m離れて2号住居跡、南東方向に6m離れて3号住居跡が隣接する。

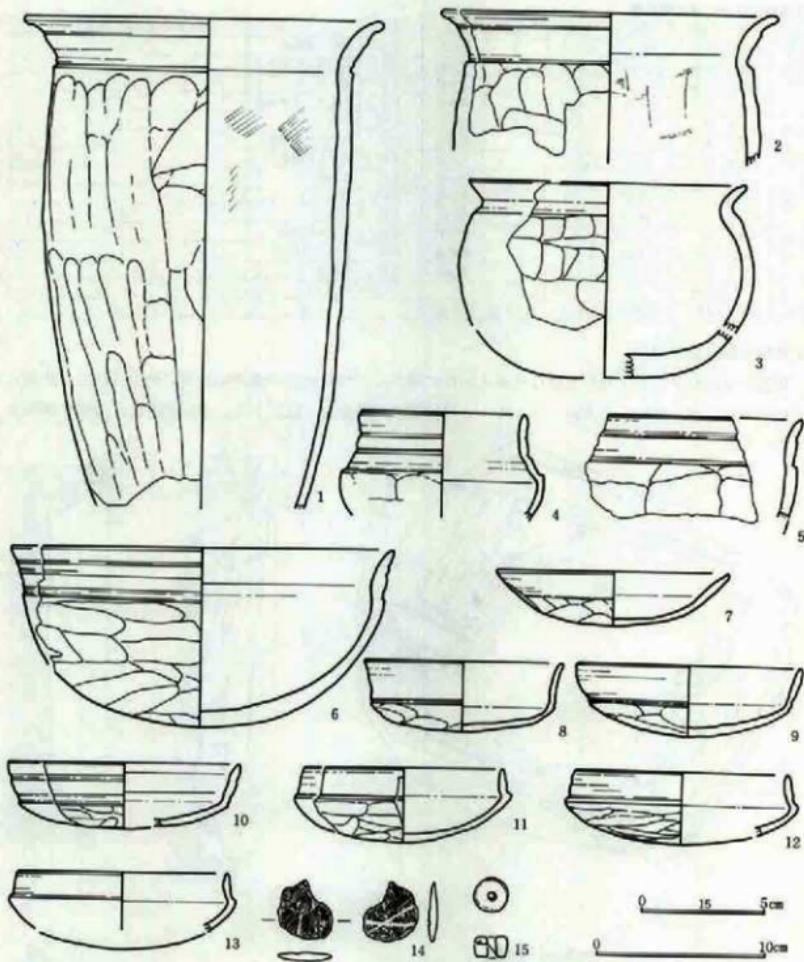
形状は南北に長い隅丸長方形を呈し、西辺が短い。規模は長軸長4.1m、短軸長3.33mを測る。主軸は、N-69°-Eに立てる。掘り込みは、最深部の南東隅で51cm、最浅部の北西隅で29cmが残存する。床面は、ほぼ平坦なローム面である。周溝は、途切れ途切れの状態で検出され、北東隅と北壁下は2cmの深さで、南隅部分で8cmの深さを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、規模は75×60cmの南北にやや長い隅丸方形で、内部に8の字形に重複する掘り込みがある。南方部は40×30cmの円形、北方部は35×30cmの隅丸方形で北方部が南方部より9cmほど深い。遺物等の出土状況から南から北へ作り替えがなされたと考えられる。このことは、カマドの作り替えに伴う行為によるカマドと貯蔵穴のセット関係で造作が行われたことが看取される。カマドは東壁に2ヵ所に検出されたが、前記した様に作り替えによる結果である。1号カマドは中央やや南よりに構築され、壁面を切り貫いたトンネル状の煙道



1号住居跡土層柱

1. 溝状遺構 2. 耕作土 3. 黒褐色土 少量のFPを含む 4. 黒褐色土 3層より明るい 5. 喀褐色土 黒褐色土と少量のローム粒を含む 6. 黒褐色土B 7. 喀褐色土 ローム粒・ロームBを含む 8. 黄褐色土 全体にソフトで喀褐色土を含む 9. 黄褐色土 ローム粒と喀褐色土を含む 10. 灰褐色粘土 煙土を含む

第21図 1号住居跡



第22図 1号住居跡出土遺物

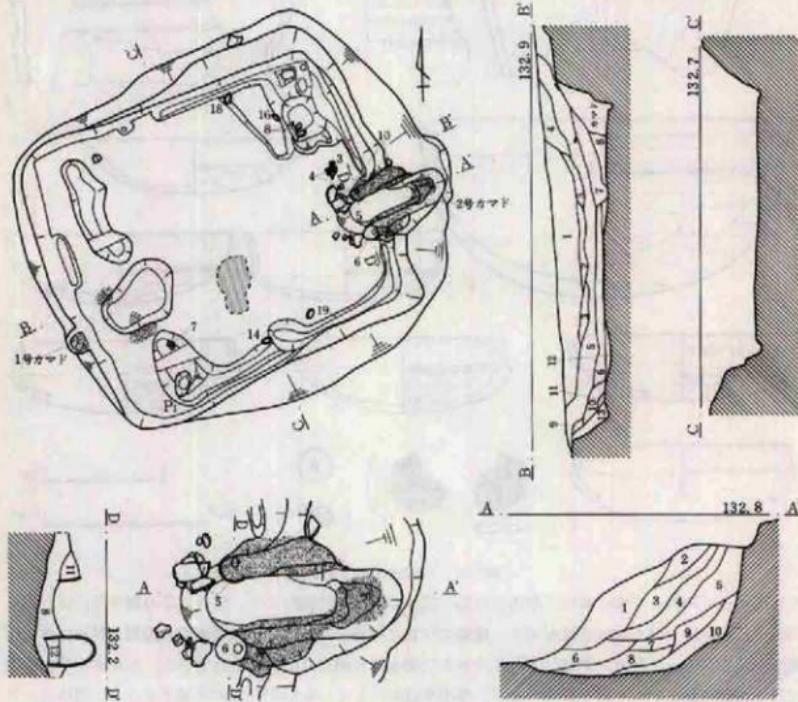
を1.05mほどの長さで東に設け、煙出部は25×22cmの楕円形で開口する。焚き口部の掘り込みは、25×30cmの円形気味で深さ10cm前後を測り、煙道より北に片寄って位置する。煙道部の側面と焚き口部に披熱部が見られる。2号カマドは、1号カマドより50cmほど南寄りに構築されている。トンネル状の煙道部は1m程の長さが削り貫かれているが、煙出部は開口していない未完成の状態であった。遺物は、カマドの前面と貯蔵穴部分に集中して出土した。

1号住居跡出土遺物観察表

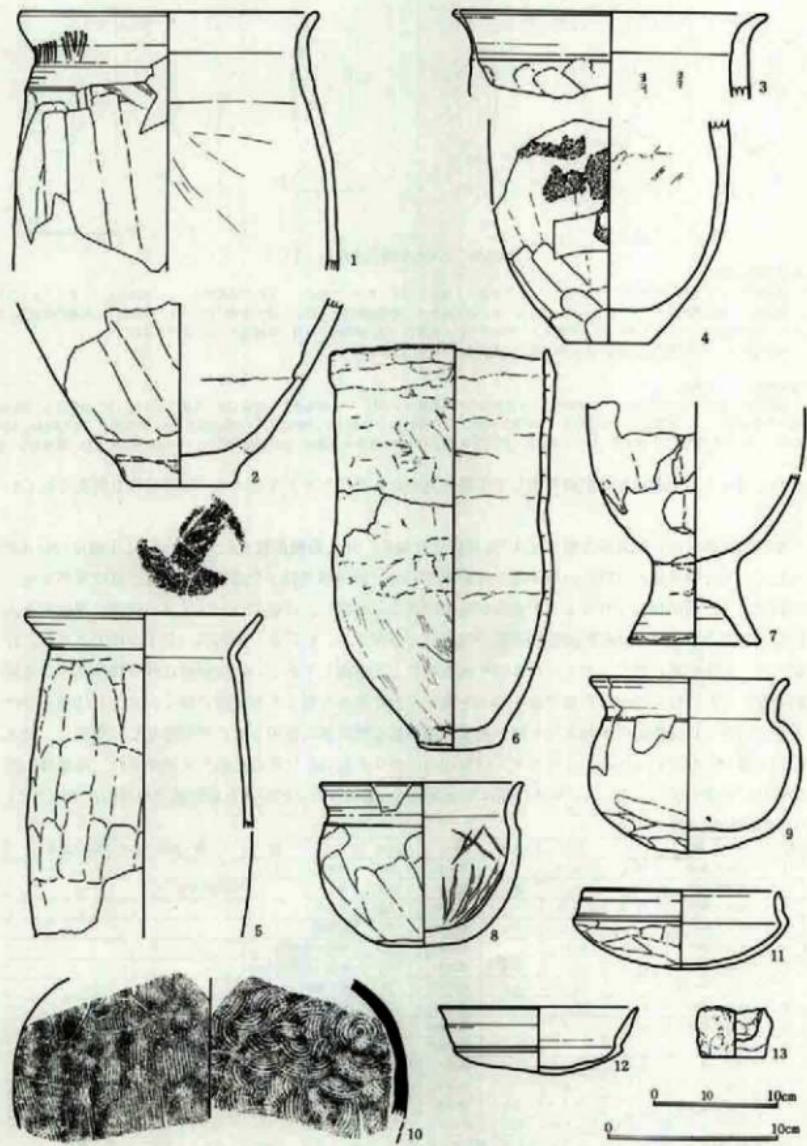
番号	器種	口径	標高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土器器長削型	(21.0)	(29.3)		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
2	土器器長削型	(19.8)	< 9.6 >		粗砂粒	良好	淡褐色～褐褐色	
3	土器器小型盤	(16.3)	(11.7)	(7.0)	粗砂粒	良好	淡褐色	
4	土器器 壺	(9.7)	< 6.3 >		粗砂粒	良好	赤褐色～赤黄褐色	
5	土器器 筋		< 6.3 >		粗砂粒	良好	褐色	
6	土器器 筋	(22.7)	10.8		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	
7	土器器 壺	(13.8)	3.3		粗砂粒	良好	くすんだ褐色	
8	土器器 壺	(11.7)	4.2		微砂粒	良好	赤褐色	
9	土器器 壺	13.7	4.3		粗砂粒	良好	淡褐色	
10	土器器 壺	(14.0)	4.1		微砂粒	良好	暗褐色	
11	土器器 壺	(12.0)	4.6		粗砂粒	良好	褐色～暗褐色	
12	土器器 壺	(12.6)	(4.4)		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
13	土器器 壺	(12.4)	< 3.5 >		微砂粒	良好	黑色	
14	粘土塊	口径1.4	高0.9	重32.1g	石質滑石			
15	石製品	白玉						

2号住居跡（第23図）

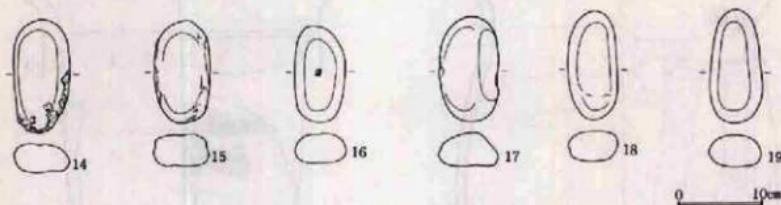
III調査区のD F—38・39GとD G—38・39Gに跨り、標高m間の南北傾斜面に検出された。北東方向に1号住居跡、南東～南方向に3・4・6号住居跡が隣接して位置する。本住居跡は、西壁に構築さ



第23図 2号住居跡



第24图 2号住居跡出土遺物（1）



第25図 2号住居跡出土遺物(2)

2号住居跡土層

1. 黒褐色土 FPを均一に含む
2. 黒褐色土 FPを含み1層より明るい
3. 黒褐色土 FPが点在する
4. 黑褐色土 FP・FAを含む
5. 黑褐色土 砂状褐色土BとFP・FAが点在する
6. 喀褐色土 灰白色粘質土、ロームBを多量に含む
7. 喀褐色土 灰褐色粘質土を含む
8. 喀褐色土 ロームBを含む
9. 喀褐色土 灰白色粘質土を含む
10. 喀褐色土 11. 喀褐色土 ロームBを含む
12. 喀褐色土 灰白色粘質土を含む
13. 喀褐色土 全体にソフト

2号住居跡カマド土層

1. 喀褐色土 灰白色粘土を含む
2. 喀褐色土 やや砂質で灰白色粘土を含む
3. 喀褐色土 砂質で灰白色粘土を含む
4. 喀褐色土 灰白色粘土を多量に含む
5. 喀褐色土 燃土粒・カーボン粒を含む
6. 喀褐色土 砂質
7. 喀褐色土 2層に似る
8. 喀褐色土 燃土B・粒、ローム粒・カーボン粒を含む
9. 燃土B
10. 喀褐色土 燃土B・粒、ロームBを多量に含む
11. 灰白色粘土 ローム粒を含む
12. 喀褐色土 灰白色粘土を含む

れた1号カマドを設けた住居跡を壊して東壁に見られる2号カマドを有する住居跡に作り替えられている。

形状は東西に長い楕丸長方形を呈する。規模は長軸長4.9m、短軸長最大4.35mを測る。主軸は、N-65°-Eに沿る。掘り込みは残存の最深部の北東隅で95cm、南西隅で42cmを測る。床面は、ほぼ平坦なローム面である。周溝は、1号カマドの両脇が長軸中央部に連続し、南壁では旧住居跡の周溝に連結する。西壁の中央やや北寄りに新住居跡の周溝が70cmほど残存する。柱穴は、南西隅のP1が検出された。貯蔵穴は、旧住居跡に伴うと考えられる掘り込みがP1と重複してある。新住居跡に伴う掘り込みは北東隅に設けられ、52×40cmの方形で深さ35cmを測り、西に僅かな高まりが北壁に続く。カマドは西辺の中央やや南寄りに拡張前の1号カマド跡がある。両袖部と燃焼部に使用された灰褐色粘土が残留し、焚き口部の掘り方が認められる。2号カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土に構築され、両袖部先端の芯材に長壺を使用している。焚き口幅は32cmを測る。遺物はカマド前面と新貯蔵穴の周辺に集中する。

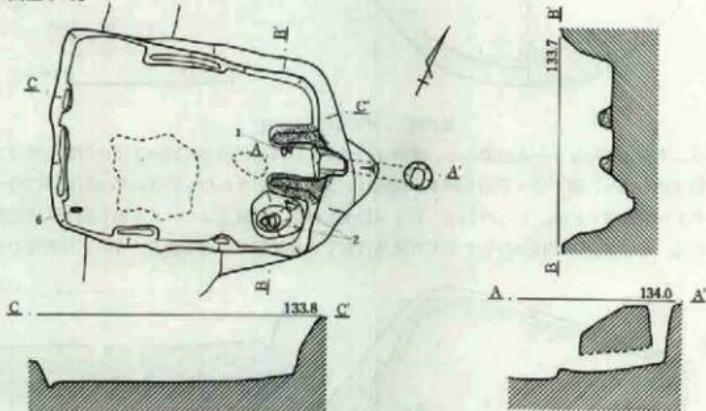
2号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	成形・整形法等の特徴・備考
1	土師器長胴壺	17.4	<15.6		粗砂粒	良好	淡褐色	
2	土師器長胴壺		<11.0	6.2	粗砂粒	良好	褐色	底部木葉痕
3	土師器長胴壺	(18.3)	<5.2		粗砂粒	良好	赤褐色	
4	土師器長胴壺		<13.5	5.0	粗砂粒	良	淡褐色	
5	土師器長胴壺	18.7	<26.0		粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
6	土師器長胴壺	17.3	32.5	6.4	粗砂粒	良好	褐色～淡黃褐色	
7	土師器長胴壺		<14.4	7.6	粗砂粒	良	淡赤褐色	
8	土師器小型壺	12.2	10.0		粗砂粒	良好	褐色	
9	土師器小型壺	(11.8)	10.8		粗砂粒	良好	赤褐色	
10	須史器 茶				粗砂粒	良好	黑褐色	外面平行叩目、内面青面波の当て目
11	土師器 瓦	11.6	4.9		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	
12	土師器 瓦	11.8	4.0		微砂粒	良好	赤褐色	
13	土師器手捏土器	3.7	3.1	3.8	微砂粒	良好	褐色	
14	礫石	長13.4	幅6.7	厚3.5	重496	石質	花崗岩安山岩	15 細石 長12.2 幅6.8 厚3.9 重389 石質 麻石安山岩
16	礫石	長11.5	幅6.1	厚3.5	重427	石質	輝石安山岩	17 細石 長12.5 幅7.2 厚4.3 重582 石質 麻岩
18	礫石	長12.9	幅6.0	厚3.7	重454	石質	輝石安山岩	19 細石 長13.5 幅6.2 厚4.2 重515 石質 麻石安山岩

3号住居跡（第26図）

III調査区のD E・D F—41Gに跨がって標高133.20～133.80m間の南北傾斜面に検出された。住居跡の西方部分を南北に3号溝が走り、北西方向に2号土坑、南北方向に2.5m隔てて4号住居跡が隣接する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、東辺がやや突出する。規模は東西長3.5m、南北長2.53mを測る。主軸は、N—71°—Eにとる。掘り込みは、残存の良い傾斜面上方の北東隅で70cm、西辺では20cm前後が残存する。床面は平坦で、カマド前面と中央やや南西よりにハード面がある。周溝は東壁を除く他壁面下に部分的に検出された。最深い部分で5cmを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅でカマド右袖の脇に配され、規模は63cm前後のやや歪んだ隅丸方形で、最深部で26cmを測る。カマドは東壁の中央部分に灰白色粘土により構築されている。焚き口幅は40cmで60cmの燃焼部を設け、煙道部はトンネル状の割り貫きで、1.25mの長さである。煙出部は32cm前後の円形で開口する。遺物は、貯蔵穴とカマド内に出土した。



第26図 3号住居跡

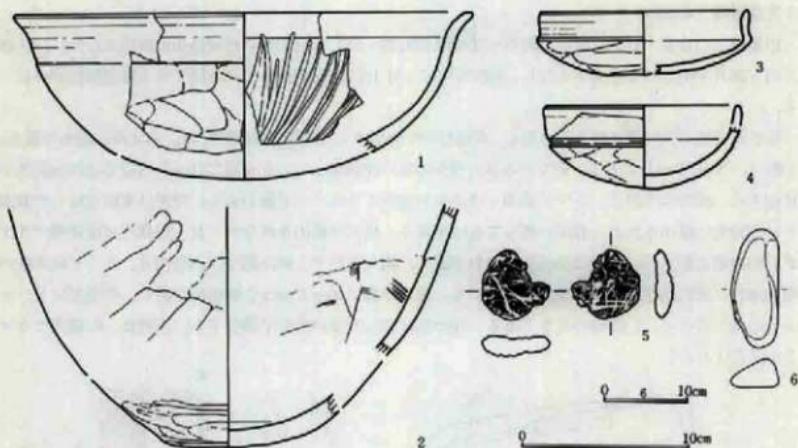
3号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	泥土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土器	鉢 (28.0)	<8.6		粗砂粒	良好	褐色	
2	土器	壺	<14.4		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
3	土器	壺	(12.2)	3.7	粗砂粒	良好	褐色	
4	土器	壺		4.1	粗砂粒	良好	淡褐色	
5	粘土塊							
6	礫石	長14.1	幅3.7	厚3.4	重415	石質	花崗岩	

4号住居跡（第28図）

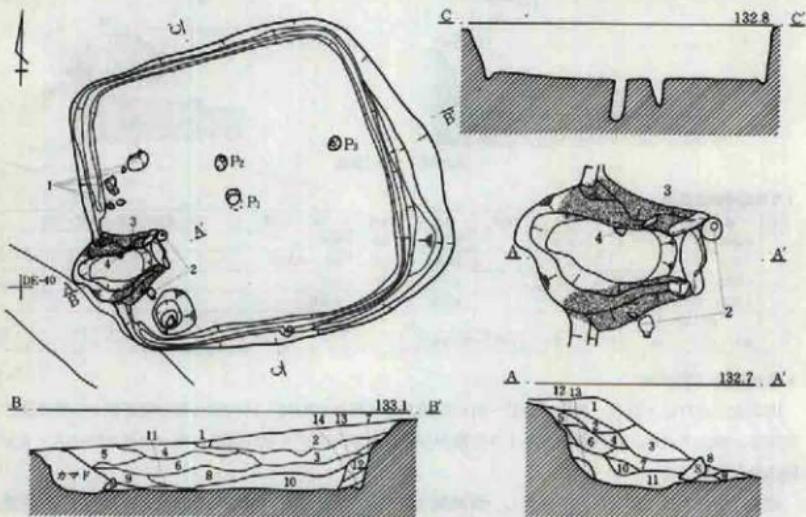
III調査区のD D・D E—40G、D E—41Gに跨がって標高132.60～133.00m間の傾斜面から低地面の変換部に検出された。南北側部分を1A号溝が掠め、北東方向に3号住居跡、南～南西方向に5・6号住居跡が隣接する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、南東部分が突出する。規模は東西長4.25m、南北長3.75mを測る。主軸は、W—17°—Sにとる。掘り込みは、残存の良い北東隅で80cm、カマドの右袖部分では44cmが



第27図 3号住居跡出土遺物

残存する。床面は平坦なローム面である。周溝は、カマドの両袖部分から20cm前後の間隔を設けて全周する。幅は10~20cm、深さ2~7cmを測る。柱穴は3ヵ所に検出された。形状は15cm前後の円形~橢円形で、P1が最も深く49cm、P2が32cm、P3が17cmを測る。貯蔵穴はカマド左袖の脇で、南西隅に配されている。規模は、53×49cmのやや歪んだ隅丸方形で、最深部で43cmを測る。カマドは西壁の中央や



第28図 4号住居跡

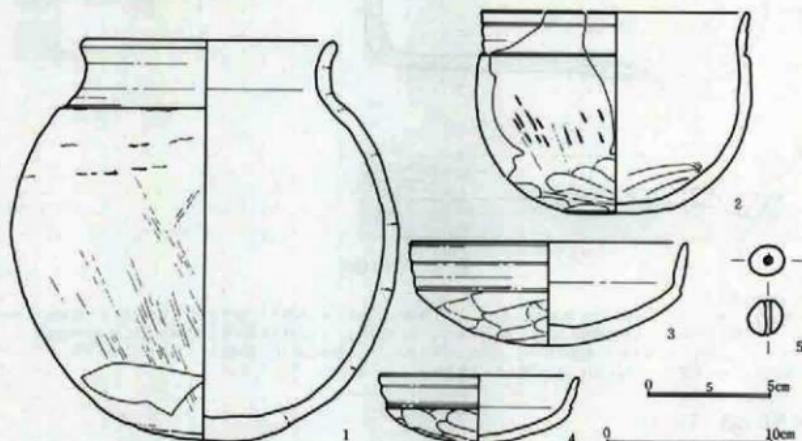
4号住居跡土層誌

1、暗褐色土と黒褐色土の混合土 2、暗褐色土 FPと褐色土Bを含む 3、暗褐色土 2層に似るがFPが少量 4、黒褐色土 FPとFAを含む 5、黒褐色土 FPとFA、灰褐色粘質土、燒土粒を含む 6、黒褐色土 FPとFAを含む 7、にい黄褐色土 8、深褐色土 FPとFA、ローム粒を含む 9、暗褐色土 ロームB、カーボン粒を含む 10、暗褐色土 ローム粒を含む 11、にい黄褐色土 ロームBを含む 12、7層に似る 13、にい黄褐色土 ロームBを含む 14、13層に似るがロームBを多量に含む

4号住居跡カマド土層誌

1、暗褐色土 灰白色粘土、FP、カーボン粒、燒土粒を含む 2、註記漏れ 3、1層に似るが燒土粒が少ない 4、灰白色粘土B 燃土粒を少量含む 5、暗褐色土 灰白色粘土を含む 6、暗褐色土 灰白色粘土、燒土粒を含む 7、暗褐色土 灰白色粘土、カーボン粒、燒土粒を含む 8、暗褐色土 灰白色粘土、燒土粒を含む 9・10、灰白色粘土 11、7層に似るが焼土粒を多く含む 12、暗褐色土 ローム粒を含む 13、暗褐色土 燃土Bを含む

や南寄りに灰白色粘土により構築され、袖部の先端に礫を芯材として設け、その隙間に架けた焚き口部に使用した天井石が崩落している。焚き口幅は25cmで焚き口から煙出部まで1.05mを測る。遺物は、カマド内とその両脇に集中して出土。



第29図 4号住居跡出土遺物

4号住居跡出土遺物

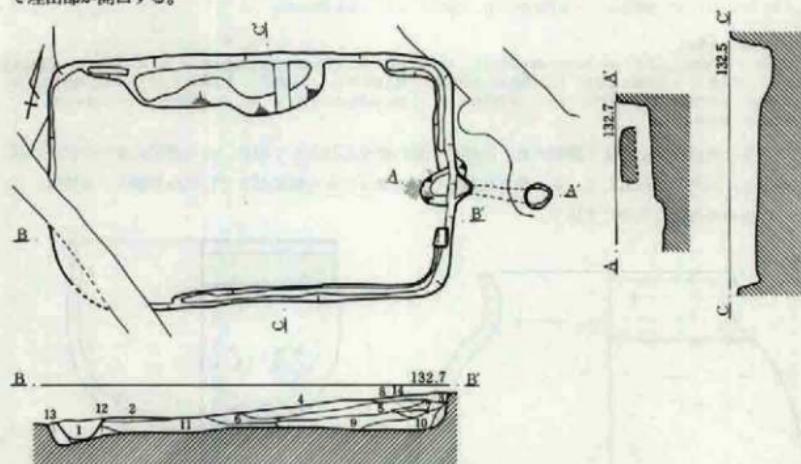
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器 瓢	14.7	24.1		粗砂粒	良好	褐褐色	
2	土師器小豆甕		19.2		粗砂粒	良好	赤褐色～黒褐色	
3	土師器 环	(16.2)	6.4		粗砂粒	良好	深褐色	
4	土師器 环	11.8	4.1		粗砂粒	良好	深褐色	
5	土製品 丸玉	14×1.25	1.4	重さ2.1g				

5号住居跡（第30図）

III調査区のDC-39G、DC-C・DD-40Gに跨がって標高132.20~132.60m間の南西傾斜面と低地との変換部分に検出された。北東隅を1A号溝が掠め、北方向に3.5m隔てて4号住居跡、西方に6号住居跡が接近して位置する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西長4.4m、南北長3.02mを測る。主軸は、N-82°-E に沿う。掘り込みは、東壁の中央部で49cm、西辺の中央部で21cmが残存する。床面は中央部分から西方と北方向に緩やかな傾斜面とする。周溝は西辺を除いて検出され、幅15cm前後、深さ2~5cmを測る。北壁下の中央部分には10cm前後の深さで不定形な掘り込みが続く。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは東壁の中央やや南寄りに構築されている。焚き口～燃焼部の掘り込みは、長さ33cm、最大幅45cm、深さ2cmの皿状を呈している。煙道部は東壁をトンネル状に1.15mほど削り貫き、33×30cmの円形で煙出部が開口する。



第30図 5号住居跡

5号住居跡土層

1. 黄褐色土 ロームB・ローム粒、FP、黒褐色土を含む
- 2・3. 暗褐色土 砂質
4. 暗褐色土 やや砂質でFPを含む
5. 暗褐色土 ロームB・ローム粒、FPを含む
6. 暗褐色土 ロームBとFPを含む
7. 暗褐色土 ロームBと少量の無土粒を含む
8. にぶい黄褐色土
9. 暗褐色土 FPとロームB・ローム粒を含む
10. 暗褐色土 黒褐色土とローム粒を含む
11. 黒褐色土 FPとロームBを含む
12. 暗褐色土 ロームB・ローム粒を含む
13. 黑褐色土 FPを含む

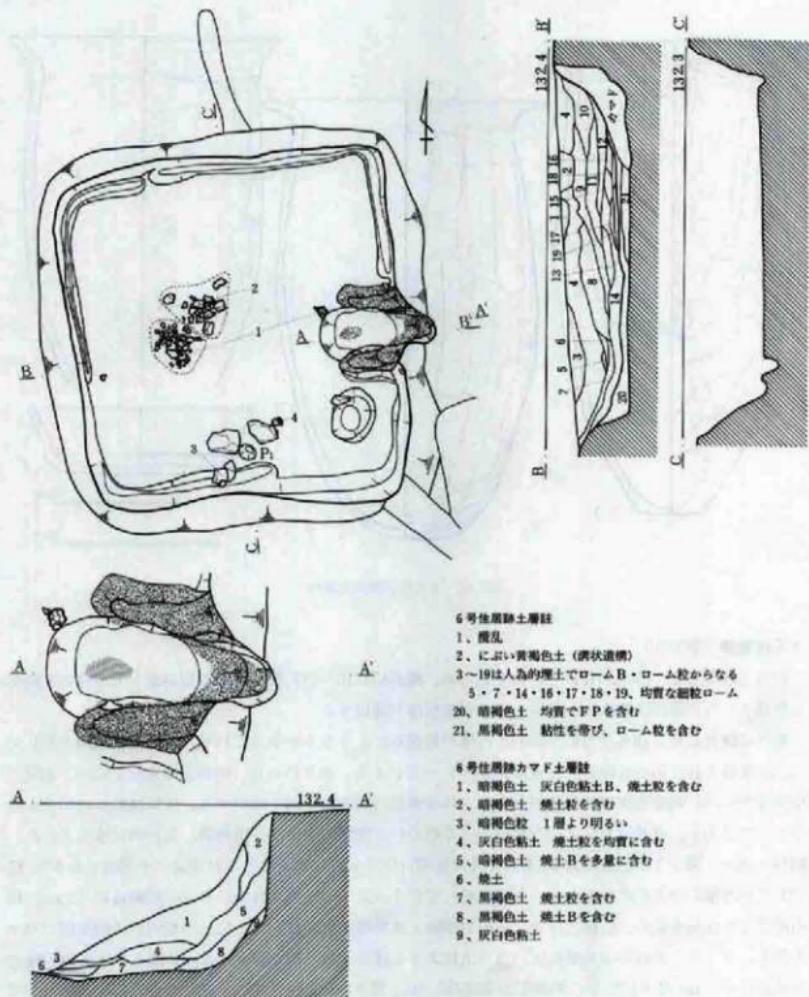
6号住居跡（第31図）

III調査区のD C・DD-39Gに跨がって標高132.00～132.40m間の低地面に検出された。南東部分で5号住居跡と接し、北東方向に4号住居跡が位置し、南東隅～北辺の中央部分を溝が走行する。

形状は僅かに南北が僅かに長い方形を呈する。規模は東西長4.7m、南北長4.78mを測る。主軸は、N-87°Eにとる。掘り込みは、東壁で85～95cm、西壁で65cm前後が残存し、壁面の上部が緩やかに開口する。床面は安定した平坦面である。周溝は南東隅と西辺の南方部分が存在しない。幅は7～24cm、深さ2～8cmを測る。柱穴は、南壁の中央に周溝を挟んでP 1が検出された。P 1の規模は、20cm前後の梢円形で深さ17cmを測る。この柱穴に隣接して2つの縁が出土している。主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、カマドの右袖脇に配され、68×49cmの梢円形で深さ43cmを測る。カマドは東壁の中央部に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部まで1.35mを測り、煙道部は垂直気味に立ち上がる。焚き口幅60cm前後、袖部は30cm幅で70cmの長さを測る。

覆土は人為的な客土であるローム・ロームブロック土が観察され、中央部で床面から10cm程を覆う暗褐色土上に70cmほどが埋土されている。

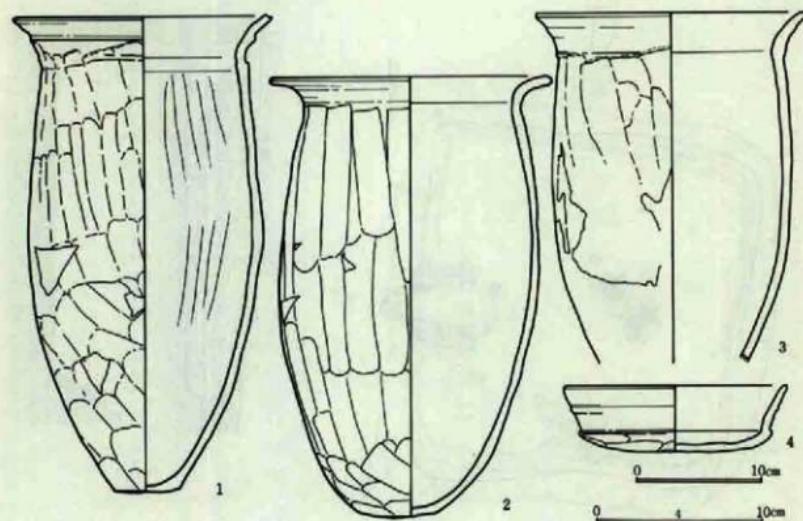
遺物は中央の床面やや西よりに長胴甕（1と2）が集中し、散在的にカマド焚き口、南壁下の周溝等で長胴甕（3）とP 1に隣接する縁の脇で壊（4）が出土した。



第31図 6号住居跡

6号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土器部長脚壺	20.0	38.3	5.4	粗砂粒	良好	赤~黒褐色	
2	土器部長脚壺	21.8	35.3	6.3	粗砂粒	良好	淡黄~赤褐色	
3	土器部長脚壺	21.6	28.0		粗砂粒	良	赤褐色	
4	土器部环	13.2	4.0		微砂粒	良好	くすんだ黒褐色	



第32図 6号住居跡出土遺物

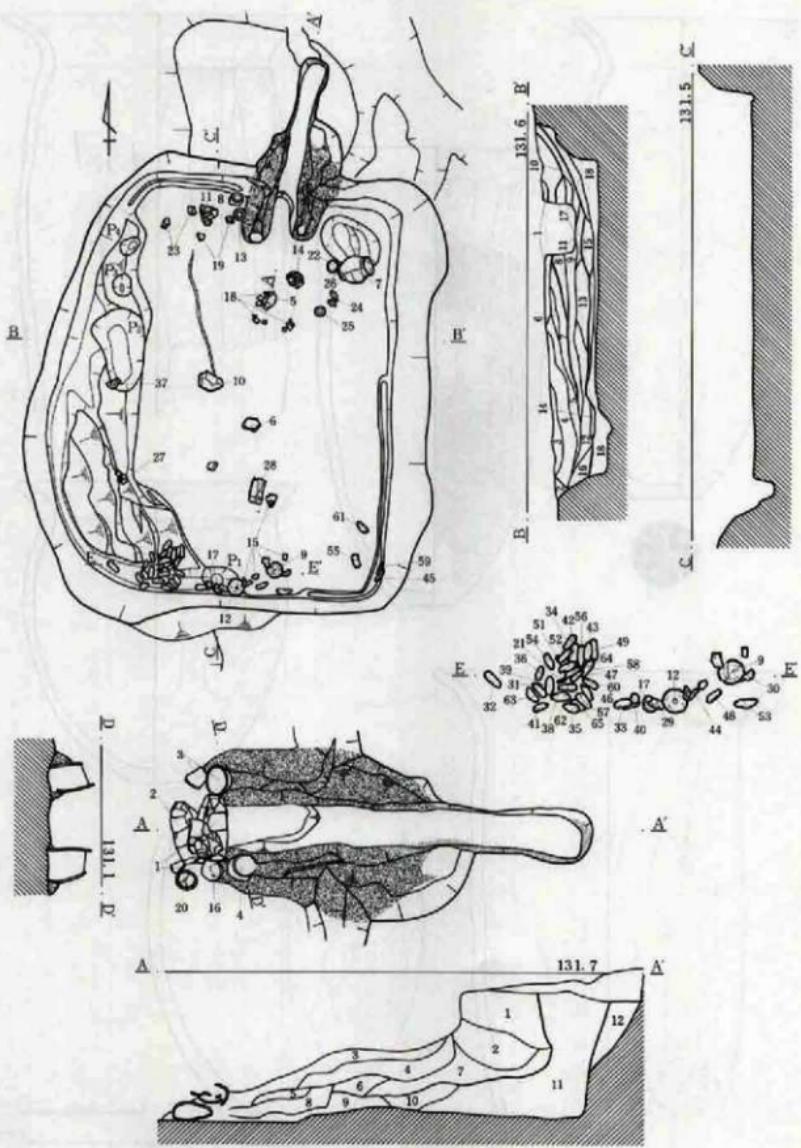
7号住居跡（第33図）

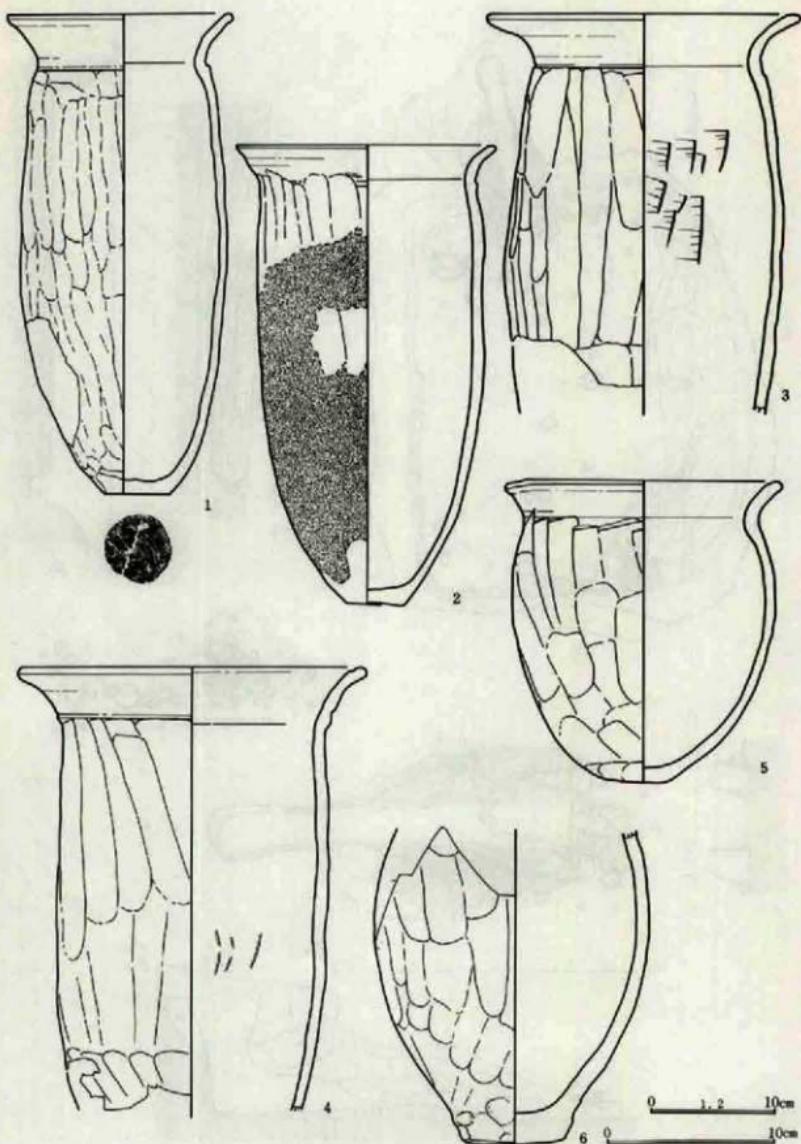
III調査区のC T—39・40Gにその大半を占め、標高131.10~131.70m間の西傾斜面と低地面の変換部に検出された。北西方向に4m程離て8号住居跡が隣接する。

形状は南北に長い楕円長方形を呈し、西壁が地割れにより歪みが生じている。規模は東西最大長4.93m、南北最大長5.75mを測る。主軸は、N—9°—Eに沿る。掘り込みは、傾斜面の東壁で92cm、北壁の中央部が64cm、南壁中央部で40cmが残存し、ほぼ垂直の壁面は上面で開口する。床面は地割れ部分を除いて平坦である。周溝はカマドの左袖部から北壁沿いと東壁の中央部～南西隅、南西隅に検出された。幅10~18cm、深さ3cm前後を測る（南西部分は地割れによる歪みがあるので計測値は不明瞭である）。柱穴P1は南壁の中央部に検出され、西壁に沿ってP2~P4が検出された。P1の規模は47×30cmの楕円形で深さ26cmを測る。貯蔵穴はカマドの右袖脇、北東隅に配され、75×52cmの楕円形で最深部で34cmを測る。カマドは北辺の中央部に灰白色粘土によって構築され、割り貫きではないがトンネル状の煙道部を設けている。焚き口部から煙道部の全長は2.3m、焚き口幅35cmを測り、袖部の両先端に芯材として長胴窓（3と4）を直立させ、2つの長胴窓（1と2）を連結して渡し、焚き口部の天井を構成する。

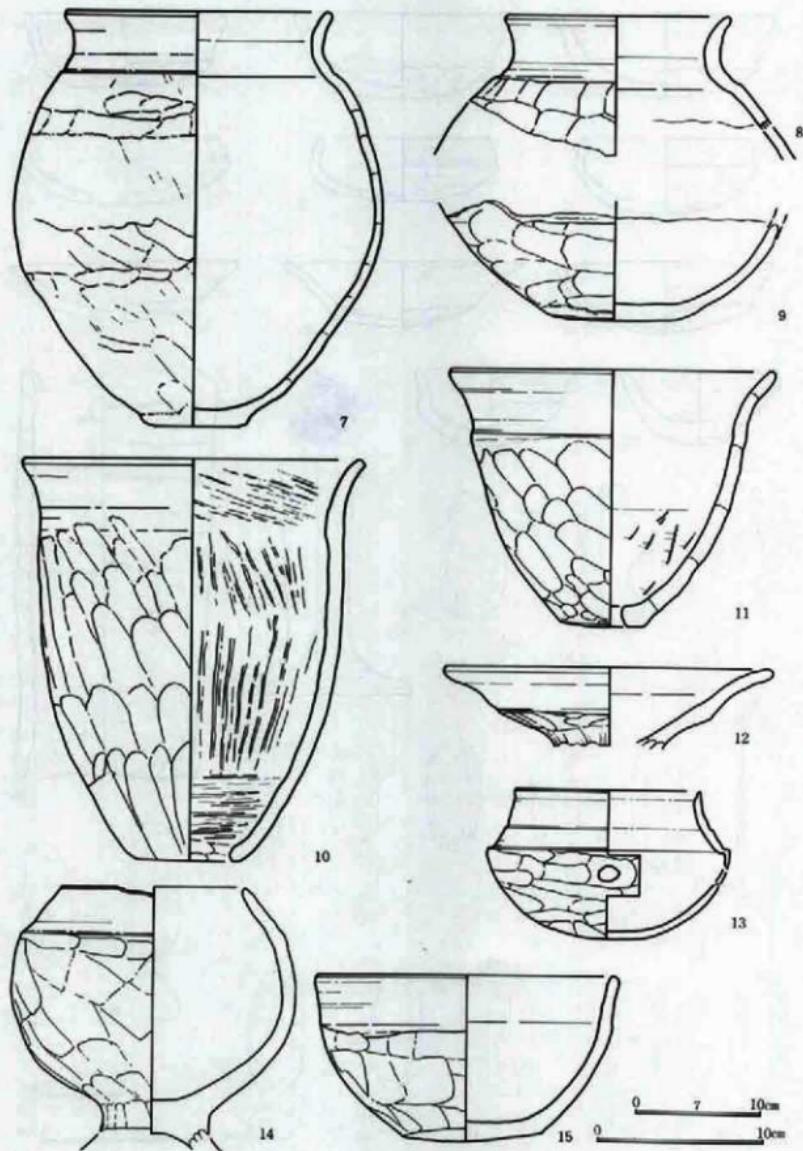
覆土は、6号住居跡と同様な人為的客土のロームB・ローム粒を主体として埋められている。自然堆積と考えられる覆土は、床面中央で10cm程で6号住居跡と同様の土層を有する。

遺物はカマド前面、カマド左袖部脇に瓦泉（13）、甌（11）、壺類、貯蔵穴に甌（7）と壺集中し、南方の床面で円筒形土器（28）、南西の地割れ部分に支脚状土器（27）、南壁下には扁石が37個が集中し、高壺壺部（12）と甌底部（9）が出土した。

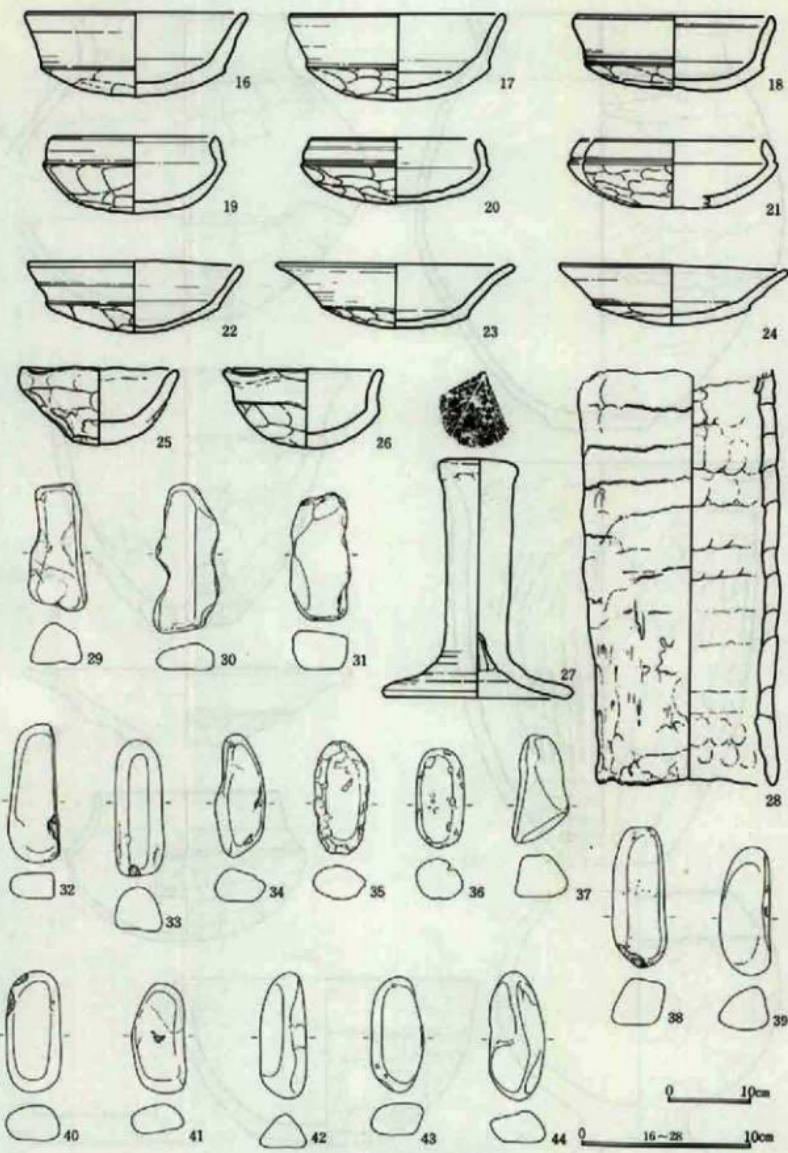




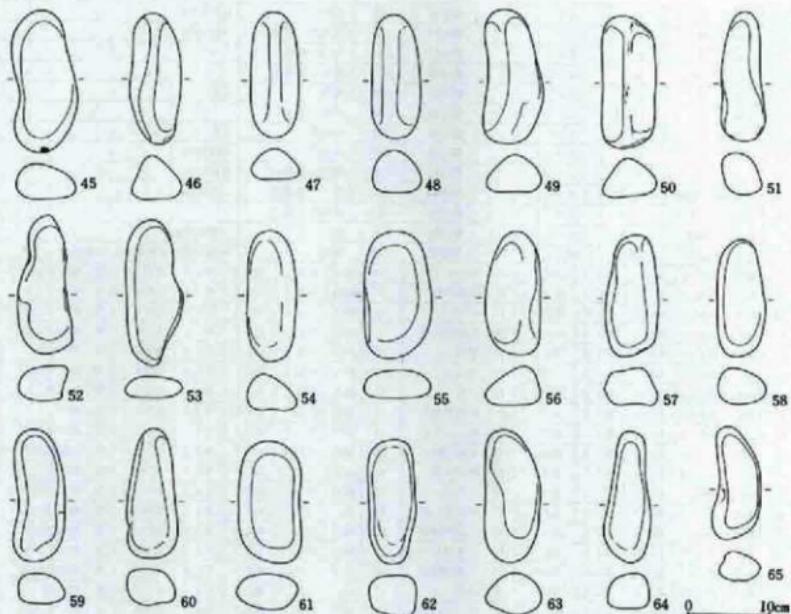
第34図 7号住居跡出土遺物（1）



第35圖 7號住居跡出土遺物（2）



第36図 7号住居跡出土遺物（3）



第37図 7号住居跡出土遺物 (4)

7号住居跡土層註

1. 喀褐色砂質土
2. 黒褐色土 FPを含む
- 3～15は人為的理土でローム土を主体とする 3は砂粒、4は黒褐色土・カーボン粒を含む
16. 黒褐色土 ロームBと砂粒を含む 17. 喀褐色土 粘質が有り、ロームBを含む 18. 黒褐色土 粘質が有り、FPを含む

7号住居跡カマド土層註

1. 喀褐色土 ローム粒を多量に含む 2. 喀褐色土 1層に似るがやや暗い 3. 黑褐色土 喀褐色土を含む 4. 喀褐色土 灰白色粘土Bを含む 5. 黑褐色土 3層より暗い 6. 喀褐色土 燃土Bを含む 7. 喀褐色土 ローム粒を含む 8. 喀褐色土 多量の焼土B・粒を含む 9. 黑褐色土 燃土Bを含む 10. 喀褐色土 燃土Bを含む 11. 黑褐色土 燃土粒を含む 12. 黑褐色土 ローム粒を含む

7号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底様	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器鉢形	18.1	39.1	5.3	粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	底厚木葉状
2	土師器鉢形	21.2	37.8	4.7	粗砂粒	良	褐色	
3	土師器長削型	18.5	<24.6		粗砂粒多	良好	褐色～米褐色	
4	土師器長削型	21.0	<27.3		粗砂粒	良好	褐色～米褐色	
5	土師器 鉢	16.3	18.6		粗砂粒	良	黄褐色～褐色	
6	土師器 鉢		<19.1	5.9	粗砂粒多	良好	赤褐色～褐色	
7	土師器 鉢	21.3	36.3		粗砂粒	良好	褐色	
8	土師器 鉢	13.1	<8.4		粗砂粒	良好	淡褐色	
9	土師器 鉢		<7.2		粗砂粒多	良好	淡赤褐色～米褐色	
10	土師器 鉢	20.1	24.7	6.1	粗砂粒	良好	米褐色～褐色	単孔・孔径7.0 刻外面ヘラ・内面丁寧な磨き
11	土師器 漏斗	19.6	15.9	4.9	粗砂粒	良好	淡褐色～米褐色	単孔・孔径2.8
12	土師器 高杯	19.3	<4.9		粗砂粒少	良好	褐色～米褐色	脚部欠損
13	土師器 瓦瓶	11.4	9.2		微砂粒	良	好褐色～米褐色	完形燒成後の摩耗で瓦瓶に転用
14	土師器脚台付壺	11.1	<15.3		粗砂粒	良好	褐色～米褐色	脚部欠損
15	土師器 鉢	17.7	10.1	8.3	粗砂粒	良好	褐色～米褐色	ほぼ完形

16	土師器 坯	13.2	4.1		粗砂粒	良好	淡褐色	ほぼ完形
17	土師器 坯	12.2	5.2		粗砂粒	良好	淡褐色～暗褐色	ほぼ完形
18	土師器 坯	11.6	4.4		粗砂粒	良好	褐色～黑褐色	
19	土師器 坯	10.1	4.7		粗砂粒	良好	褐色～黑褐色	
20	土師器 坯	10.2	4.0		粗砂粒	良好	褐色	完形
21	土師器 坯	(11.0)	4.1		粗砂粒	良好	褐色～黑褐色	
22	土師器 坯	13.0	4.4		粗砂粒	良好	黑褐色	完形
23	土師器 坯	14.1	3.9		粗砂粒	良好	黑褐色	ほぼ完形
24	土師器 坯	13.5	3.6		粗砂粒	良好	褐色～黑褐色	ほぼ完形
25	土師器(手掘)	9.2	4.6		粗砂粒	良	褐色～暗褐色	ほぼ完形
26	土師器(手掘)	9.2	4.7		粗砂粒	良	淡褐色～褐色	
27	土師器(手掘)	4.6	14.6	(11.2)	粗砂粒	良好	褐色	上部木炭痕
28	土師器円筒形	10.6	25.4		粗砂粒	良好	褐色	天地不明外面輪積感、内面指揮さえ頗
29	礫石 長15.3	幅6.9	厚5.5	重821	石質	輝石安山岩	30	礫石 長18.2 幅8.0 厚3.9 重712 石質 細粒砂岩
31	礫石 長15.6	幅7.4	厚5.3	重906	石質	輝紋砂岩	32	礫石 長16.8 幅6.4 厚3.6 重640 石質 輝石安山岩
33	礫石 長15.5	幅6.0	厚5.6	重975	石質	砂岩	34	礫石 長14.7 幅6.0 厚4.8 重574 石質 輝石安山岩
35	礫石 長13.4	幅6.5	厚5.3	重533	石質	花崗閃綠岩	36	礫石 長11.9 幅5.7 厚5.0 重482 石質 輝石安山岩
37	礫石 長13.0	幅6.8	厚5.2	重567	石質	綠岩	38	礫石 長16.9 幅6.5 厚5.6 重987 石質 細粒砂岩
39	礫石 長15.8	幅6.3	厚5.0	重780	石質	安山岩	40	礫石 長14.9 幅6.7 厚4.9 重791 石質 輝石安山岩
41	礫石 長13.4	幅6.6	厚3.6	重484	石質	砂岩	42	礫石 長15.5 幅5.6 厚4.3 重562 石質 ひん岩
43	礫石 長14.0	幅6.4	厚3.9	重581	石質	花崗閃綠岩	44	礫石 長15.7 幅6.8 厚4.3 重606 石質 磨岩
45	礫石 長17.4	幅8.1	厚4.2	重880	石質	輝石安山岩	46	礫石 長16.0 幅6.3 厚5.3 重762 石質 輝石安山岩
47	礫石 長15.3	幅6.0	厚3.8	重564	石質	花崗閃綠岩	48	礫石 長14.8 幅6.0 厚5.3 重751 石質 花崗閃綠岩
49	礫石 長16.4	幅7.3	厚3.7	重766	石質	輝紋砂岩	50	礫石 長16.2 幅6.6 厚5.0 重785 石質 輝石安山岩
51	礫石 長15.8	幅5.4	厚5.1	重650	石質	ひん岩	52	礫石 長16.5 幅6.5 厚4.4 重674 石質 輝石安山岩
53	礫石 長17.7	幅7.1	厚2.9	重552	石質	輝石安山岩	54	礫石 長15.8 幅6.0 厚4.3 重545 石質 輝石安山岩
55	礫石 長15.5	幅8.2	厚3.6	重748	石質	花崗閃綠岩	56	礫石 長15.0 幅6.6 厚5.0 重722 石質 花崗閃綠岩
57	礫石 長14.9	幅6.5	厚4.6	重677	石質	輝英岩	58	礫石 長14.3 幅5.9 厚4.4 重560 石質 輝石安山岩
59	礫石 長16.2	幅6.2	厚3.6	重698	石質	花崗閃綠岩	60	礫石 長15.9 幅6.3 厚5.2 重700 石質 花崗閃綠岩
61	礫石 長15.0	幅7.6	厚3.6	重815	石質	砂岩	62	礫石 長15.3 幅6.8 厚5.6 重735 石質 安山岩
63	礫石 長16.0	幅6.8	厚5.2	重746	石質	輝石安山岩	64	礫石 長16.1 幅5.7 厚4.5 重585 石質 輝石安山岩
65	礫石 長13.6	幅5.9	厚3.8	重435	石質	輝綠岩		

8号住居跡（第38図）

III調査区のD A-38Gにその大半を占め、標高131.00～131.50m間の低地面に検出された。南西方向に4mほど隔てて7号住居跡が位置し、北東隅～南西隅に1B号溝の枝溝が上面を走っている。

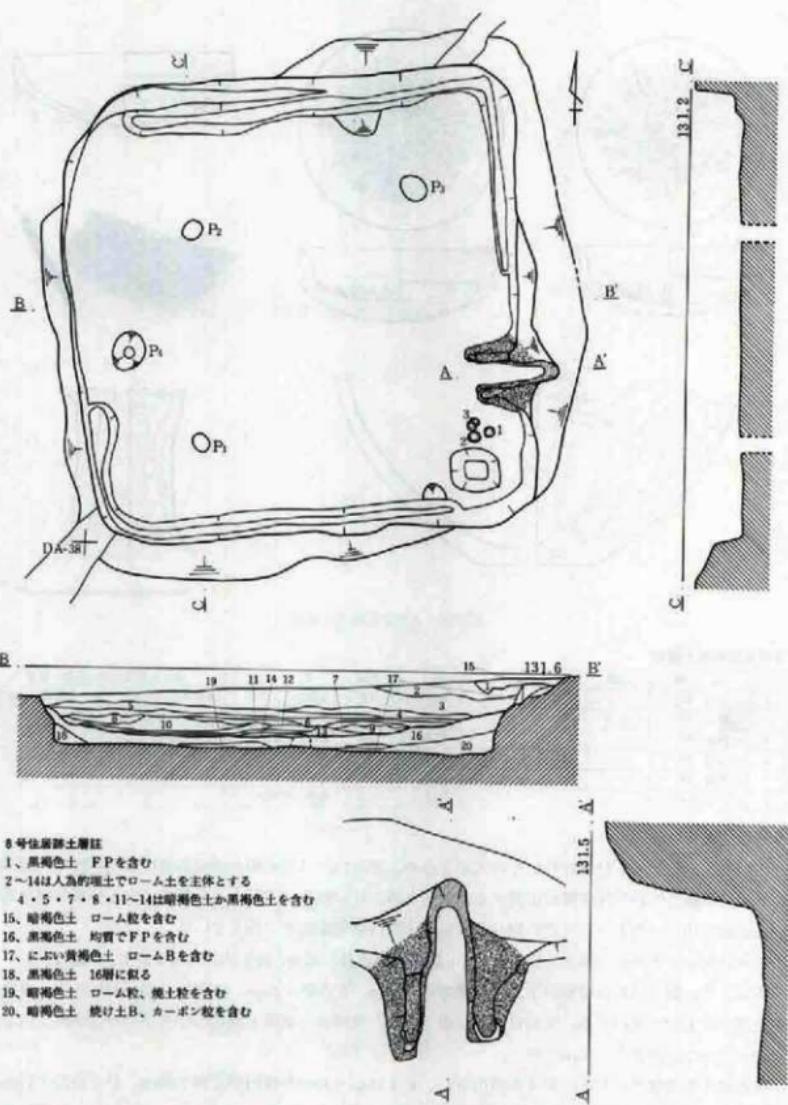
形状は一辺が6.2～6.3mの隅丸方形を呈する。主軸は、N-84°Eにとる。掘り込みは、残存の良い北東隅で94cm、南東隅は87cm、西壁で60cm前後を測り、北西隅を除いて壁面の上部が開口する。床面は平坦である。床面は硬化したローム面で平坦である。周溝はカマドの両脇と西辺の中央部～北西隅部分を欠いている。幅は15～30cmで、深さ2～10cmを測る。

柱穴は4本主柱穴と考えられ、P 1～P 3の所在を確認したが、P 4の所在は湧水の為に把握できなかった。確認したP 1～P 3の柱間は2.6m前後を測る。貯蔵穴は南東隅に配され、58×53cmの隅丸方形で、深さ29cmを測る。

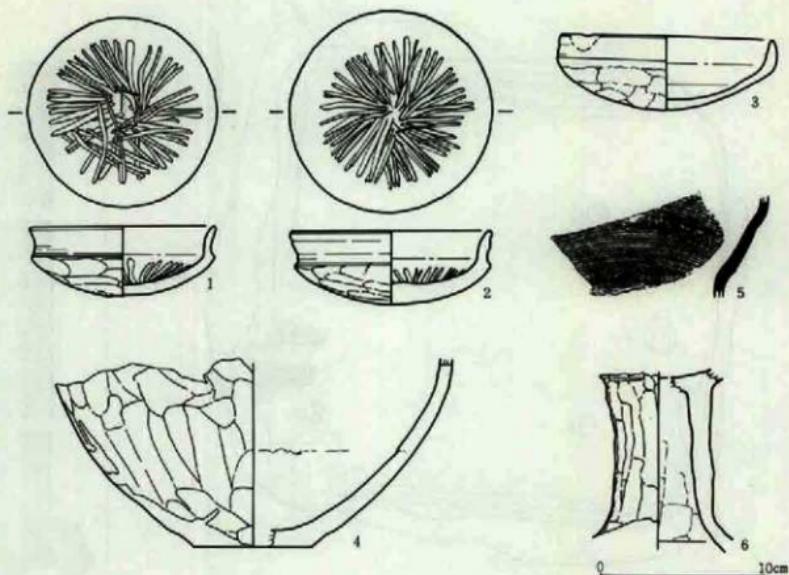
カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土によって構築され、袖部先端に礫を芯材とする。焚き口～煙道部の全長は1.05mで煙道部は垂直気味に立ち上がり強い披熱を受けて焼土化している。焚き口幅は27cmを測る。

覆土は6・7号住居跡と同様な人為的な客土であるローム粒、ロームBを主体とする堆積が観察され、中央の床面で12cm前後の黒・暗褐色土の自然堆積上に60cm程が埋土されている。

遺物はカマド右袖部と貯蔵穴の間に3個体の壙（1～3）が出土した。



第38図 8号住居跡



第39図 8号住居跡出土遺物

8号住居跡出土遺物

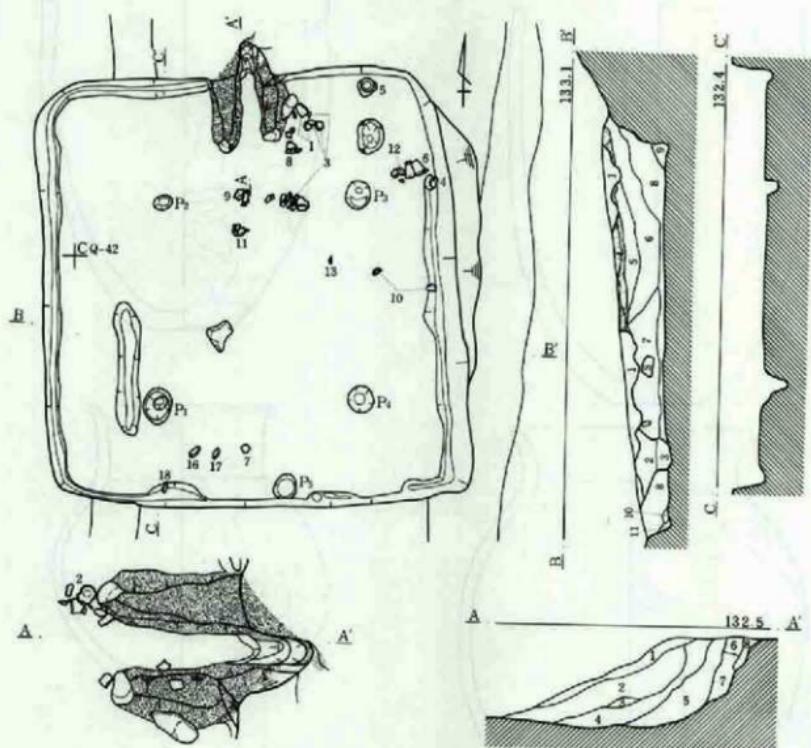
番号	器種	口径	高さ	底性	胎土	焼成	色調	成・整形技術等の特徴・備考
1	土器器 坪	11.2	4.2		粗砂粒	良好	淡褐色	ほぼ完形内面褐色處理、内底放射状暗文
2	土器器 坪	12.2	4.5		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	完形内面褐色處理、内底放射状暗文
3	土器器 坪	12.9	4.3		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	ほぼ完形
4	土器器 葵	(11.6)	(7.1)		粗砂粒多	良	褐色	
5	直筒器 葵				粗砂粒	良好	褐色	
6	土器器 高坪				粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	

9号住居跡（第40図）

III調査区のC P・C Q—42Gにその大半を占め、標高132～133m間の西傾斜面に検出された。西方向に5mほど離れて10号住居跡が位置する。東辺と西には南北に走る地割り4と5号溝の掘り込みが住居跡を切り、西方の5号溝の掘り込みはP1の西脇で床面まで及んでいる。

形状は南北にやや長い隅丸方形を呈する。規模は東西長5.05m、南北長5.25mを測る。主軸は、N—3°—Wにとる。掘り込みは傾斜面上方の東壁で75～80cm、北西隅で40cm、南西隅で23cmが残存し、東壁の中央部分の上面が開口する。床面はほぼ平坦である。周溝は北東隅と南辺の中央部分が途切れている。幅10～25cmで、深さ5～8cmを測る。

柱穴は4本主柱穴のP1～P4が検出され、P1は42×35cmの梢円形で深さ30cm、P2は23×17cmの梢円形で深さ16cm、P3は30cm前後の円形で深さ22cm、P4も30cm前後の円形で深さ51cm、柱間はP1～P2が2.4m、P2～P3が2.35m、P3～P4が2.5m、P4～P1が2.4mを測る。南壁の中央部に検出されたP5は、30cm前後の円形で深さ17cmを測る。野蔵穴はP3と北東隅の中間部分に配され、40×



第40図 9号住居跡

9号住居跡土層註

- 1、暗褐色土・B軽石とローム粒・ロームBを含む
- 2、黒褐色質土
- 3、にじい黄褐色土・ローム粒・ロームBを多量に含む
- 4、B軽石
- 5、黒褐色土・FPを含む
- 6、暗褐色土・FPを含む
- 7、黒褐色土・FPとFAを含む
- 8、にじい黄褐色土・ローム粒を多量に含む
- 9、暗褐色土・ローム粒を多く含む
- 10、にじい黄褐色土
- 11、にじい黄褐色土・ロームBを多く含む

9号住居跡カマド土層註

- 1、暗褐色土・FPと焼土粒を含む
- 2、暗褐色土・FP、焼土粒、灰白色粘土を含む
- 3、暗褐色土・灰白色粘土を含む
- 4、暗褐色土・焼け土Bを多量に含む
- 5、暗褐色土・少量の焼土Bを含む
- 6、焼け土B
- 7、記記漏れ
- 8、暗褐色土・焼土粒を多量に含む

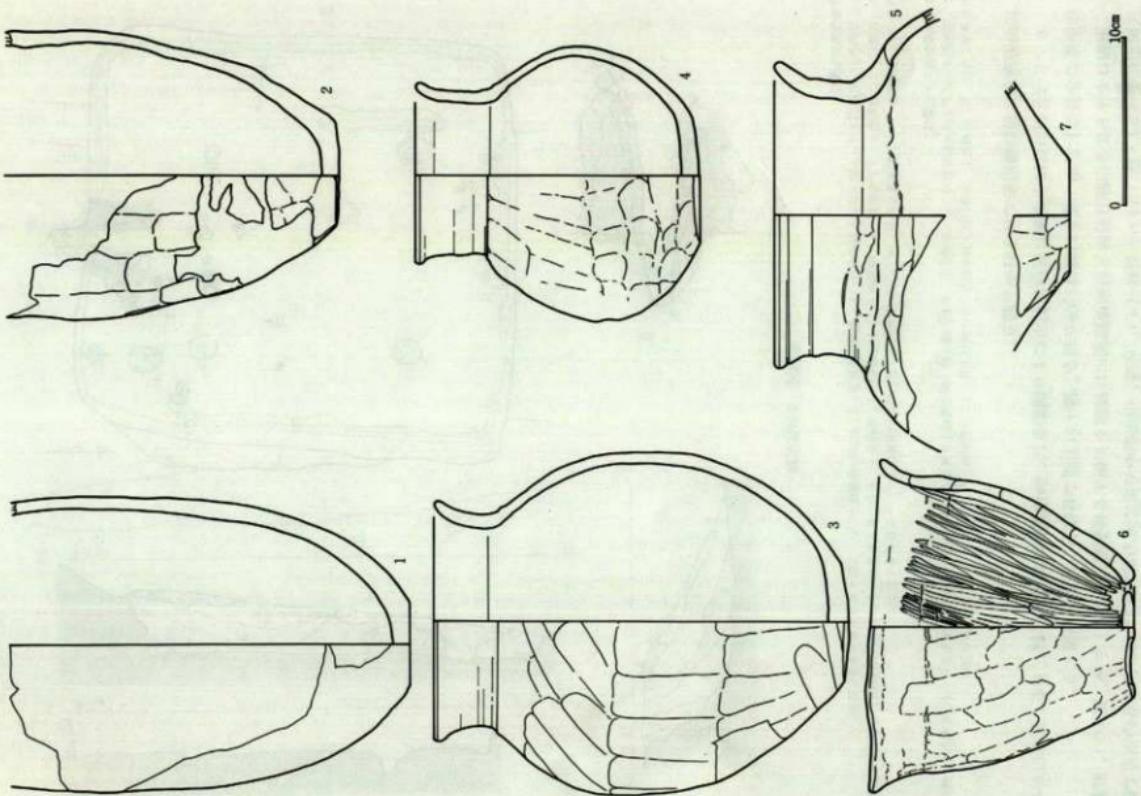
30cmの南北に長い楕円形で深さ51cmを測る。

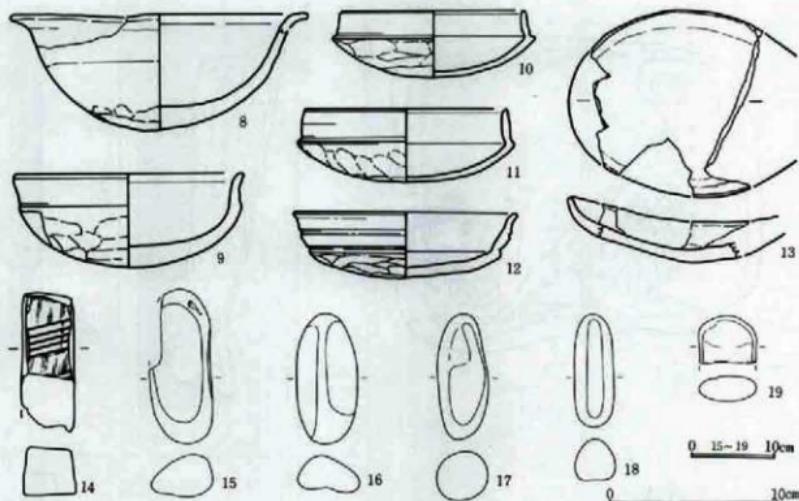
カマドは北辺のほぼ中央部に灰白色粘土により構築され、両袖部先端に躰を芯材とする。焚き口から煙道部の全長は1.25m、焚き口幅は27cmを測る。覆土の上層でB軽石の純層が堆積する。

遺物はカマド焚き口部分前面と右袖部脇部に口縁部を欠損する長胴壺(1と2)や壺、壺(3)、貯蔵穴周辺に壺(5)・瓶(6)・小型壺(4)、壺等、中央部やや東で木の葉形土器(13)、P5の西方で編石等が散在して出土。

第41图 9号住居跡出土遺物(1)

42





第42図 9号住居跡出土遺物（2）

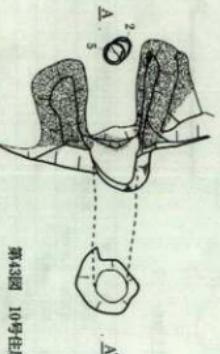
9号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土器器具側面	C4.0	5.0	粗砂粒	良	赤褐色		器面荒れ
2	土器器具側面	C9.0	6.3	粗砂粒	良	淡褐色～淡黒褐色		
3	土器器 瓢	13.8	24.9	粗砂粒多	良好	褐色～赤褐色		
4	土器器 盆	10.8	17.5	粗砂粒	良	淡灰褐色		
5	土器器 盆	17.7	C10.2	粗砂粒	良好	淡褐色		
6	土器器 瓢	20.0	16.3	粗砂粒多	良好	淡褐色		完形単孔・孔徑6.0外側部へ、内面游き
7	土器器 盆	C3.8	7.0	微砂粒	良好	赤褐色		
8	土器器 瓶	(17.5)	7.0	粗砂粒	良好	褐色～暗褐色		
9	土器器 瓶	13.1	5.9	粗砂粒	良	淡褐色～淡赤褐色		
10	土器器 瓶	11.1	4.2	粗砂粒少	良好	赤褐色～黒褐色		
11	土器器 瓶	12.9	4.5	粗砂粒少	良好	暗赤褐色		
12	土器器 瓶	13.3	4.0	粗砂粒少	良好	褐色～黒褐色		
13	土器器			粗砂粒少	良好	淡青色～黒褐色	木の葉の割形	
14	砾石	長8.5	幅2.2	厚2.9	重116	石質	砂岩	15 砾石 長18.8 幅7.6 厚5.1 重1043 石質 磨石安山岩
15	砾石	長15.8	幅7.4	厚4.5	重794	石質	磨石安山岩	17 砾石 長15.3 幅6.2 厚5.9 重727 石質 磨石安山岩
16	砾石	長13.6	幅4.7	厚5.0	重518	石質	花崗閃緑岩	19 砾石 長5.7 幅7.0 厚3.1 重200 石質 磨石安山岩

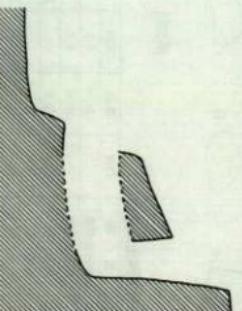
10号住居跡（第43図）

III調査区のCQ—40G、標高130.80～131.40m間で西傾斜面と低地面との変換部に検出された。東の傾斜面に9号住居跡、南西方方向に11・12号住居跡が位置する。

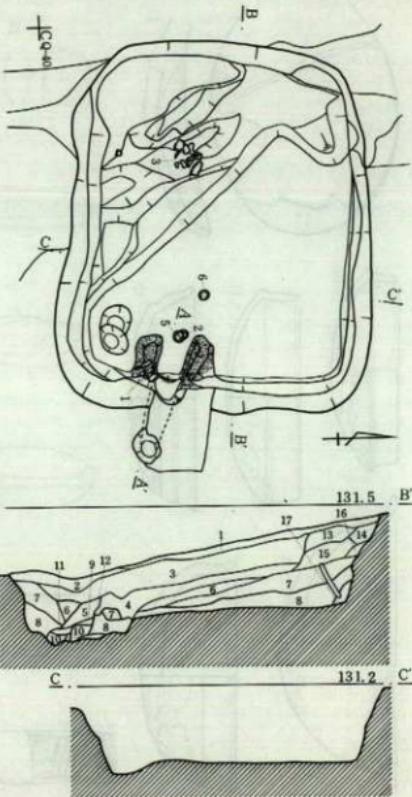
形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西長4.52m、南北長3.7mを測る。主軸は、E—17—Sにとる。掘り込みは傾斜面上方の東壁で1～1.07m、傾斜面下方の西壁で65cm前後が残存し、西壁を除いて上面が開口する。床面は西方に緩やかに傾斜し、南辺中央部～北西隅にかけて地割れがあり、7号住居跡で見られた地割れに連続して陥没している。周溝、柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、8の字状に2つの掘り込みが繋がり、作り替えが考えられる。東の掘り込みは40×30cmの楕円



第13図 10号住居跡



第14図 10号住居跡



10号住居跡土層注

1. 黒褐色の粘土
2. 黑褐色土・FPを含む
3. 黑褐色土・FPを含み2層より構成する
4. 黑褐色土・FPを含み3層より構成する
5. 黑褐色土・FPを含む
6. 黑褐色土・FPを少量含む
7. 黑褐色土・FPを多量に含む
8. いよいよ黑褐色土・ローム粘土を多量に含む
9. 黑褐色土・FPを少量含む
10. 黑褐色土・ローム粘土を含む
11. 黑褐色土・ローム粘土を含む
12. ローム土
13. 黑褐色土・FPを多量に含む
14. 黑褐色土・FP・ローム粘土を含む
15. 黑褐色土・FPを少量含む
16. 黑褐色土・FP・ローム土
17. いよいよ黒褐色土・ローム土・ローム土を含む

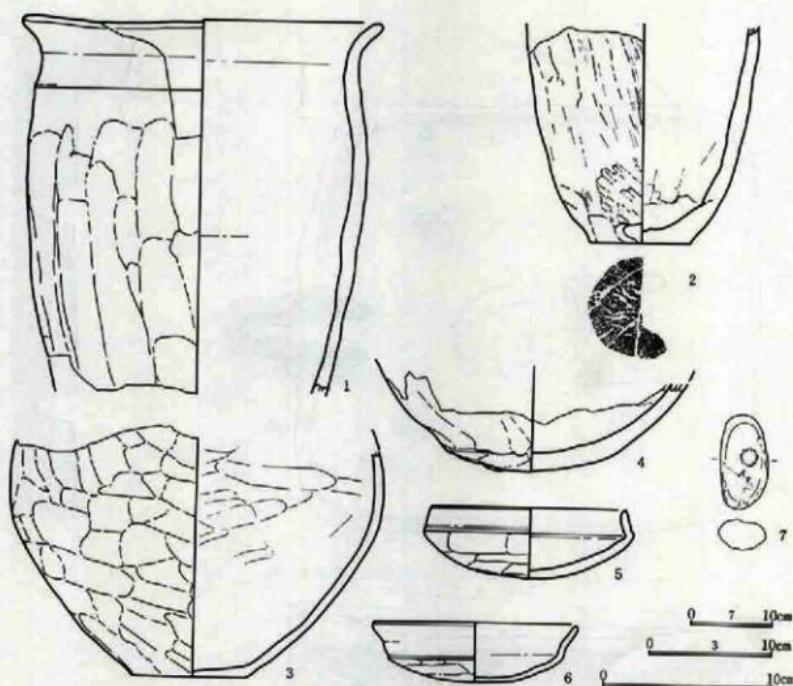
形で深さ45cm、西は35×40cm前後の円形で深さ9cmを測る。

カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部の全長は、1.6m前後、焚き口幅35cm程である。袖部は右袖が55cm、左袖が56cmで、煙道は壁面をトンネル状に1.04m程丸め、煙出部は35cm程の円形に開口する。

遺物は焚き口部と前面に長削器(2)と坪(5と6)、床面中央やや西寄りの地割れ内に甕(3)が出土。

10号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	成・整形成法等の特徴・備考
1	土器	20.7	22.7	13.2	粗砂粒	良好	褐色	
2	土器	20.7	6.0	粗砂粒少	良好	赤褐色		既往未発見
3	土器	20.7	9.4	粗砂粒	良好	淡褐色～赤褐色		
4	土器	11.8	4.4	粗砂粒少	良好	淡褐色		
5	土器	12.0	3.6	粗砂粒少	良好	褐色		
6	土器	11.3	4.1	粗砂粒	良好	赤褐色		
7	砾石	長11.3	幅5.8	厚4.1	無	282	石質 砾石安山岩	



第44図 10号住居跡出土遺物

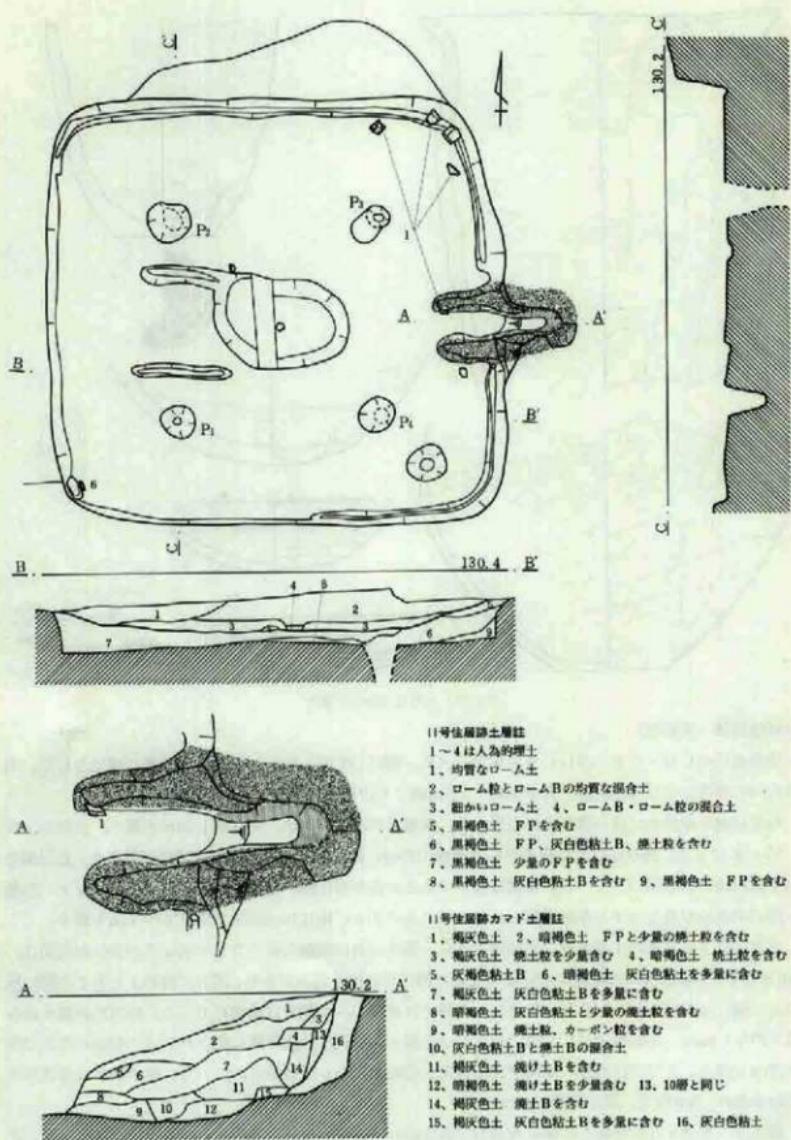
11号住居跡（第45図）

III調査区のC O・C P—38Gにその大半を占め、標高130.00～130.20m前後の低地に検出された。南東方向に接近して12号住居跡、北東方向に6.5m隔てて10号住居跡が位置する。

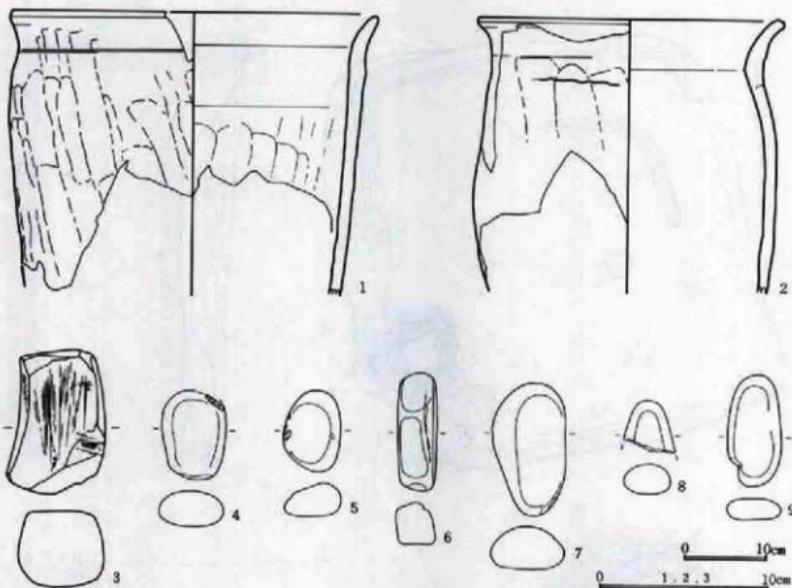
形状は南北が僅かに長い隅丸方形を呈する。規模は東西長5.54m、南北長5.66mを測る。主軸は、N—85°—Eにとる。掘り込みは残存の良い北東隅で79cm、最も残存の悪い南西隅で13cmを測り、北辺部分の上面が緩やかに開口している。床面は僅かであるが西部に緩やかな凹凸がある。周溝はカマド右袖～南辺中央やや東とカマド左袖部脇から北西隅に連続する。幅は10cm前後で深さ2～7cmを測る。

柱穴はP 1～P 4の4本主柱穴が検出された。湧水の為に明確な掘り方は不明な点が多いが柱間は2.4mを測る。中央部分には東西に長いやや並んだ梢円形の掘り込みがあり、西方にはP 1とP 2の間に扇の足の様に2本の溝状の掘り込み併走し、北側では接続し、南側では途切れている。梢円形の掘り込みは東西長1.63m、南北最大長1.09mで深さ21cmを測る。貯蔵穴は南東隅に配され、47×42cmの円形で深さ29cmを測る。カマドは東辺のほぼ中央部に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部までの全長は1.5m程で、焚き口幅は30cmを測る。

覆土は、6～8号住居跡と同様に人為的な客土のローム粒・ロームBが見られる。遺物は北東隅、カマド周辺、中央土坑等に散在して出土。



第45図 11号住居跡



第46図 11号住居跡出土遺物

11号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考		
								4	5	6
1	土師器長削器	21.5	<17.0		粗砂粒	良好	淡褐色			
2	土師器長削器	(18.2)	<16.9		粗砂粒	良好	淡褐色～赤褐色			
3	砾石	長 8.6	幅 5.9	厚 4.8	重 311	石質	砂岩	4	砾石	長 10.7 幅 7.7 厚 4.6 重 598 石質 麦賀安山岩
5	砾石	長 9.8	幅 6.9	厚 4.0	重 347	石質	砾石安山岩	6	砾石	長 14.1 幅 4.8 厚 5.1 重 596 石質 砾石安山岩
7	砾石	長 16.0	幅 8.8	厚 5.2	重 741	石質	砾石安山岩	8	砾石	長 6.1 幅 6.3 厚 3.9 重 181 石質 砾石安山岩
9	砾石	長 13.4	幅 6.6	厚 3.0	重 432	石質	砾石安山岩			

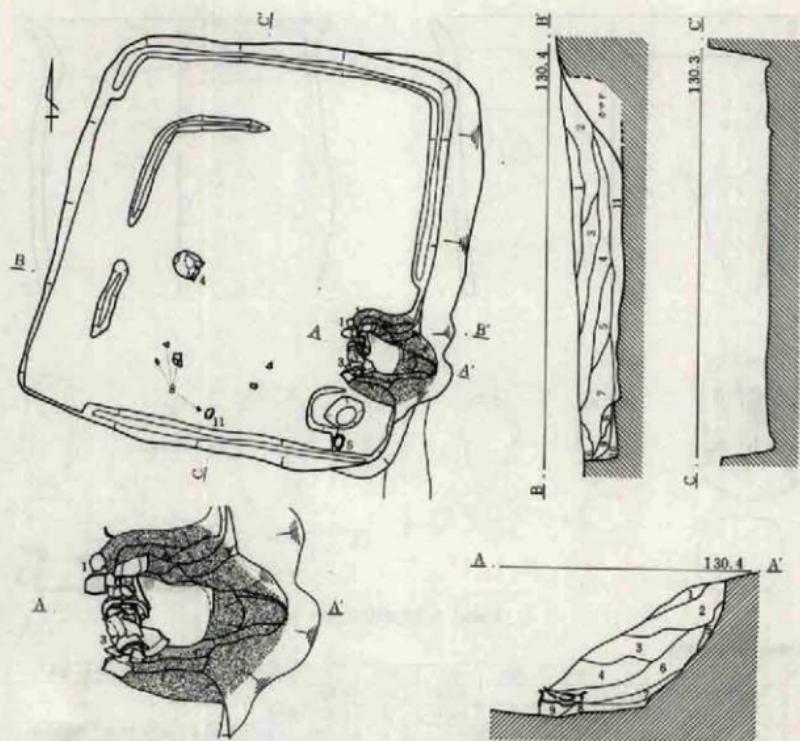
12号住居跡（第47図）

III調査区のC N・C O-39Gにその大半を占め、標高129.90~130.40m間に検出され、東辺部分が西傾斜面と低地面の変換部分に位置する。北西方向に接近して11号住居跡がある。

形状はやや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は東西長5m、南北長5.35mを測る。主軸は、E-13°-Sにとる。掘り込みは傾斜→低地面への変換部の東壁で85~90cm、北西隅で57cm、南西隅で45cmが残存し、東壁の上面が開口する。床面は平坦なローム面である。周溝は東壁のカマド左袖脇～北壁～北西隅と南壁沿いに検出され、幅12~20cmで深さ3~6cmを測る。また、北西～西方の床面にも周溝状の掘り込みがあり、当住居跡は拡張が考えられる。柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴はカマド右袖部の脇に配され、44×37cmの楕円形で深さ36cmを測る。この掘り込みを囲む様に西側には蓋受け状の浅い段が見られる。

カマドは東辺の南寄りに灰白色粘土によって構築され、両袖部先端に礫を芯材とする。焚き口から煙道部までの全長は1.1m、焚き口幅46cmを測り、焚き口部の天井は2個体の長甕（1と3）を連結して袖



第47図 12号住居跡

12号住居跡土層記

- 1、黒褐色土 FPを含む
- 2、暗褐色土 FPを含む
- 3、黒褐色土 FPと燒土粒を含む
- 4、深褐色土 FPを含む
- 5、暗褐色土 FPと燒土粒を含む
- 6、暗褐色土 ローム粒を含む
- 7、暗褐色土 ロームB、ローム粒を少量含む
- 8、暗褐色土 ロームB、ローム粒を含む
- 9、黒褐色土 FPを含む
- 10、暗褐色土 II、暗褐色土 灰白色粘土、燒土粒、ロームBを含む

12号住居跡カマド土層記

- 1、暗褐色土 FPを含む
- 2、褐色土 燃土粒を多量に含む
- 3、暗褐色土 灰白色粘土、燒土粒を含む
- 4、暗褐色土 灰白色粘土と少量の燒土粒を含む
- 5、暗褐色土 灰白色粘土と燒土粒を含む
- 6、褐色土 燃土粒・焼土粒を多量に含む
- 7、黒褐色土 燃土粒を少量含む
- 8、暗褐色土 燃土粒を少量含む

部先端に配された疊に架けられたと考えられる。

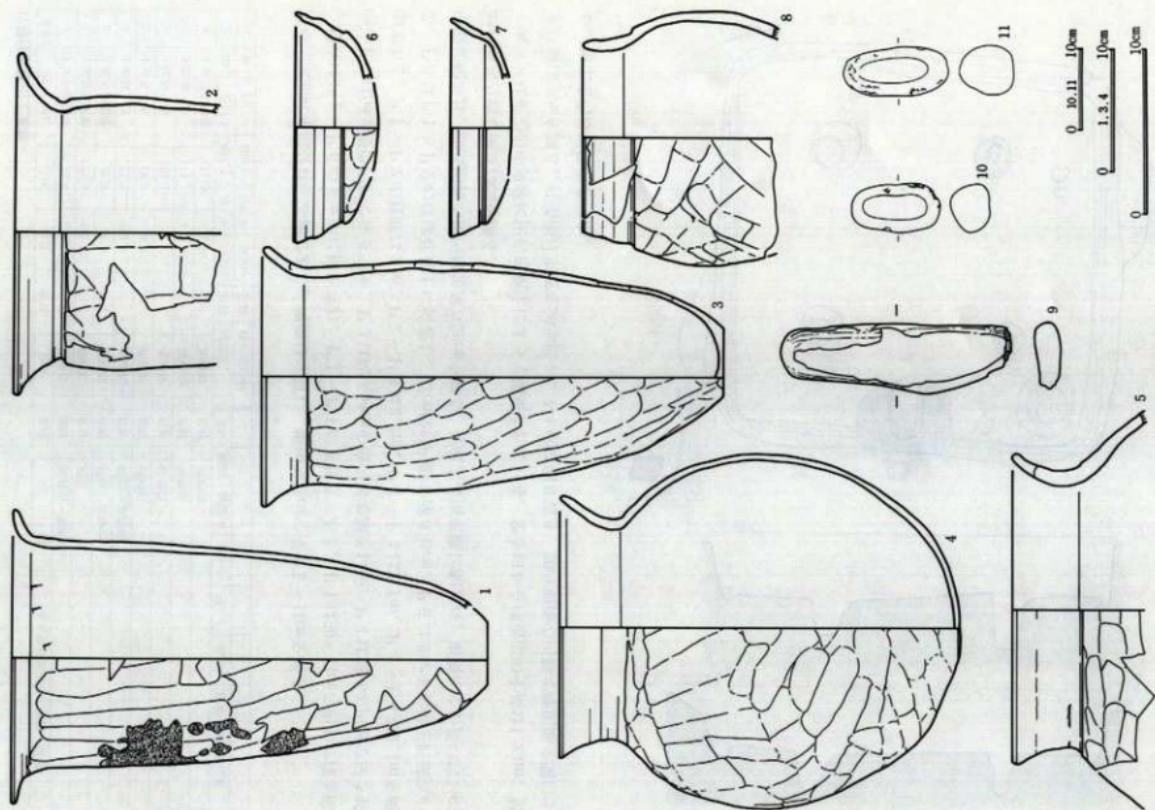
遺物は床面中央やや西寄りで甕(4)、貯蔵穴周辺と南寄りの床面に甕・壺・編石が散在して出土。

13号住居跡(第49図)

II調査区の北方でC H・C I-52Gにその大半を占め、標高133.60m前後の台地平坦部に検出され、当調査区における唯一の遺構である。

形状は一辺が4.95m前後を測る隅丸方形を呈し、主軸はN-69°-Eにとる。掘り込みは、55~65cmを

第48圖 12號住居跡出土遺物



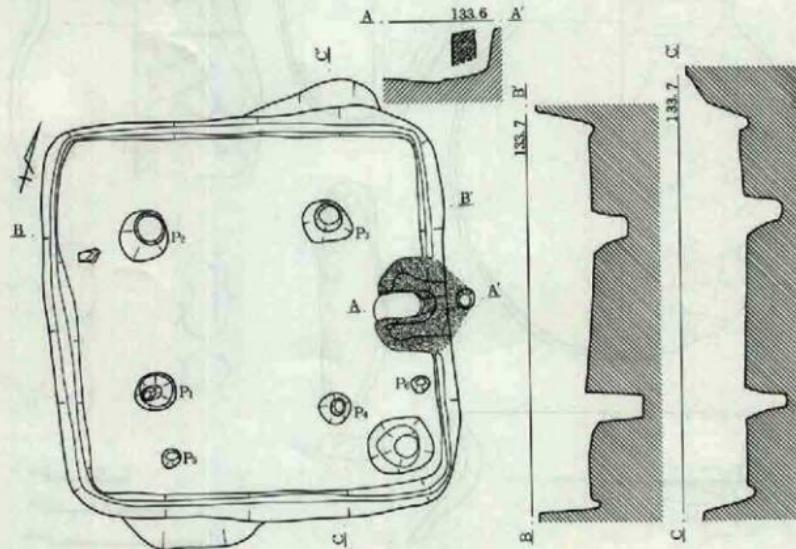
12号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	高さ	底様	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長柄甕	23.8	437.6		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	
2	土師器長柄甕	20.5	412.6		粗砂粒	良好	褐色	
3	土師器長柄甕	20.8	38.0	5.4	粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
4	土師器 瓢	21.1	32.8		粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
5	土師器 瓢	18.5	< 8.2		粗砂粒	良好	淡褐色	
6	土師器 瓢	(13.1)			微砂粒	良好	淡褐色	
7	土師器 瓢	(13.1)	(3.8)		粗砂粒	良好	黄褐色	
8	土師器小型甕	(11.0)	(11.8)		粗砂粒	良好	淡褐色	
9	礫石	長14.0	幅4.3	厚1.6	重142	石質 隕石岩	10	礫石 長10.6 幅5.9 厚4.8 重361 石質 隕石安山岩
11	礫石	長12.5	幅6.0	厚6.6	重350	石質 隕石安山岩		

測る。床面は平坦なローム面である。周溝は全周し、幅10~28cmで深さ5~11cmを測る。

柱穴はP 1~P 6の6カ所に検出され、P 1~P 4が主柱穴である。P 1は50×44cmの円形で深さ65cm、P 2は58cm程の円形で深さ58cm、P 3は62×54cmの楕円形で深さ44cm、P 4は38cmの円形で深さ49cmである。P 1~P 2の柱間は2m、P 2~P 3は2.2m、P 3~P 4は2.2m、P 4~P 1は2.3mを測る。P 5はP 1とP 2のほぼ延長線上に位置し、22cm程の円形で深さ31cm、P 6はカマド右袖と貯蔵穴の中間に配され、20cm前後の楕円形で深さ28cmを測る。貯蔵穴は南東隅に配され、東西にやや長い77×67cmの隅丸方形で深さ73cmを測る。

カマドは東辺の中央部に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部の全長は1.23m、焚き口幅は28cmを測る。煙道部は東壁を56cm程トンネル状に削り貫き、20cm前後の円形で煙出部を開口する。出土遺物は皆無であった。



第49図 13号住居跡

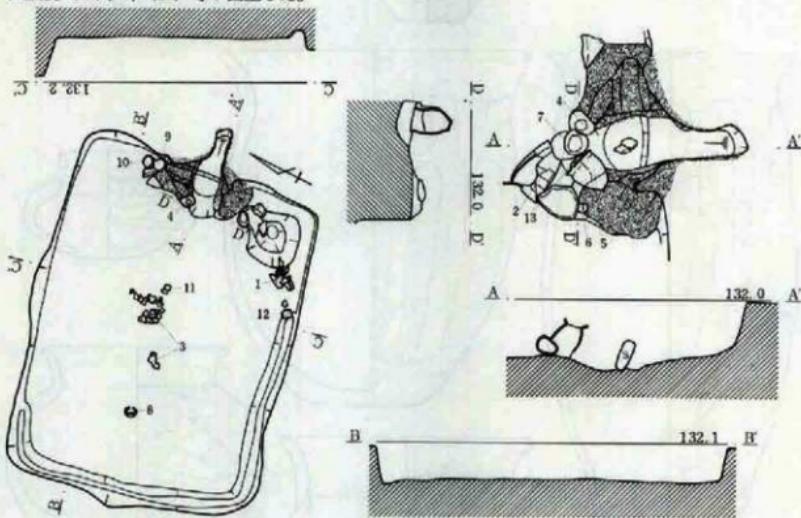
14号住居跡（第50図）

I調査区のBO-59・60Gに跨がって標高132.10~132.20mの台地平坦部に検出され、南方に15号住居跡が隣接する。

形状は東西に長い隅丸長方形で南北が短い。規模は東西長4.40m、南北長3.18mを測る。主軸は、N-77°Eにとる。掘り込みは残存の良い北東隅で48cm、残存の悪い南壁中央で17cmである。床面はほぼ平坦なローム面である。周溝は北西隅～南壁中央やや東寄りに連続し、幅20cm前後で深さ2~9cmを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、60cm前後の隅丸方形で深さ59cmを測る。北東隅はカマド右袖部と貯蔵穴間に小柱穴をもつ掘り込みが連結する。

カマドは灰白色粘土によって構築され、左袖部先端の芯材として長胴甕(4)、右袖部先端には砾を芯材に設け、この間に長胴甕(2)等を架けて焚き口部天井としていると考えられ、内部に煮沸具として使用された甕(5と7)がある。焚き口から煙道部の全長は1.16m、焚き口幅28cmを測り、燃焼部に支脚石が見られる。

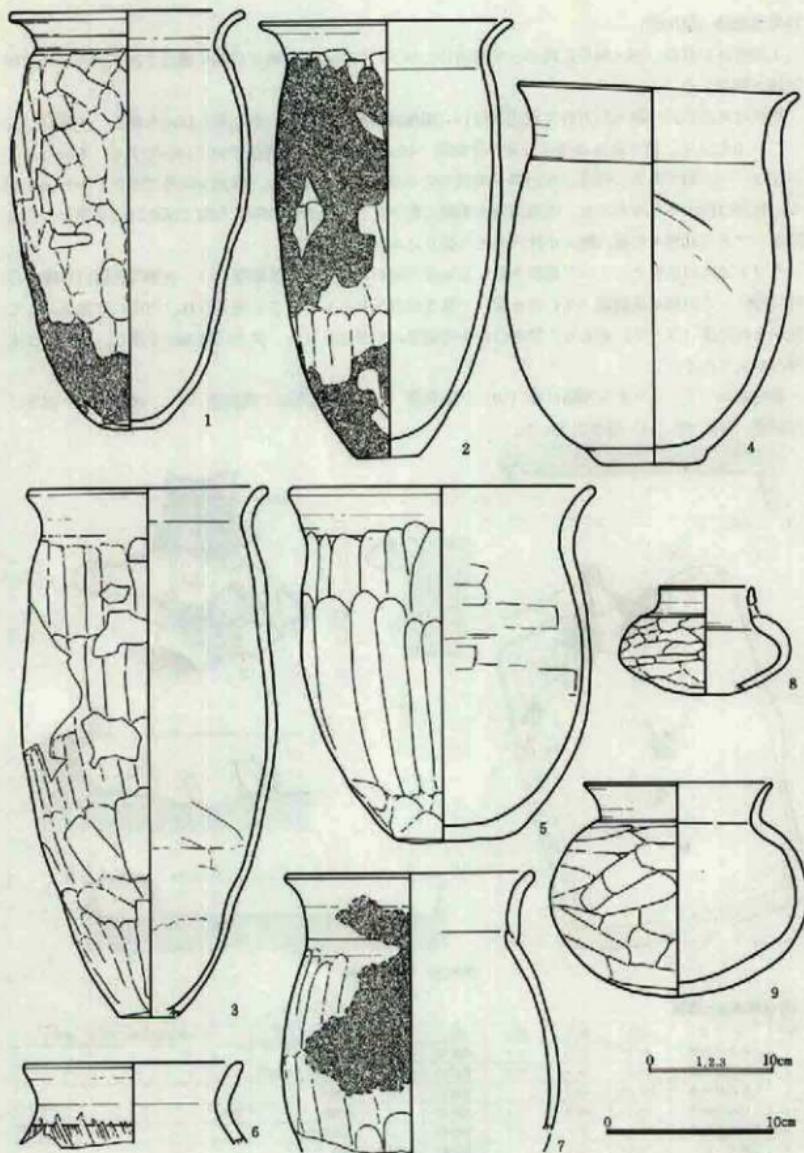
遺物はカマド、カマド左袖脇に甕(10)と小型甕(9)、貯蔵穴脇で長胴甕(1)、床面中央～西方に長胴甕(3)、壺(11)等が出土した。



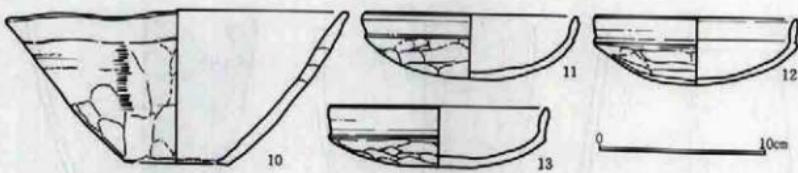
第50図 14号住居跡

14号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	18.5	33.8	4.8	粗砂粒	良好	赤褐色	
2	土師器長胴甕	20.5	35.9	4.9	粗砂粒	良	淡黄褐色～赤褐色	
3	土師器長胴甕	(19.0)	42.5		粗砂粒	良	黒褐色	
4	土師器長胴甕	16.4	22.6	6.4	粗砂粒	良	赤褐色	
5	土師器甕	17.6	21.4	7.1	粗砂粒	良	淡黄褐色	完形
6	土師器甕	(12.0)	<4.9		粗砂粒	良好	褐色	
7	土師器長胴甕	14.7	(16.0)		粗砂粒	良好	褐色	



第51图 14号住居跡出土遺物 (1)



第52図 14号住居跡出土遺物（2）

8	土師器小壺壺	5.6	< 6.30		粗砂粒	良好	褐色	
9	土師器小壺壺	11.4	12.9		粗砂粒多	良好	褐褐色～黒褐色	
10	土師器 壺	20.0	9.3	6.1	粗砂粒	良好	淡黃褐色～暗褐色	単孔孔径4.7
11	土師器 壺	(12.1)	4.0		粗砂粒	良好	褐色	
12	土師器 壺	(12.3)	4.2		粗砂粒	良好	淡黒褐色	
13	土師器 壺	12.8	3.7		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	ほぼ完形

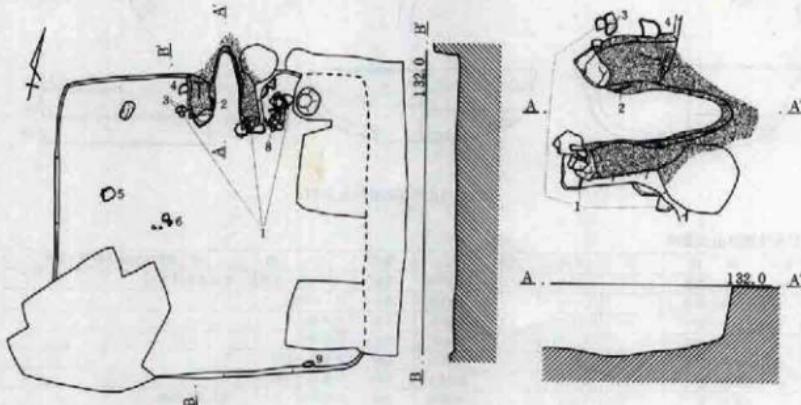
15号住居跡（第53図）

I 調査区のBN-60Gにその大半を占め、標高132m前後の台地平坦部に検出され、北方に14号住居跡が隣接する。カマドの一部、東辺、南西隅部分に擾乱穴が及んでいる。

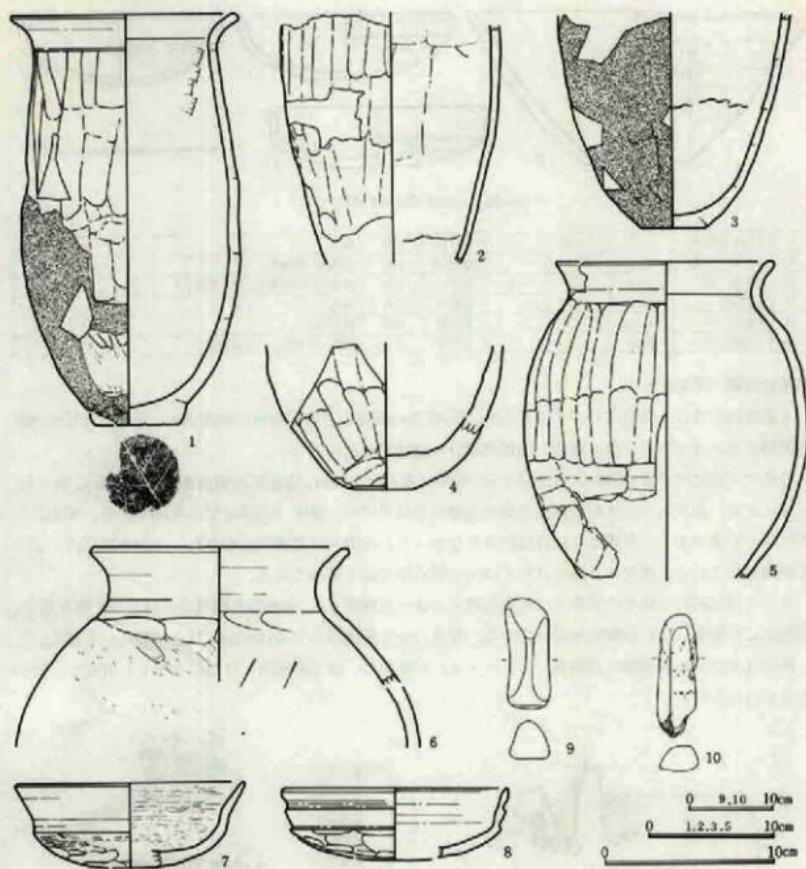
形状は東西にやや長い隅丸方形を呈する。規模は東西長3.80m、南北長3.66mを測る。主軸は、N-11°-Wにとる。掘り込みは比較的残存の良い北壁中央部で29cm、南壁中央部分では9cmである。床面は平坦なローム面である。周溝と柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は北東隅に配され、上面を擾乱穴によって破壊されている。残存する部分は32×28cmの楕円形で深さ58cmである。

カマドは北辺の中央やや東寄りに灰白色粘土によって構築され、両袖部先端部に芯材として砾を設け、左袖部に長胴甕（2）の胴部を用いている。焚き口から煙道部の全長は92cm、焚き口幅35cmを測る。

遺物はカマドの両袖脇に長胴甕（1・3・4）が集中し、西方の床面には甕（5と6）散在し、礫石2点が出土した。



第53図 15号住居跡



第54図 15号住居跡出土遺物

15号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	縦高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長脚甌	18.1	33.8	(7.0)	粗砂粒	良好	淡黄褐色～赤褐色	底部木葉痕
2	土師器長脚甌				粗砂粒	良好	赤～暗褐色	
3	土師器長脚甌		(17.2)	5.1	粗砂粒	良好	淡黒褐色	
4	土師器長脚甌		< 8.7		粗砂粒	良好	淡黄褐色	
5	土師器 壺	(17.0)	(25.3)		粗砂粒	良好	黄褐色～褐色	
6	土師器 盆	(15.0)	(22.0)		粗砂粒少	良好	淡黄褐色～褐色	
7	土師器 环	(13.6)	(5.1)		粗砂粒	良好	淡黄褐色	内面黑色研磨
8	土師器 环	(13.7)	(4.5)		粗砂粒	良好	褐色	
9	礫石	共13.4	幅5.3	厚4.7	重483	右質	花崗閃綠岩	10 細石 長14.7 幅4.9 厚3.8 重378 右質 鹽石鞍山岩

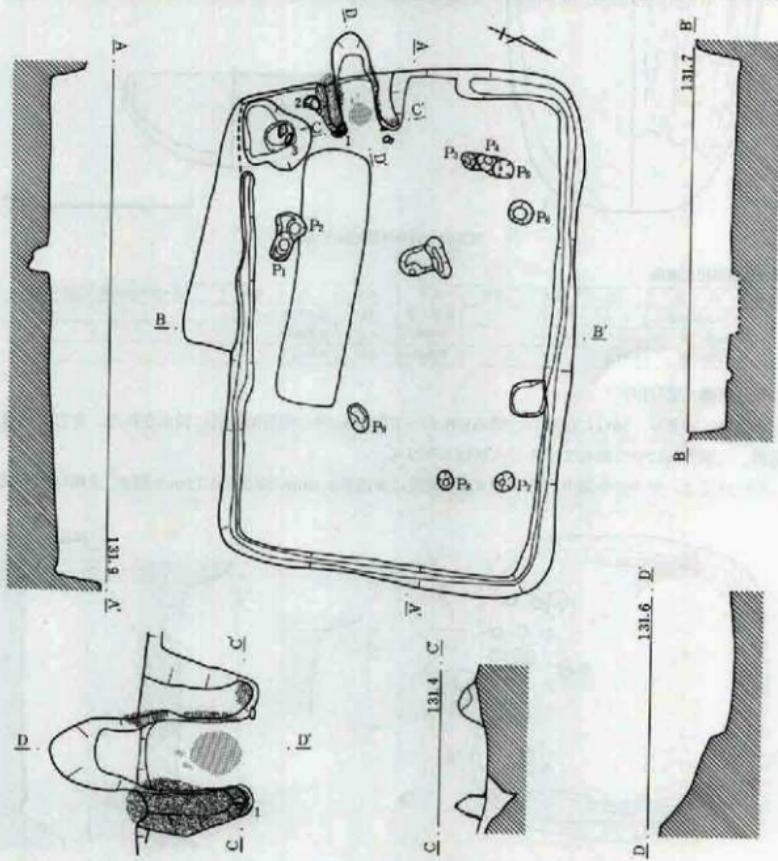
16号住居跡（第55図）

I調査区のB K・B L—55Gにその大半を占め、標高131.50～131.90m間の南西傾斜面に検出された。北東方向に22mほど隔てて14・15号住居跡、南方に18m隔てて17号住居跡が位置する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西長6.3m、南北長4.16mを測る。主軸は、掘り込みは残存の良い南東部で58cm、カマド周辺で40cm前後である。床面はほぼ平坦なローム面である。周溝はカマドと貯蔵穴部分を除いて連結する。幅15～30cm、深さ2～8cmを測る。

柱穴はP1～P10が検出されたが、主柱穴は明確でない。貯蔵穴は南北隅に配され、歪んだ8の字状の掘り込みに36×30cmの楕円形で深さ46cmの掘り込みをもつ。

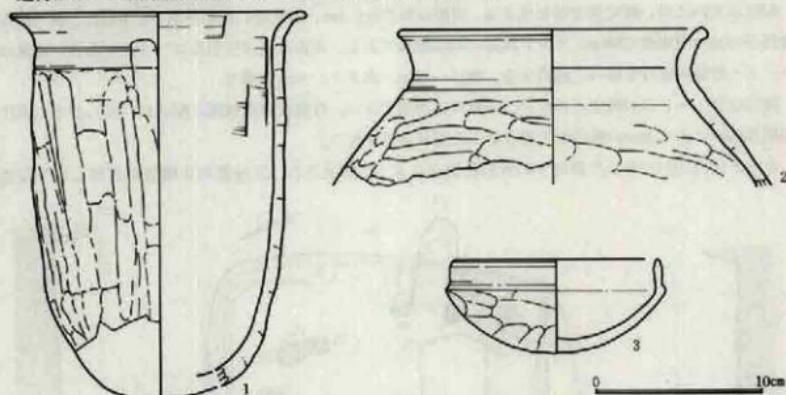
カマドは西辺の中央より南寄りに灰白色粘土によって構築され、左袖部の先端部に芯材として長甃



第55図 16号住居跡

(1)を設けている。焚き口から煙道部の全長は1.2m前後で、焚き口幅40cmを測る。煙道部は舌状に東壁より50cm程張り出す。

遺物はカマド左袖部脇に壺(2)と貯蔵穴に环(3)が出土。



第56図 16号住居跡出土遺物

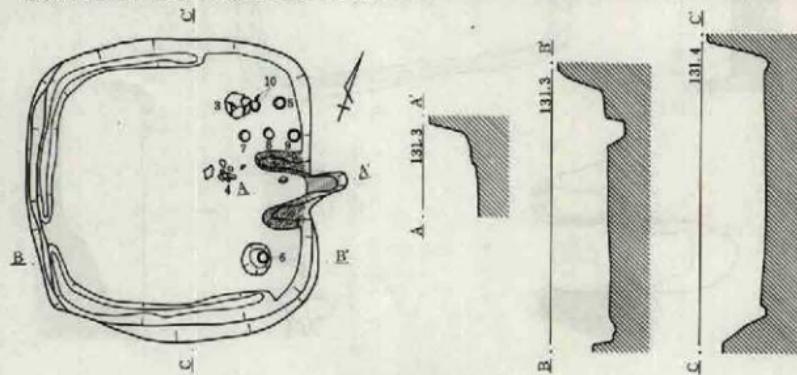
16号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器具倒壺	17.3	<23.1		粗砂粒多	良好	淡赤褐色	
2	土師器 瓢	(18.0)	<9.4		粗砂粒	良好	淡黄褐色	
3	土師器 环	12.2	5.6		粗砂粒	良好	黑褐色	

17号住居跡(第57図)

I調査区のB G—56 Gに位置し、標高130.80~131.30m間の南西傾斜面に検出された。北方に16号住居跡、南東方向にやや離れて1号住居跡が配する。

形状は南北にやや長い隅丸方形を呈する。規模は東西長3.46m、南北長3.71mを測る。主軸は、N—66°

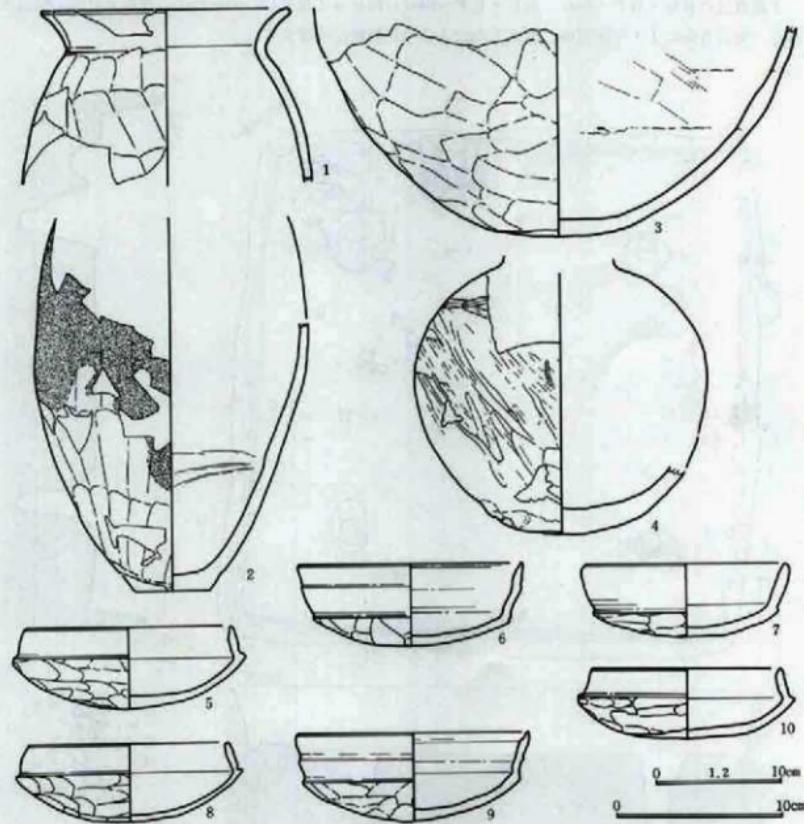


第57図 17号住居跡

—E にとる。掘り込みは傾斜面上方に位置する東壁で53~74cm、西壁で23~33cmが残存し、南東部分の上面が開口する。床面は平坦なローム面である。周溝は北壁中央やや東~西壁中央やや南、南壁~南西隅に検出された。幅10~20cm、深さ3~7cmを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、38×33cmの楕円形で深さ24cmを測る。

カマドは東辺のほぼ中央部分に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部の全長は1.05m、焚き口幅45cmを測る。煙道部は東壁から住居跡外に幅25cm、長さ45cmで突出する。

遺物は、カマド内より同一固体と考えられる長胴甕(1と2)、貯蔵穴内部に壺(6)とカマド左袖部周辺に壺・甕が集中して出土。



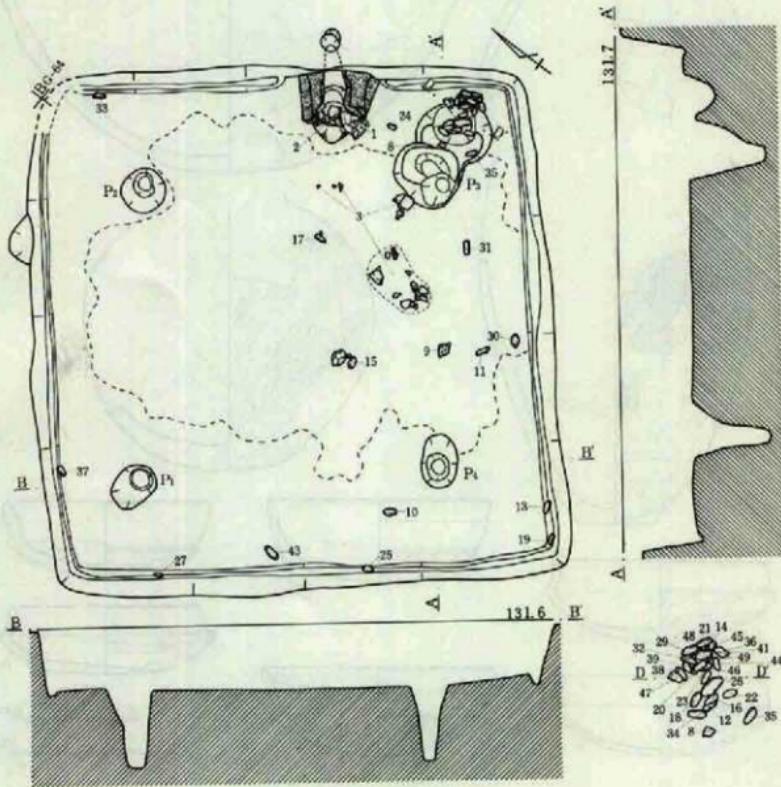
第58図 17号住居跡出土遺物

17号住居跡出土遺物

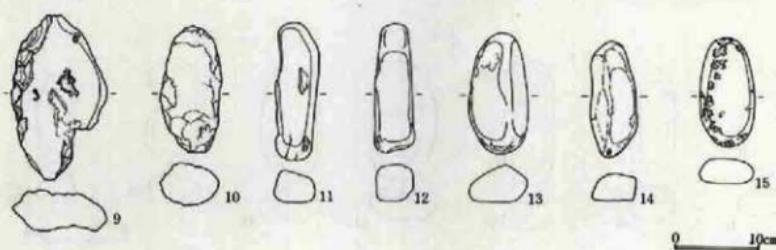
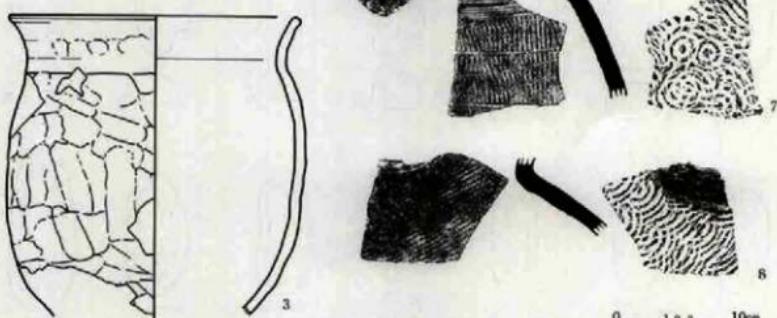
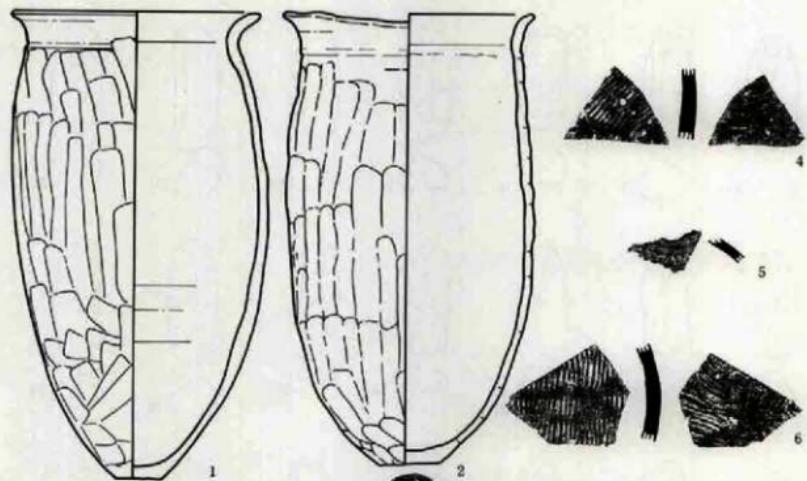
番号	器種	口径	標高	底性	動土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・考叡
1	土師器長颈甌	19.5	(14.6)		粗砂粒	真	淡黃褐色～赤褐色	
2	土師器長颈甌		<30.6)	(6.0)	粗砂粒	真	褐色～黑褐色	
3	土師甌 杯		(13.2)		粗砂粒	良好	淡黃褐色～黑褐色	
4	土師器 盆		(16.0)		粗砂粒	良好	褐色～黑褐色	
5	土師器 坎	12.3	4.9		粗砂粒	良好	淡赤褐色～黑褐色	
6	土師器 坎	13.6	5.1		粗砂粒	良好	褐色～黑褐色	
7	土師器 坎	12.0	4.4		粗砂粒	良好	淡黃褐色～黑褐色	
8	土師器 坎	11.9	4.8		粗砂粒	良好	褐色～黑褐色	
9	土師器 坎	13.8	5.4		粗砂粒	良好	黑褐色	
10	土師器 坎	11.5	4.3		粗砂粒	良好	淡褐色～黑褐色	

18号住居跡（第59図）

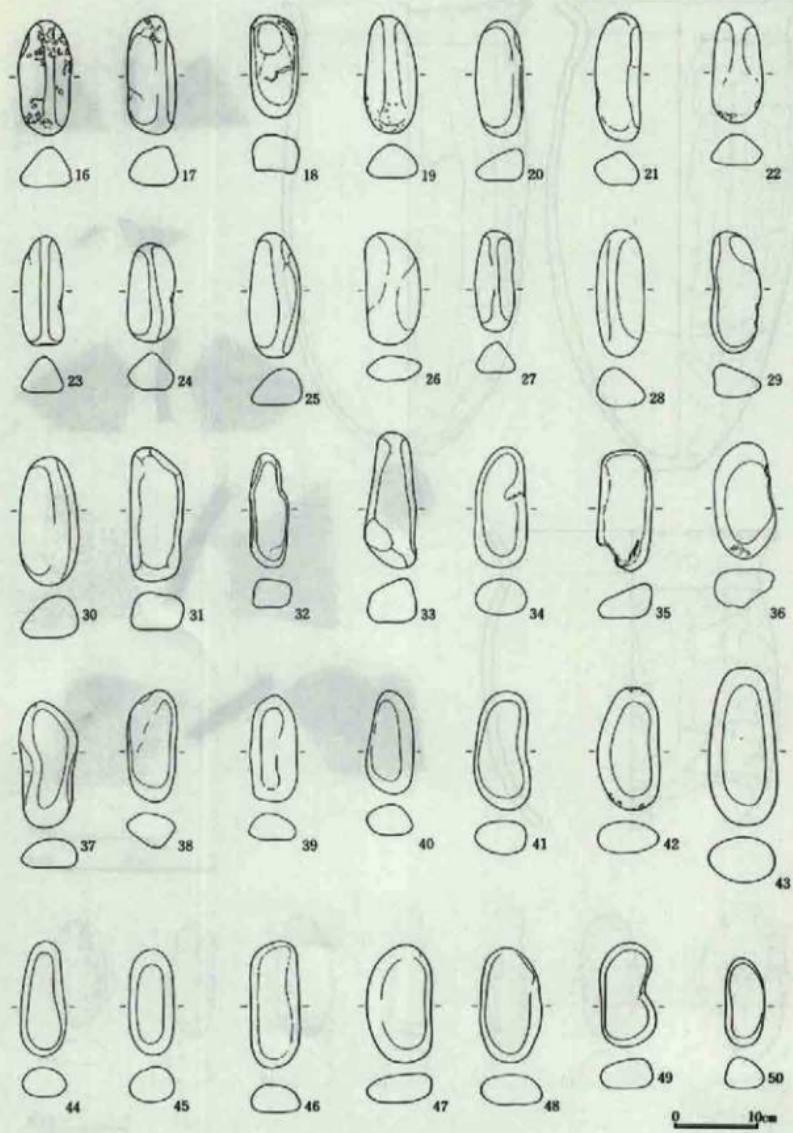
I調査区のBE・BF-63G、BE・BF-64Gに跨がって標高131.60m前後の台地平坦部に検出された。南西方向にJ1号住居跡、南東方向にJ3号住居跡が位置する。



第59圖 18號住居跡



第60図 18号住居跡出土物 (1)



第61圖 18號住居跡出土遺物（2）

形状は隅丸方形を呈し、規模は東西6.32m、南北6.46mを測る。主軸は、N-53°-Eにとる。掘り込みは最大が北隅で87cm、最小が南隅で57cmが残存する。床面は安定した平坦面で、堅致面が4本主柱穴の区画内部から南壁中央部分に広がる。周溝はカマドの両脇から全周する。幅10~20cm、深さ2~8cmを測る。

柱穴は4本主柱穴P1~P4が検出された。P1は58×46cmの梢円形で深さ96cm、P2は53cmの円形で深さ80cm、P3は貯蔵穴と重複し、83×72cmの重んだ梢円形で内部に2カ所の掘り込みがあり、建て替えが考えられる。深さは79と96cmである。P4は64×42cmの梢円形で深さ93cmである。貯蔵穴は東隅に配され、88×78cmの梢円形で深さ79cmを測る。

カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土によって構築され、両袖部の先端に芯材として礫を設ける。この間に長胴焼（1と2）を2つ連結して渡し、焚き口部の天井とする。焚き口から煙道部の全長は1.35m、焚き口幅40cmを測る。煙道部は東壁をトンネル状に47cm程割り貫き、煙出部を26×21cmの円形に開口する。

遺物は貯蔵穴の上面に編石が集中し、合計で42個が出土した。P3~P4に焼（3）が散在して出土。

18号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長財壺	19.6	37.5	3.6	粗砂粒	良好	淡黄褐色～赤褐色	
2	土師器長財壺	19.8	36.2	6.0	粗砂粒	良好	赤褐色	底部木炭痕
3	土師器 長	22.6	<24.0		粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
4	須恵器 長				粗砂粒	良好	青灰褐色	6と同一個体
5	須恵器 長				粗砂粒	良好	暗灰褐色	
6	須恵器 長				粗砂粒	良好	青灰褐色	
7	須恵器 長				粗砂粒	良好	灰褐色	
8	須恵器 長				粗砂粒	良好	灰褐色	
9	繩石 長19.9	幅11.3	厚5.3	重 671	石質	繩石安山岩	10 繩石 長15.2	幅7.4 厚5.3 重712 石質 黒雲母花崗岩
11	繩石 長16.5	幅 5.1	厚4.4	重 521	繩石		12 繩石 長15.5	幅4.8 厚4.7 重549 繩石
13	繩石 長14.4	幅 7.1	厚4.9	重 697	繩石安山岩	14 繩石 長14.1	幅5.7 厚4.8 重506 砂岩	
15	繩石 長13.0	幅 6.5	厚4.5	重 436	繩石安山岩	16 繩石 長13.9	幅6.4 厚5.0 重621 繩石	
17	繩石 長14.2	幅 5.9	厚5.0	重 633	繩石	18 繩石 長12.7	幅5.8 厚4.9 重588 繩石安山岩	
19	繩石 長14.1	幅 6.3	厚3.9	重 565	ひん岩	20 繩石 長14.0	幅5.7 厚3.8 重445 石英斑岩	
21	繩石 長15.3	幅 5.4	厚3.9	重 487	石英斑岩	22 繩石 長13.1	幅6.1 厚3.8 重422 繩石安山岩	
23	繩石 長15.2	幅 5.1	厚4.5	重 445	花崗閃綠岩	24 繩石 長11.8	幅5.7 厚4.5 重399 繩石	
25	繩石 長15.0	幅 6.1	厚4.3	重 565	繩石安山岩	26 繩石 長13.3	幅6.6 厚3.4 重428 繩石安山岩	
27	繩石 長12.1	幅 4.8	厚4.0	重 312	繩石	28 繩石 長15.2	幅6.8 厚4.6 重654 繩石安山岩	
29	繩石 長14.4	幅 6.1	厚4.1	重 487	花崗閃綠岩	30 繩石 長15.5	幅7.1 厚5.0 重801 繩石安山岩	
31	繩石 長16.0	幅 6.5	厚4.6	重 825	繩石	32 繩石 長13.8	幅4.7 厚4.1 重375 繩石安山岩	
33	繩石 長16.3	幅 6.2	厚5.2	重 747	繩石	34 繩石 長14.5	幅6.3 厚4.3 重666 繩石安山岩	
35	繩石 長14.5	幅 6.6	厚5.2	重 664	火山噴出岩	36 繩石 長13.9	幅7.4 厚5.0 重703 花崗斑岩	
37	繩石 長15.2	幅 6.9	厚3.8	重 639	繩石	38 繩石 長13.3	幅6.0 厚4.1 重455 繩石	
39	繩石 長12.7	幅 5.7	厚3.4	重 360	石英斑岩	40 繩石 長12.2	幅5.7 厚3.7 重383 砂岩	
41	繩石 長14.3	幅 6.7	厚4.0	重 596	繩石安山岩	42 繩石 長14.7	幅7.5 厚3.8 重656 繩石安山岩	
43	繩石 長19.0	幅 6.2	厚5.4	重 1369	繩石安山岩	44 繩石 長14.0	幅6.5 厚3.7 重398 繩石安山岩	
45	繩石 長13.8	幅 5.5	厚4.3	重 508	繩石安山岩	46 繩石 長15.4	幅6.8 厚3.8 重576 ひん岩	
47	繩石 長14.3	幅 8.0	厚3.6	重 693	花崗閃綠岩	48 繩石 長14.0	幅7.4 厚3.8 重596 グリントフ	
49	繩石 長12.6	幅 6.6	厚3.6	重 471	繩石安山岩	50 繩石 長10.7	幅4.7 厚3.7 重290 繩石安山岩	

V 歴史時代以降の遺構・遺物

19号住居跡（第62回）

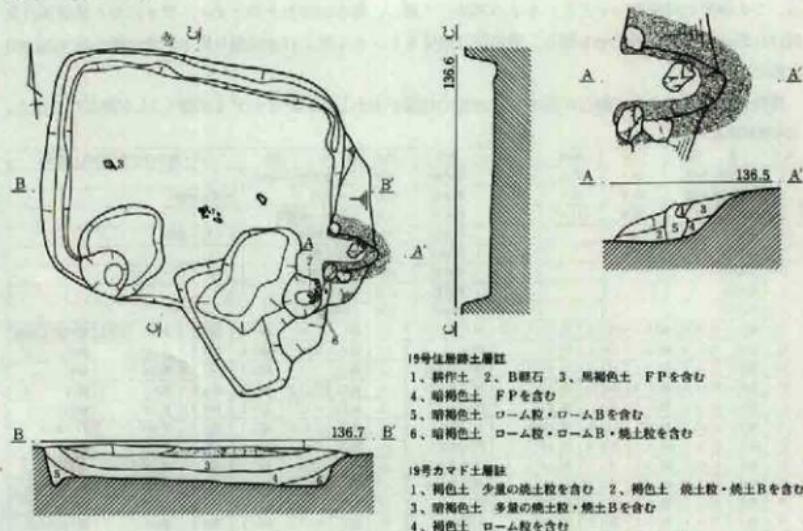
IV調査区の南方でDM-16Gにその大半を占め、標高136.40~136.70m間の緩やかな南傾斜面に検出された。調査区の北方に地割りの溝が南北に走行する。同台地の西縁辺部には、点在して同期の住居跡

が存在すると推定される

形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、南壁部分の2カ所に攤乱穴がある。主軸は、E—13—S にとる。規模は東西長3.59m、南北長3mを測る。掘り込みは残存の良い北西隅で50cm、南壁中央部分で33cmである。床面はほぼ平坦なローム面である。周溝は北東隅から南西隅に連続し、幅16~25cm、深さ3cm前後を測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、50×45cmの円形気味で深さ31cmを測る。

カマドは東壁の南寄りに褐色粘土と礫によって構築され両袖部先端に礫を芯材として設けている。全長65cm、焚き口幅30cm前後を測る。覆土の上面にB軽石が堆積する。

遺物は貯蔵穴と床面に土師器と須恵器の坏、高台付窓(4)・高台付皿(5)と覆土より砾石(8)が散在して出土した。



第62図 19号住居跡

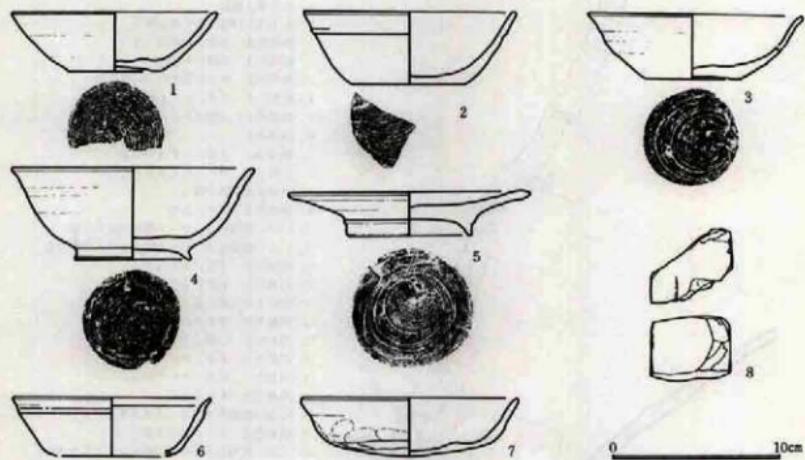
19号住居跡出土遺物

番号	種類	口径	断面	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	須恵器 坏	(12.1)	3.6	5.0	粗砂粒	良好	黒褐色～淡黄褐色	
2	須恵器 坏	(12.5)	4.4	6.8	粗砂粒少	良好	暗灰褐色	
3	須恵器 坏	(12.7)	4.0	5.7	粗砂粒	良好	灰褐色	
4	須恵器 高台付窓	(14.3)	5.5	6.8	粗砂粒	良好	灰褐色	
5	須恵器 高台付皿	(14.3)	2.7	7.3	微砂粒	良好	灰褐色	
6	土師器 坏	(11.6)			微砂粒	良好	褐色	
7	土師器 坏	(12.8)	3.6		粗砂粒	良	褐色	
8	砾石							

溝状遺構 (第64図)

1号溝

III調査区の中央を東西に D A—45G の標高134.80m付近の傾斜面から低地方向に走行し、1 A号溝が1 B号溝を切り、D B—42G付近で分岐する。1 B号溝に沿って2 A号溝が並走して構築されている。



第63図 19号住居跡出土遺物

1 A号溝は主軸をN—55°—W前後にとり、北西の先端部まで全長46m程を検出した。掘り込みの形状は残存の良い傾斜面で南壁がやや緩やかな立ち上がる片葉研状を呈し、幅2.3m、深さ1.3mを測り、北西方向の低地部分に連れて幅・深さを減じている。覆土から掘り替えが考えられる。

1 B号溝は1 A号溝との交差するD B—42Gから幅を徐々に減じてほぼ真西に走行し、8号住居跡の北東で二股に分岐している。掘り込みの形状は傾斜面で葉研状を呈し、幅3.5m、深さ1.8mで底面幅20cmほどを測る。1 A・1 B号溝とも出土遺物は皆無であった。

2 A・B号溝

2 A号溝は1 B号溝の南側に並走し、幅40cm前後でD B—41Gで消滅する。2 B号溝は2 A号溝と5~5.5m幅で並走し、両者ともに底面が硬化し、道路状を呈している。1 B号溝に共存関係するもの可能性が考えられる。

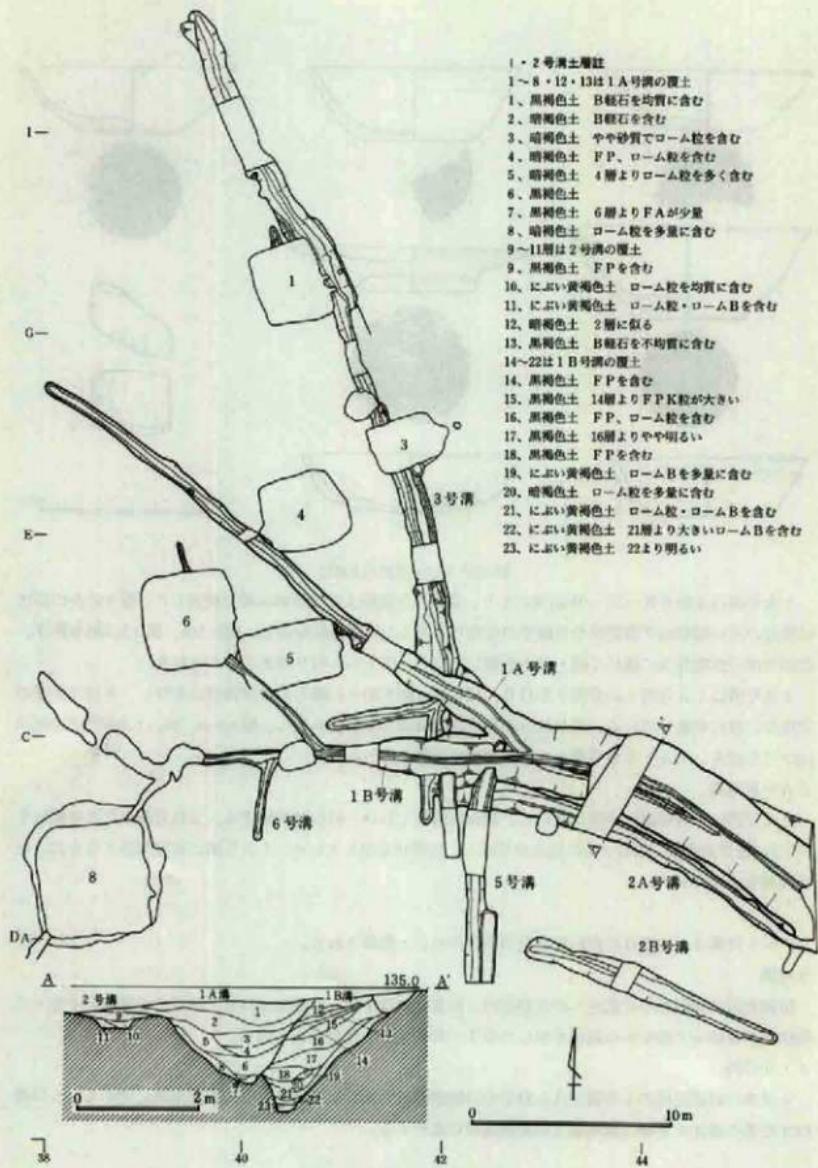
3~5号溝は、地割りに拘わる近世の所産のものと推察される。

3号溝

III調査区の傾斜面から低地への変換部分に南北に走行する。南端部はD B—41Gで1号溝・1号・3号住居跡を切って緩やかな弧状を呈してD J—39Gまで全長43.5mを測る。

4・5号溝

4号溝はIII調査区の1号溝のAとB号の分岐部分から傾斜面を横走して調査区南辺に達する。5号溝は4号溝と並走する様に低地部との変換部分に走行する。



第64図 III調査区溝状遺構

IV 成果と問題点

本調査では、縄文時代の前期前葉～中期後葉と古墳時代後期の所産である遺構・遺物が検出された。縄文前期黒浜式期に比定されるのはJ2号住居跡のみであり、小規模集落の存在が推察され、天神風呂地区では有尾式期の集落が展開している。このことは前期前葉期において南関東エリアを中心とする黒浜式土器圏と群馬県から長野県を中心とする有尾式土器圏が交差する地域と推察される。中期では同台地の先端部付近に選地された稻荷窪A地点遺跡の加曾利E1式期の集落があり、東方で低地を挟んで小林・大畑遺跡・上ノ山遺跡・西小路遺跡等の加曾利E2式期の集落が展開している。

古墳時代後期の集落は、土器様相から6世紀後半と想定する。I・II調査区では調査区が限定されたことと整地作業による破壊部分の為に全容は不明であるが、台地中央部から西傾斜面に分布すると推察される。III調査区では低地部分から傾斜面に分布する。住居跡は、その規模、形状、主軸、カマドの位置・構造等で細分が可能であり、変遷を示している。

本報告書では、紙面の制約から特出すべき遺物として「円筒形土器」と「木の葉型の壺」について考察して見たい。円筒形土器は県内では出土例の少なく、管見では新田町木崎中学校校庭遺跡・柏川村前田遺跡・三ツ寺II遺跡・成塚住宅団地遺跡・竹沼遺跡にある。木崎中学校校庭遺跡では、鬼高II式期の1号住居跡から2点(15・16)出土している。短高のもの(器高31cm、口径14cm)は袖部に立てられ、上部の周縁に抉りを設け、この抉り部に長高のもの(器高47.5cm、口径13.6cm)が横に架けられていたとしている。胎土に砂砾を含み、円筒埴輪のように櫛歯状工具で縦方向の整形をしている。

前田遺跡では、古墳時代の2・5号住居跡から(18～21)出土している。胎土に小砾を多く含み、外面は縦方向の荒いヘラ削りの調整、内面は輪積み痕と指頭圧痕を明瞭に残している。断面は故意に押し潰した様な楕円形を呈している。小島純一氏は調査所見からカマドの焚き口部分を構成したものではないかと私見している。

本遺跡の7号住居跡(17)出土のものは、胎土に砂粒を多量に含み、外面は雑な指撫と輪積み痕を残しカマドに使用された長胴甕に見られる粘土が付着し、片面が二次焼成を受けている。内面には輪積み痕と指頭圧痕を明瞭に残している。出土位置はカマドより離れた南方床面で、支脚状土器や壺の出土状況からカマド廃棄による行為がもたらした結果と推察される。この状況からカマドの構築部材として使用された可能性が考えられる。

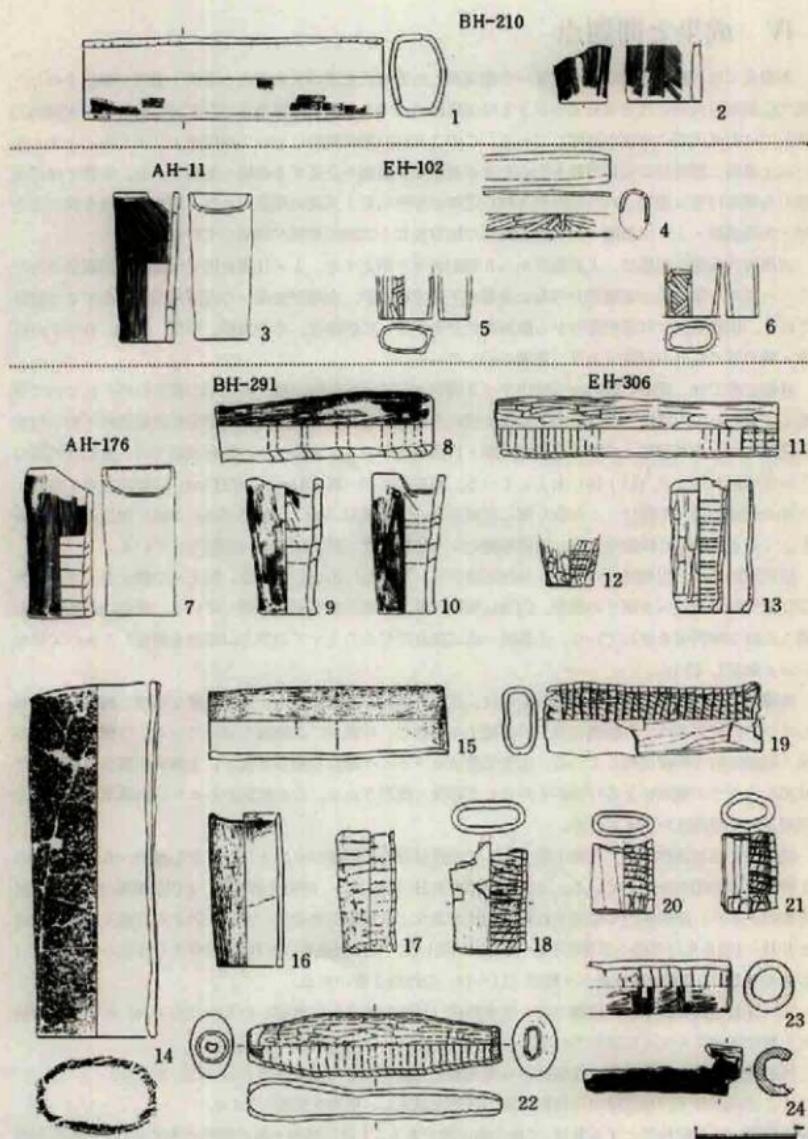
成塚住宅団地遺跡では、円筒土管と称して30件前後の住居跡から出土し、5世紀後半～6世紀後半の1世紀幅の時間差を考えている。5世紀後半のBH-210では、円筒土管(1)と円筒埴輪(2)との併存事例があり、住居跡内で使用された可能性があり、6世紀前半では、AH-11から外面ハケ整形(3)とEH-102からは外面ヘラ整形(4～6)の円筒土管、6世紀後半にもBH-291より外面ハケ整形(7)のものとEH-306から外面ヘラ整形(11～13)の円筒土管がある。

三ツ寺II遺跡4区1号住居跡では、平安時代(10世紀後半～11世紀)のもの(23・24)があり、波状文と横位区画文を交互に施している。

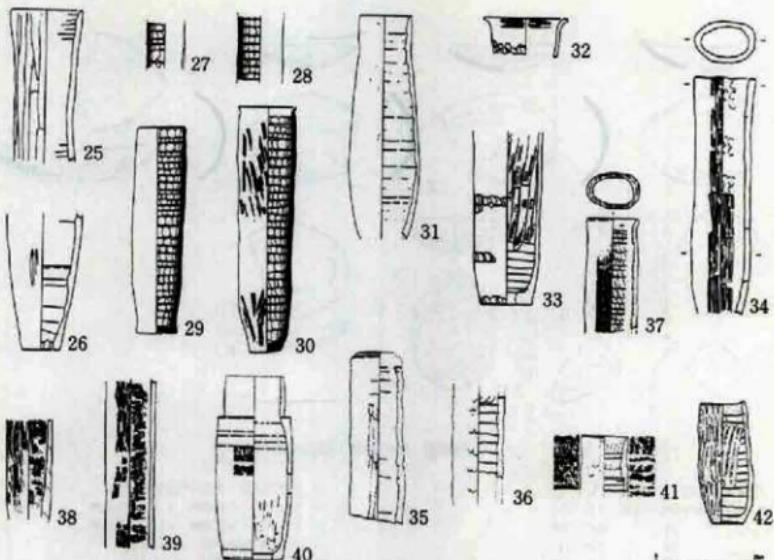
竹沼遺跡では、6世紀代の住居跡から岡先端を先細りにした土錐形のもの(22)がある。

ここで成塚住宅団地遺跡の円筒形土器の変遷を試察し、県内を把握したい。

第1段階 5世紀後半とするBH-210の出土例である。1は円筒形土器の祖形と考えられ、断面形が四角形を呈し、外面ハケ整形である。その使用方法は不明である。同様のものに6世紀半ば頃の居館跡と



第65図 円筒形土器集成図（1）



第66図 円筒形土器集成図（2）

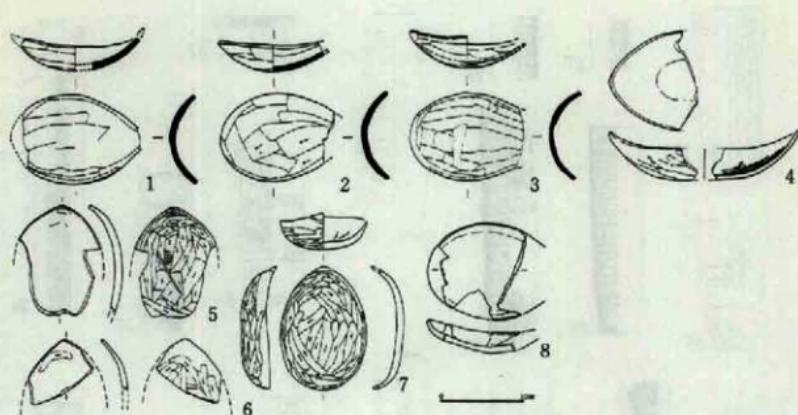
して知られる原之城遺跡の埴輪集積部祭祀で出土している（14）凸帯や透かしのまったくない特殊な円筒埴輪（器高70cm、長径26cm、短径16cm）がある。

第2段階 6世紀前半段階から普遍的に普及するカマドの構築材として使用され、A類のAH-11出土のものは第1段階のハケ整形を踏襲し、円筒埴輪に酷似している。その使用方法は袖部には抉りを施す短高のものに長高のものを天井部として渡架している。埴輪窯が検出されていることから集落内に埴輪工人が居住した可能性があり外面ハケ整形を施すものが製作にかかわったと推察される。木崎中学校校庭遺跡のものに類似する。

B類のEH-102出土のものは、第1段階の断面四角形の形状を踏襲し、外面ヘラ削り整形を施している。

第3段階 6世紀後半では第2段階A類とB類のハケ整形とヘラ整形の系譜があり、カマドの構築材として使用される。ヘラ整形のものは断面円形で内面に輪積み痕と指頭圧痕を明瞭に残す特徴がある。県内の資料は、全てが両端を開口し、県外で見られる底部を有するものやソケット状に連結する様なものは見られない。現時点では、その派生は埴輪工人が県内でのカマド出現期に拘わり、消長は前方後円墳の時期と同じくする7世紀前半と考えらる。

円筒形土器については、西山克己氏が長野県考古学会誌79号で「7世紀代に信濃で用いられた円筒形土器」と題して研究史概略・長野県と山梨県の出土状況・特徴・時期等について論考している。論考を要約すると、「円筒形土器は早ければ6世紀末葉～7世紀初頭にカマドの構築材として天井部材・袖芯材・煙道に用いられ、その機能は長胴型に変化することで円筒形土器が消え去った。（9世紀代との関連は不明）その分布は古墳時代から古代に至る主要地域に集中し、カマドの構築材とする人々は強い地縁



第67図 木の葉形上器集成図

第65・66図

- | | | |
|---------------------|-----------|-----------------------------------|
| 1 成原住宅用地道路 | B H - 210 | 22 緑豊道路群 A区11号住居跡 |
| 2 同 | B H - 210 | 23 郡馬町三ッ寺Ⅱ道路 4区1号住居跡 |
| 3 同 | A H - 11 | 24 郡馬町三ッ寺Ⅱ道路 4区1号住居跡 |
| 4 同 | E H - 102 | 25 長野市田中寺道路 3号住居跡 |
| 5 同 | E H - 102 | 26 長野市田中寺道路 44号住居跡 |
| 6 同 | E H - 102 | 27 長野市田中寺道路 第2号住居跡 |
| 7 同 | A H - 176 | 28 同 第2号住居跡 |
| 8 同 | B H - 291 | 29 同 第7号住居跡 |
| 9 同 | B H - 291 | 30 同 第12号住居跡 |
| 10 同 | B H - 291 | 31 長野市附地道路 A 9号住居跡 |
| 11 同 | E H - 306 | 32 板城町北浦道路 第1号住居跡 |
| 12 同 | E H - 306 | 33 板城町北浦道路 第1号住居跡 |
| 13 同 | E H - 306 | 34 板城町宮上道路 H 3号住居跡 |
| 14 伊勢崎市山之城道路 墓塚横瀬祭祀 | | 35 板城町宮上道路 H 16号住居跡 |
| 15 新田町木崎中学校校庭道路 | 1号住居跡 | 36 板城町宮上道路 第16号住居跡 |
| 16 同 | 1号住居跡 | 37 松本市出川南道路 35号住居跡 (25~37は西山謙文軒載) |
| 17 大胡町福荷庭B地点道路 | 7号住居跡 | 38 上郷市一ノ口道路東地区 S 1113 |
| 18 柏川村前田(F)道路 | 第2号住居跡 | 39 同 同 |
| 19 同 | 第5号住居跡 | 40 豊郷町山三吉日道路 |
| 20 同 | 第5号住居跡 | 41 上三川町野山道路 I K T - 82 |
| 21 同 | 第5号住居跡 | 42 宇都宮市開道道路 |

第67図

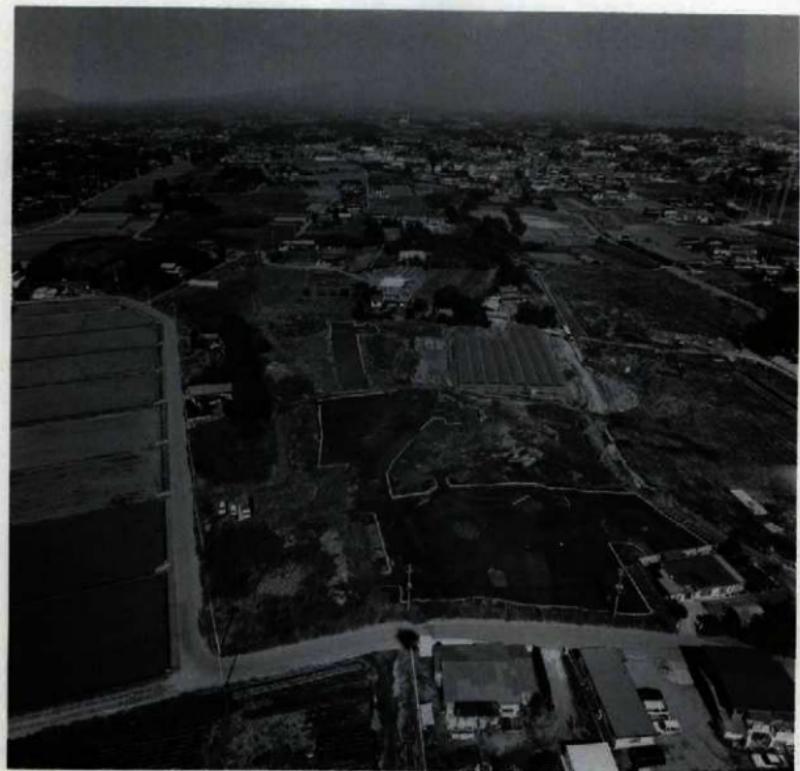
- 1 郡馬町三ッ寺Ⅱ道路 1区22号住居跡
- 2 同 同
- 3 同 5区47号住居跡
- 4 甘楽町天神Ⅱ道路 1号住居跡
- 5 吉井町矢田道路VI 53号住居跡
- 6 同 同
- 7 同 同
- 8 大胡町福荷庭B地点道路 9号住居跡

的・血縁的関係であった」としている。その用途は、カマドの構築材として共通性があるが氏が懸念する様に広域的な解明が必要であり、近県での出土例は新潟県・茨城県等にも散見されており、遠方では、青森県八戸市立博物館図録にも類似品が見られ、その派生と消長等は今後の課題であろう。

「木の葉型の壺」は、管見では県内の事例しか見当たらない。各報告書では、円筒形土器を出土している三ッ寺II遺跡では1区22号住居跡と5区47号住居跡から匙形土器、天神II遺跡1号住居跡では異形壺とし、中沢氏は矢田遺跡で初めて「木の葉型の壺」と称して53号住居跡の遺物を紹介している。甘楽古代館では、三ッ俣遺跡（福祉センター）の出土品として木の葉形土器が展示されている。三ッ俣遺跡では、その残存形状から把手の付く匙状の器形を想定し、天神II遺跡では半分程の個体から両端部を細長く丸める長楕円形の壺を想定したと考えられる。その全容は矢田遺跡53号住居跡のものや三ッ寺遺跡で詳らかになった。平面形は中沢氏の称した「木の葉」の形状であり、法量は長さ14cm・幅10cm・高さ4cm前後を測る。これらは古墳時代後期の範疇に掌握され、円筒形土器と同様に県内では出土例の少ないものであり、その特殊性から祭祀に拘わる供獻器と考えられる。

最後に、関係機関はともより、酷暑の中で発掘調査に従事していただきました作業員及び、遺構・遺物の整理作業に携わった方々の協力に感謝し、まとめとします。

写
真
図
版



遺跡全景

PL-2



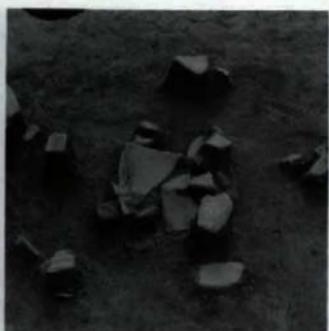
2-1 I・II調査区



2-2 III調査区



3—1 J 1号住居跡



3—2 J 1号住居跡遺物出土状況



3—3 J 2号住居跡



3—4 1号集石土坑



3—5 J 3号住居跡



3—6 2号集石土坑



4—1 1号住居跡（西より）



4—2 同住居跡遺物出土状況



4—3 2号住居跡（西より）



4—4 同住居カマド跡



4—5 3号住居跡（西より）



4—6 同住居跡遺物出土状況



5—1 4号住居跡（東より）



5—2 同住居跡遺物出土状況



5—3 5号住居跡（西より）



5—4 6号住居跡セクション



5—5 6号住居跡遺物出土状況



5—6 同住居跡遺物（No1・2）出土状況



6—1 6号住居跡（西より）



6—2 7号住居跡円筒形土器（No.28）出土状況



6—3 同住居跡セクション



6—4 同住居跡縞石出土状況



6—5 同住居跡遺物出土状況



6—6 同住居跡カマド前面遺物出土状況



7-1 7号住居跡（南より）



7-2 同住居跡カマド



7-3 8号住居跡（西より）



7-4 同住居跡遺物出土状況



7-5 9号住居跡遺物出土状況（南より）



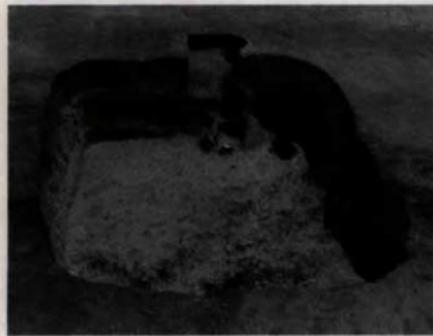
7-6 同住居跡カマド



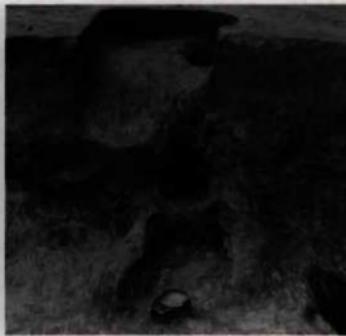
8—1 9号住居跡遺物出土状況（近撮）



8—2 9号住居跡（南より）



8—3 10号住居跡（西より）



8—4 10号住居跡カマド



8—5 11号住居跡（西より）



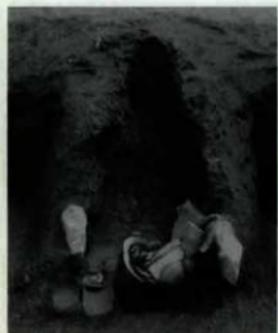
8—6 作業風景



9—1 12号住居跡（西より）



9—2 同住居跡遺物(№4)出土状況



9—3 同住居跡カマド



9—4 13号住居跡（西より）



9—5 14号住居跡（西より）



9—6 同住居跡遺物出土状況



10—1 15号住居跡（西より）



10—2 同住居跡遺物出土状況



10—3 16号住居跡（東より）



10—4 同住居跡カマド



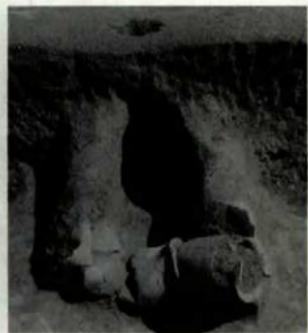
10—5 17号住居跡（西より）



10—6 同住居跡遺物出土状況



11—1 18号住居跡（南西より）



11—2 同住居跡カマド



11—3 同住居跡礎石出土状況



11—4 19号住居跡（西より）



11—5 同住居跡カマド



11—6 1号溝

報告書抄録

フリガナ	イナリクボーチテンイセキ
書名	稲荷窪B地点遺跡
副書名	団体営土地改良総合整備事業茂木地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II
編著者名	山下歳信
編集機関	大胡町教育委員会 / 〒371-0231 群馬県勢多郡大胡町堀越1,115番地
発行年月日	平成10年3月30日

所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
稲荷窪B	大胡町茂木字 稲荷窪・梅沢	10304	36°24'	139°09'15"	H7年6月10日 ~同年10月6日	8,866m ²	土地改良

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷窪B	住居	縄文時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居 3軒 土坑 2基 集石土坑 2基 竪穴住居 竪穴住居 1軒	前期前葉～中期後葉 土師器・須恵器・石製品 土師器・須恵器・石製品	木の葉形土器・円筒形土器の出土

茂木遺跡群発掘調査報告書第II集

稲荷窪B地点遺跡

平成10年3月30日

編 集 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発 行 群馬県勢多郡大胡町教育委員会

■371-0231 群馬県勢多郡大胡町堀越1,115

□027 (283) 1111

印刷製本 朝日印刷工業株式会社
